
異世界物語～剣と少女と少年と～

蒼穹天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界物語〜剣と少女と少年と〜

【Nコード】

N5525S

【作者名】

蒼穹天使

【あらすじ】

西暦20 年、日本。普通の高校生活を送っていたゲーム好きの少年、天枷星は、高校2年を控えた春休み、突然異世界へと転移してしまふ。そこで、モンスターに襲われている所を1人の少女に助けられ……。

救世主となった少年と、彼の仲間との長い旅が始まる！！

プロローグ（前書き）

皆さん、はじめまして。蒼穹天使と申します。このサイトは以前から拝見させていただき、自分も小説書いてみようかなあ、と思い、書いてみることにしました。では、どうぞ。

プロローグ

深い深い、とても深い森の奥。そんな場所に、何かの儀式にでも使うかのような祭壇が、ぽっかりと空いた空間に築かれていた。

正方形をした祭壇は、四方に柱が立ち、中央には石でできた台が設置されている。そしてその上には、心を見透かされそうな程に透明な水晶玉が置かれている。

その前方に、水晶玉を見つめる1人の人間が立っていた。

フードを深く被り、身体全体をマントで覆っているが、マント越しからでも分かる華奢な体型、そしてフードから僅かに覗く透き通るような白い肌から、女性だということが窺える。

女性は、希望に満ちた、しかしどこかもの悲しそうな表情で暫く水晶玉を見つめ続けていたが、思いきったように口を開け、何かを呟き始めた。

魔法。

遙か昔、この世界、《ウェリアル》に於いて、その存在は欠かせなかった。

人々はこぞって新しい魔法を造り出し、より強大な魔法を行使できる人間が大衆を指揮し、魔法文明は揺るぎない繁栄を誇った。

だがある日、それは起こった。

一夜にして、魔法文明は何者かの手により滅ぼされたのだ。

その後、僅かに残った人間で子孫を増やし、数百年という長い歲月が流れていったのである。

何故魔法文明は一夜にして滅びたのか、それを知る者は今となっては数人程しかない。

彼らは魔法を唯一使える存在として、現在は賢者と呼ばれ、ひっそりと生活を送っている。

そして、現在水晶玉に向かい呪文を唱えている女性が、大賢者、アグライアである。

彼女は呪文を唱え終わると、水晶玉に語りかけた。

「世界中の皆様、聞こえていらつしゃいますか。私は、アグライアという者です」

彼女が唱えたのは、水晶玉を通して人々の頭の中に直接語りかける魔法。

その効果は凄まじく、世界中の人々に遍く伝わっていた。

ある町では町人が道にひれ伏し、ある村では村人が歓喜にうち震え、そしてある国では王が感泣した。

それ程までに、ウエリアルの人々にとって大賢者アグライアというのは偉大なる人物なのである。

アグライアは語る。

「この世界は十年後、滅びを迎えます」

人は皆、動揺した。動揺せざるを得なかった。

アグライアは水晶玉を通して見える人々に対して、よく通る、それでいて荘厳さを感じさせる声で続けた。

「しかし、希望を失ってはいけません。十年後、異なる世界より救世主が現れ、必ずやこの世界を救うでしょう……」

そうしてアグライアは語り終えた。

（私の魔力も底を尽きかけている。十年間眠り、魔力を回復させないと……）

そう呟き、大賢者は祭壇を跡にした。

プロローグ（後書き）

改めまして、蒼穹天使と申します。高2です。勉強はあまりしない方だと自負しているので、暇な時等にちよくちよく更新していく予定です。まだまだ未熟故、稚拙な文等ありますが、自分の文章で精一杯執筆していきますので、今後是非ともよろしくお願いいたします。

1、消え去った日常

ゲームのデータが消えた。ゲームを持っている人で、そんな経験をしたことはないだろうか。

特に。

最強の裏ボスを倒した時であったり、非常に入手が困難なレアアイテムを手に入れた時だったり、或いは、地道なレベル上げに耐え、最高レベルに達した時であったり。

一介のゲーマー以上の人間になると、隠し要素を攻略することなども普通であるし、そのプレイ時間、人生に費やした時間は計り知れない。

それこそ、部活の大会（上の方の大会）でやむを得ない理由で不戦敗したり、恋人に別れを告げられるといったぐらいのショックはあるのではないだろうか。

桜もその花を満開に咲かせている三月下旬。どこの学校も春休みの真っ最中で、家でゲームをしている学生も多いことだろう。

日本のとある町のとある家。現在時刻は、午後二時三十分。

三十分前の事。午後二時。

ロール・プレイング・ゲーム

とある大手メーカーのRPGで、二百時間も掛けて主人公のレベルを最大まで上げ、最高クラスのレアアイテムを手に入れ、最強の裏ボスを倒し、九割の喜びと一割の疲労が混じったような顔をしていた少年がいた。

彼の名前は、あまかせせい天枷星。

ゲーマーとして、達成感に浸っていたのだろう。

そして現在。

星の顔に先程までの達成感に満ちあふれた表情は完璧に消え去り、その顔には驚き、焦り、そして絶望の表情が彩られている。

そう、つい三十分前に攻略し終えたゲームのデータが消えたのだ。

「何だよ、これ……」

怒りより落胆の方が大きかったのだろう、星は自室のベッドに置いてある枕に顔をうずめ、悲嘆にくれている。

カーテンの隙間から僅かに覗く空には、太陽を覆い隠すように雲が浮かんでいた。

暫くの間悲嘆にくれていた星は、突然ベッドから立ち上がり、クローゼットを開けて服を取り出した。

今着ている部屋着を脱ぎ捨て、ジーパンに黒の長袖 टीーシャツという格好に着替える。

「気晴らしに散歩にでも行くか」

そう言っ て携帯電話を持って自室を飛び出し、玄関のある1階へと足早に降りていった。

家の近所にある児童公園。

小さな子供達が元気に遊んでいる中、星は一人ベンチに座り落ち込んでいた。

くよくよしてはいけない、なんて事分かっていた。

だが、二百時間もの積み重ねが消えるのは、誰だっ て悔しいだろう。

星は、例のゲームソフトを買った時の事を考えていた。

学校を休んでまでゲーム屋の開店五時間前に並び、無事入手した時の嬉しさ。

直ぐ家に帰り、パッケージを開いた時の喜び。

「あの時は本当、最近で1番嬉しかったなあ」

その顔には自然と笑みが浮かんでいた。

そして気付いた。

新しくゲームを買った時のあの高揚。その感情はプライスレス。

それに彼は、最近で一番嬉しかった事を、レベルが最大まで上がった事でもなく、屈指のレアアイテムを入手した事でもなく、最強の裏ボスを倒した事でもない、ゲームを買った事だと言った。もちろん悔しいし、悲しい。それは当たり前だ。

星は幾分か和らいだ落ち込みを噛みしめ、自宅への帰路に着いた。太陽が雲間から姿を現していた。

扉の鍵を開け、玄関へと入る。

「ただいまー」

返事はないが、星は気にも留めない。

星の両親は仕事で海外に行っているからである。それに、兄弟もいない。そのため、彼は現在1人暮らしをしているのである。

洗面所で手洗いとうがいを済ませ、二階の自室へと向かう。木でできた階段を上り、

自室の扉を開ける。

と、いきなり目の前が真っ白になった。

「な、何だ!？」

突然の出来事に困惑する星。

だが次の瞬間には、何かを考える暇もなく、その意識を失った。日常が消え去った瞬間だった。

1、消え去った日常（後書き）

最初の方でゲームのデータ消失について語っていたのは、私自身のゲームのデータが消えたからです。データが消えた時って、まず啞然としますよね。

次回はもっと長く書ければと思っています。
それでは

2、運命の出会い

「どことも知れぬ密林。

辺りには風が吹きすさび、木々は枝や幹を踊らせ、木の葉や草は強風に耐えることができず宙を飛び交っている。

だが、その激しさにも負けにくいくらい穏やかに、夜空にはたくさんの星が瞬いていた。

そんな宵闇の密林の中で、1人の少年が呆然と立ちすくしながら周りを眺め回していた。

どこを見ても木々が生えている目の前の光景を幾度も見ながら、やっとのことで少年は口を開け、
そして、呟いた。

「ここは、どこだ……」

その言葉がこの少年 天枷星から紡がれるのには、意識が回復してから10分も時間を要した。それ程までにあり得ない出来事が彼に起こっているのだから。

と、星は、ズボンのポケットに携帯電話が入っていることを思い出し、取り出して開いてみた。

時刻は午後7時。では電波は、と確認した星だったが、圏外だった。

「落ち着け、俺」

星はまず自身の置かれている状況を確認する。

「確か公園から家に帰って部屋の扉を開けたら、突然目の前が真っ白になって……」

その先の事は思い出せないのだろう、星は頭をもたげうなだれている。

もつとも、意識がない状態で思い出せる方がおかしいが。

暫くその場に突っ立ってこの状況について考えていたが、ここが密林だという事以外は何も分かるはずがない。かといって、ただ突

っ立っているだけでも何も起こらない。

考えた結果、星は一縷の希望を頼りに密林をどこも知れぬ方向に向かって歩いて行った。

暫く歩くと、洞穴のようなスペースの空いた1本の大木を見つけたので、星はそこで休むことにした。

地面に腰を降ろし、どのくらい歩いただろうか、と考えながら、携帯電話を開く。

表示される時刻は、午後10時。

ざっと2時間30分は歩いたということだ。

長い時間歩いた疲労と未知の場所にいる不安から、そして周りの暗さも相まって、星の身体に眠気が襲い掛かってきた。

星は横になると、あっという間に眠りについた。

明け方と共に目が覚める。

朝特有の冷たい風が1枚しか着ていないTシャツ越しに伝わってくるが、仄かに残る眠気を払拭するにはちょうどよかった。

目覚めた頭で、何をすべきかを考える。

この場に留まり助けを待つか、果てしない密林をさ迷い歩き、出口を見つけるか。

助けが来るなんて保証はもちろんない。大体ここがどこなのかすら分からない。

それなら、一縷の希望に賭けて出口を目指すのが良いのではないか。

暫し悩んだが、星は後者を選択した。

そのまま立ち上がり、大木を後にしようとしたが、突然腹の辺り

から、ぐう、という音がした。

「そういえば、昨日から何も食べてないな」

言いながら辺りを見回すと、近くの木に赤い実が生っているのを発見した。

昨日は疲れと暗さで分からなかったのだろう。

小さくて丸い木の実を1つ摘まむ。

食べても大丈夫なのか星には知る由も無いが、そんな事に拘っている余裕は無い。

覚悟を決めると、口の中に放り込む。

仄かな甘酸っぱさが口の中いっぱいに広がり、弾けた。

「うまいっ。ラズベリーみたいな味だ」

それは、空腹を満たすには十分だった。

20粒木の実を食べ、10粒をズボンのポケットに入れ、星は意気揚々と歩き出した。

さつき見たのはいつだっけ、と考えつつ携帯電話を取り出す。

午後2時30分。

「そういえば、あのゲームのデータが消えたのは昨日のこれくらいの時間だったか」

あれ程執着していたゲームも、今となっては懐かしい。

星にはもう、朝大木を出発した時の元気は微塵もなかった。

どんなに歩いても出口は見つからない。

後悔が襲ってきた。

やはり、あの大木でじっとしていた方がよかったのではないかと助けを待った方がよかったのではないか。

と、進めど木ばかりだった景色に何か他のものが写ったような気がした。

星は、幻覚でも見たのかと思った。

何故なら、微かに遠くに見えるのは青。

密林に青なんて、ともっともな事を考えながら重い足を動かす。見間違いでも幻覚でもない、とすぐに分かった。

さっきの青は、やはり本物。そして、その正体は海。

5分も歩くと、海岸にたどり着いた。左右を見やると、先が見えない程砂浜が続いていた。

「やっと、今までとは違った場所に出た」

その言葉には疲労の色が混じっていたが、それ以上に歓喜の響きがあった。出口を見つけていない事に変わりはないが、ずっと続く同じような景色が途切れたことは、精神的にも安堵したのであろう。星は海岸を左右どちらに進むか迷ったが、右へと進んだ。

暫く歩くと、前方に何か2つの影が立っているのが遠目に確認できた。

「あれは……人か？」

まだ距離がだいぶ離れているので、何が立っているのかは正確には分からない。

少しずつ近づいてゆくと、向こうから反応を示した。

2つの影は人間ではあり得ない速さで走ってきたのだ。

それは例えるなら、いや、まさしく恐竜そのものであった。

星自身、図鑑の絵や博物館の模型でしか見たことはないが、間違えるはずはない。

体長3メートル程で、細くも鋭い爪をもった腕。腕より明らかに太く長い強靱な脚。そして、鋭利な牙を生やす口。

それらは、デイノニクスやヴェロキラプトルといった、小型肉食恐竜を彷彿とさせた。

一瞬啞然とするが、直ぐに危険を察知し、恐竜とは反対側へと走る。

しかし、疲労が溜まっている星では 万全の状態でもだるうが あんな怪物から逃れる術は無い。案の定、10秒もせず追いつかれた。

思わず恐竜の方を振り向く。

恐怖に彩られた顔は、次第に諦めたような顔へと変わっていった。星は初めて死というものを感じ、己の無力さ、不幸を呪った。

そんなことなどお構い無しに、恐竜の鋭い爪が真っ直ぐ降り下ろされた。

その爪は、星の身体を紙くずのように引き裂、かなかった。

否、引き裂けなかった。

何故なら、星を引き裂こうとしていた恐竜が、逆に真っ二つに斬られたからだ。

胴体と下半身とを分断された恐竜は、ドサツ、という音と共に地面に落下、することはなく、黒い塵となって消えさった。

残ったもう1体の恐竜と星はただ呆然としながら、ある1点を見ていた。

その視線の先にいたのは、剣を片手に悠然と立つ1人の少女。

少女は、その直後に地を蹴り、目にも留まらぬ速さで恐竜との間合いを詰める。そして剣を両手に持ち直し、右上段から左下段へと一気に降り下ろした。

その結果、残った恐竜は何も出来ないまま、先程の恐竜のように消えさった。

今起こった出来事を、星は信じられないといった目で見ていた。

1体目の恐竜が死んだ（消えた）時はただ呆然としているだけで何も考えられなかったが、少女を認識し、その少女が2体目の恐竜に向かつていった時は、その無謀さに目を見張った。

自分と同じ人間の少女に、あんな怪物が倒せる訳がない、と。

だが実際、少女は難なく恐竜を切り伏せた。それも一瞬の間に。

星は、さっきの自分の心配が杞憂だった事を知っても信じられなかった。

そんな星の方に、少女は逆に心配そうな顔をして走ってきた。

「大丈夫っ!？」

これが、2人の運命的な出会いだった。

2、運命の出会い（後書き）

前よりは長めに書けましたが、どうでしたでしょうか。10ページとか普通に書ける人が羨ましいです。

今回は、1週間以内には更新出来れば幸いです。 それでは

3、決意

すっかり腰が抜け、その場にへたれこんでいる星。その頭は、今一瞬にして起こった出来事を纏めようとするも、未だに残る恐怖と興奮で混乱していた。

そんな星の側まで駆け寄って来た少女は、とりあえず星を落ち着かせようと、静かに語りかけた。

「もう大丈夫だよ。あのモンスター達は私が倒したから」
その穏やかな顔は、星の心に安心感を与えた。

「だから、君はゆっくり休んでね」
その言葉に頷いた星は、ゆっくりと瞼を閉じた。

数時間後。

空はすっかり暗くなり、月や星がはっきりと見える。

先程の海岸の、少し密林側に寄った場所。

焚き火の向かい側に星を寝かせ、少女はじつとその寝顔を見ていた。

(この人、もしかして)

少女は何かを勘ぐった。

星は目を開けると、自分を見ている少女と目が合った。

「あ、起きた？」

少女は星が起きた事を確認し、ニコニコと微笑んでいる。

星は一瞬きよんとしたが、直ぐにこの少女が自分を助けてくれたのだと察し、礼を述べる。

「さっきは助けてくれてありがとう。君がいなかったら、今頃俺は

死んでいた」

「ううん、無事で何より。ところで、君はどうしてそんな格好でこんなところに？」

自然な疑問を少女は口にした。確かに、ジーパンにティーシャツ一枚でこんなところに来る奴はおかしい。

しかしそれは、常識的に考えて、だ。

不可抗力で来てしまった星は、そもそもの常識から外れてしまっている。

星はこの場所に来た過程を説明するか否か迷ったが、説明することにした。

「実は……」

「で、危ないところに君が現れて、俺を助けてくれたんだ」

全てを語り終えた星は一息吐き、少女の顔色を窺った。

少女はそこまで驚かず、寧ろ、探し人を見つけてもしたような顔をしていた。

「思った通り。やっぱり君は、救世主だったのね」

「は？」

言っている意味が分からない、というふうに、反射的に疑問が返った。

「それは、どういう……」

「10年前のある日、大賢者アグライアが予言したの。10年後、この世界、ウエリアルに、救世主がやってくるって」

少女が何を言っているのか、星には全く分からなかった。だが、この世界を日本、いや地球ではなく、ウエリアルと言った事から、ここが地球ではない事は分かった。

しかし、どうやってこんな場所に来たのか、ただの高校生である星には検討もつかなかった。

タイムマシンが発明されたなんてニュースは聞いたことがないし、バーチャルワールドを訪れる事が出来る機械もない。大体、部屋の扉を開けただけで空間転移なんてするものなのか。

星は尋ねたい事が山程あったが、1番疑問に思っている事を尋ねた。

「どこ、どこ？」

地球ではないと分かってても、具体的にどんな世界なのか、そしてこの密林はどこなのか、星には知るよしもない。

「ウエリアル、っていう世界だよ。そして、ここがデルー密林」

まるで星がこの世界に来る事が分かっていたかのように、自然に説明する少女。

それを疑問に思う星だったが、先程少女が言っていた、予言という言葉を思い出した。

星は、少女に感謝しつつそれを尋ねた。

少女はそれを待っていたかのように、ゆっくりと口を開いた。

「10年前、この世界のどこかに住んでいると云われている大賢者アグラリアが、ウエリアルの人全員の中のどこやっか語りかけたの。『10年後に世界は滅びを迎える。しかし、異なる世界よりやって来る救世主が、必ずこの世界を救うだろう』って」

正直、星には、自分が世界を救う救世主なんていきなり言われても理解出来なかった。

こんなゲームみたいな事が、本当にあるのか。自分は長い夢を見ているのではないか。そんな考えが星の頭をよぎる。

だが、この世界に来た事、それは紛れもない現実だ。

「だけど、何で俺なんだ？さっき恐竜に殺されそうになってた通り、俺には何も力はないけど」

星より力がある人間なんて、そこら中にいるだろう。それに、今星の前にいる少女。彼女はずっと星より強いはずだ。

「それは分からないわ。でも、君は絶対に強くなれる、そんな気がする」

少女はしかし星を弱いなどとは言わなかった。

星は、自分なりに決意を固める。

まだ、何がなんだか分からない。

自分が救世主だなんて信じられない。

だけど、

(救世主っていうのも、悪くないよな)
世界を救いたい。そう思えた。

3、決意（後書き）

やっと2人が話しました。やっとつて言う程長くないですけど。

2人と書いて思い出しましたが、この小説、見やすさの関係で数詞は算用数字を使い、『一瞬』や『一息』などの語は漢数字を使用しております。ご了承ください。

次回は、出来れば明日にでも。それでは

4、スイカ（前書き）

サブタイトルは、お気になさらず。

4、スイカ

あれから5分もしないうちに、星は再び眠りに就いた。よほど疲れていたのだろう。

少女も、未だに燃えている焚き火を海水で消し、他者が来たら音がなるような簡単な罫を仕掛け、星の向かい側で仰向けになり、瞼を閉じた。

「おやすみ」

そうして少女も、ゆっくりと寝息をたてていった。

翌朝。

割と早く起きたなあ、とか言いながら、星は辺りを見回す。

「あれ、あの娘は……?」

少女がいない事に気付き、焦る。さながら、迷子になった子供のようだ。

星はとりあえず、静かに待っていることにした。

20分ぐらいいして、少女は戻って来た。両手で何かを抱えている。

星は手伝おうとしたが、

少女は涼しげな顔で歩いてくる。あまり重くもないのだろうか。

星に気づいた少女は、抱えている物を地面に置き、星に話しかけた。

「おはよう。よく寝れた?」

「あ、ああ」

星は、空返事を少女に返す。何故なら 星は、

少女に見とれていたからだ。

昨日は混乱していてあまり顔は見なかったし、夜も、暗くてよくは見えなかったが、改めて見るとものすごい美少女である。

腰の辺りまで伸びる美しい金髪が風に靡き、瞳はエメラルド色に煌めいている。頬と唇はほんのりとした桜色が印象的だ。身に纏っている服のような鎧からは、すらりと細い手足が伸び、その肌は、病的な程ではない、健康的な白さをしている。

「どうかした？」

少女が問うた。

「あ、いや、何でもない」

見とれていたただなんて恥ずかしくて言えない星。適当に誤魔化して、話を反らす。

「その大きいのは、何？ ええと……」

ええと、の部分で何を聞かれているのか少し迷った少女だったが、直ぐに、名前だろうと検討を付ける。

「そう言えばまだ名乗ってなかったわね。私の名前は、カノン・ミシュリ。気軽に、カノンって呼んでね」

やっぱり、日本人の名前っぽくはないな、と考えながら星も自己紹介をする。

「ん、俺は天枷星。俺の方も星でいいよ」

「じゃあ、星君。さっき周りを探索したら、なんとスイカが落ちていたの！」

カノンと名乗った少女は、そう言いながら地面に置いてあるそれを指さす。

「あるのか！？ スイカ」

密林でスイカ？ というのはさておき、この世界にスイカがある事に驚く星。対してカノンは、普通だけど、というような表情をしながら返答する。

「うん。暑い季節になると、たくさんの人達が食べてるよ」

「へえ。俺がいた地球っていう世界でもあったよ、スイカ」

異世界に地球の食べ物があるのに驚いた星だったが、ここ（ウェリアル）の人達からしたら、自分も異世界の人だな、と思いつく。

「じゃあ、食べましょ」

星が考えている間にスイカを切っていたのか、カノンが、見事に10等分になっていているスイカを星に差し出した。

「ああ、そうしよう」

そしてなぜか、スイカ食べ会が始まったのであった。

「もう食えないっ」

「私もっ」

2人は、1時間で5切れずつ、即ち半分ずつスイカを食べた。その結果、至って普通の体型の星、ましてや細身のカノンは、腹を抱えて悶絶していた。

暫くして体調も良くなってきた2人は、お互いに笑い合った。

「美味かったけど、食いすぎたなあ」

「本当。お腹パンパンだよ」

2人共なんだかんだで満足そうである。

だが、星もカノンも、お互いに話す事は山程あるのだ。そのんびりもしていられない。

自然と真剣な表情になっていく2人。空気さえも厳肅している。

星が口火を切った。

「で、世界を救うために俺は何をすればいいんだ？」

つい最近まで、普通の高校生として春休みを謳歌していた彼に、どうやって世界を救う術があるのか。その答えを得るため、星は期待を込めつつも真剣な眼差しでカノンを仰ぎ見る。

彼女は、それに端的に答えた。

「実は、分からないの」

「え？ それはどういう……」

「アグライアはあまり具体的な事は言わずに、救世主が現れる、とだけ言ったの」

その返答に動揺する星。

「それじゃあ、俺はどうすれば……」

黙り込む星。同様にカノンも黙っている。が、彼女は突然顔を上げると、言った。

「まずは、アグライアを探す事から始めるのが良さそうね」

それは言外に、アグライアを探さなければ何も始まらない事を語っていた。

「やっぱり、それしかないか。でも、そのアグライアっていう人がどこに住んでいるか分からないとなると……」

「この広い世界を片っ端から探さないといけない事になるわ」

この世界、ウエリアルがどれ程の広さなのか星には分からないが、一生掛かっても大賢者を見つけれないかもしれない事は分かっていた。

それはつまり、世界を救えない、即ち地球に戻れない事を意味する。

星は、どんなに困難でも、ただ前に進む事に決めた。

迷ってなんかいられない。彼は自分の命の恩人に別れを告げる。

「カノン、君には本当に世話になった。感謝してもしきれない」

だが、彼女は不思議そうな顔をして、その後笑いながら言った。

「私も一緒に行くよ。ちょうどアグライアを探してた所だし」

驚いた表情でカノンを見つめる星。その瞳は何かを問うような色をしている。

それに対し、カノンは目を逸らした。いや、他の場所を見た。そう、現在いる海岸の奥、木々が生い茂る密林を。

「星君、ゆっくりと、慌てずに私の後ろに隠れて」

星に言葉を放つが、その2つの瞳はしっかりと密林の方に向いていた。そして、そいつらが現れた。

昨日、星を襲った、あの恐竜モンスターが。

4、スイカ（後書き）

なんだかんだで、前回更新から3日経ってますね。

ゲームや読書等で忙しいですが（勉強やれ）、途中で終わる事はないと思います。中途半端は嫌いなので。
それでは。

5、奇襲

姿を現したモンスターは合計10体。他にも、密林に隠れている可能性がある。

彼らは、血走った目で星とカノンを睨み付けていた。

「なっ!?! あんなにいつぱい」

再び現れた、それも前回の5倍の数のモンスター。星は、昨日殺されそうになった瞬間を思いだし、戦慄した。

それを後ろ目に認め、カノンは呟く。

「星君。君は私が絶対に守るから」

そして、10体のモンスターが海岸に雪崩れ込んだ。逃げようにも2人の後ろには海。文字通り背水の陣だ。

まず1体が先立って突貫を仕掛けた。

その直線的な攻撃をカノンは身をひらりと横に移動して避け、がら空きになった身体に容赦なく剣を降り下ろす。

結果、胴体と下半身が分離し、血の代わりに黒い粉塵が吹き荒れる。だが、他のモンスターがそれを見て怯む様子はない。寧ろ、おぞましい雄叫びをあげ、3体が左、中央、右から同時に突進してきた。

「グギャアアアッ」

それらのモンスターをギリギリまで引き付けたカノンは、勢いよく地を蹴り、真上に跳ぶ。

突進の勢いを殺しきれなかった3体のモンスターは、互いに頭を思い切りぶつけ合い、その衝撃にふらついた。

カノンは空中で剣の切っ先を下に向け、5メートル程の高さから落下する。

「グアアアアアッ」

見事に1体の脳天に剣が突き刺さり、断末魔をあげ黒い粉塵となり、消えた。

着地すると同時にカノンは、未だにふらついている2体のモンスターに向け剣を横尻ぎに一閃する。

「はあああっ！」

すると、それらも黒い粉塵となって風に流れていった。

後ろに下がり過ぎて海水に足が10センチメートル程浸かっている星。恐怖があるのは確かだが、今彼は同時に情けなさも負けず劣らず感じていた。

「女の子が1人で戦っているっていうのに、俺は何も出来ないのか」

その間にもモンスターは突っ込んでくる。

カノンはそれらのモンスター1体1体に目をやり、星の方に近づかないように牽制する。

ある時は海岸の砂で目眩ましをし、またある時は胴体に蹴りを放つ。そして隙を見て1体ずつ斬っていく。

次々とその数を減らしていく恐竜モンスター。

そしてカノンは最後の1体に上段から斬りつけ、これもまた黒い粉塵となって消えた。

カノンは安堵のため息をこぼし、星の方に向きなおる。

「もう大丈夫」

だが、星は驚愕の表情になると同時に叫んだ。

「カノンっ、後ろだっ！」

「えっ!？」

咄嗟に後ろを振り向くカノン。彼女の直ぐ目の前には3体のモンスターが迫っていた。おそらく密林に潜んでいたであろう。

3体のモンスターが一斉にカノンに襲い掛かる。

凄まじい速度で剣を振るうカノン。その剣撃に2体のモンスターが消滅する。しかし残りの1体がその隙に鋭利な爪を降り下ろした。

「っ!？」

思わず目を瞑ってしまおうカノン。

だが予想に反しその華奢な身体は引き裂かれない。

「うおおおおおおおっ！」

天枷星。

彼が全力を込めてモンスターに体当たりを仕掛けたため、モンスターはあらぬ方向へと吹っ飛んだのだ。

「今だっ！ カノンっ！」

星が叫ぶ。

一瞬で状況を把握したカノンは、倒れているモンスターへと目にも留まらぬ速さで剣を風ぐ。

「はあああっ！」

そしてモンスターは為す術もなく消滅した。

「カノン、大丈夫かっ!？」

心配そうな顔でカノンに駆け寄る星。

「うん、大丈夫、だよ」

「そうか。本当に良かった」

しかしカノンは、やるせない表情をして言った。

「星君を守るって言ったのに、逆に助けてもらって。ごめんなさい」
それに対し星は、そんな事ない、という表情で返す。

「いや、俺の方こそごめん。君が戦っている間、ただ見ている事しか出来なかった」

彼自身そうは言っているが、恐怖に立ち向かうにはそれなりの覚悟が必要である。ましてやゲームの中でしか戦闘経験のない星にとっては、未知の怪物に立ち向かえただけでも好成績だといえる。

だがカノンは、非常に心配そうな、逆に見ている方が心配しそうな顔で言った。

「いえ、この世界の救世主が怪我でもしたら、私……っ」

悲痛の表情で話すカノンに、星は微笑み言う。

「いや、人の命に救世主も何も無いよ。だって俺達は同じ、人間なんだから」

それに面食らったように口を手を当てて驚くカノン。しかし次の瞬間には星の言葉の意味を噛みしめ、同調する。

「同じ、人間……」

「そう。確かに俺はここでは特別なのかもしれ無いけど、誰かが傷付くのなんて見たくはないんだ」

我ながらゲームやアニメの主人公みたいな台詞だな、と鼻の頭を擦りながら苦笑する星。

「なんか偉そうに言ったけど、そういうものなんだと思う」

モンスターの痕跡の残らない、さつきと何ら変わらない海岸から遠くを見つめ、星は最後にそう語った。

「やっぱり君は、救世主なんだね」

カノンの嬉しそうな小さな囁きは波音にかき消え、海の記憶の1ページに深く刻まれていった。

「そういえば、昨日とさつきのモンスターは何で 血が出ずに黒い粉? になって消えたんだ?」

雑学を聞く探求者よろしく星がカノンに尋ねた。

ちなみに今現在、2人は密林の出口へ向け歩いている。旅人であるカノンが地図を携帯していたのだ。

「ああ、あれは『創造の粉』って言われていて、10年前に突如出現したモンスターがそれで造られていたみたい」

「誰が、何のためにそんな物を……」

わざわざそんな大層な物を使って有害なモンスターを造る狂者って、と付けたし、難しい顔をする星。

「アグライアの予言と関係があるって言われているわ」

「予言、か……」

下を向いて考え込みながら歩く星。

と、カノンが前方を指差し、声をあげた。

「出口に着いたよ」

星は顔を上げて、木々に閉ざされる事のなくなった陽光に目を細める。自然とその顔には笑みが浮かんでいた。

「じゃあ、行こうか」

「ああ」

そうして、星とカノンは長い旅の一步を踏み出した。

5、奇襲（後書き）

やっと始まりました、ゴールデン・ウィーク。今年は地震もあつて例年より旅行なんかが減ってるみたいですけど、それでも高速道路は混みそうですね。

それでは

6、ウィーク村

デルー密林を後にした2人は、近くに小さな村があるのを見つけ立ち寄る事にした。

周りを簡素な柵で囲まれた村の入り口には、木を5メートル程の間隔で2本立て、上部を平たい看板で繋いだこれまた簡素な門が設えられている。

看板の表面には黒いペンキのような物で、ウィーク村、という文字。

「ずいぶん質素な村だな」

「そうだね。村人の姿も見えないし」

まばらに散在している木造の小さな家々は、どこもカーテンが掛かり、寂れた漁港のように活気がまるで感じられない。

「村人達はどうしたんだろう」

「何かあったのかな…… あっ、あれ村長の家じゃないかしら？」

カノンがひととき大きな家を指差し言った。その家も他と同じようにカーテンが掛かっている。

「ちよつと行ってみましょうか」

そうして、村長のらしき家の戸を叩く。

20秒程の間を置いて扉が開いた。しかし開いたのはほんの少しで、そこから誰かが怯えているような声で告げる。

「ど、どなたですか？」

老人の男性の声だ。

2人は、その怯えるような態度を訝しがりながらも、返答した。

「旅人です」

カノンが短く告げると、老人は戸をもう少し開けて星とカノンを一瞥する。

やがて、なぜか安堵の表情になると戸を大きく開いた。

「どうぞやら本当のようですな。どうぞ、お入りくだされ」

言われるがまま、2人は村長のらしき家へと入った。

「そちらの部屋へどうぞ」

老人は入って直ぐ左手にある部屋へ2人を招き入れた。

「どうぞお掛けください」

老人は2人掛けのソファを指して言い、自身は木でできたテーブルを挟んだ、向かい側の安楽椅子に深く腰掛ける。

星とカノンが座つたのを見届けると、老人は口を開いた。

「私はこの村の村長をやっております。さて、このウィーク村へは如何様で？」

「宿に寄つて行こうと思ひまして」

代表して星が告げる。それに村長はああ、と言って納得したような顔になる。

「デルー密林を抜けて来た方ですな」

「ええ。ゆっくり休んだ方が良いと思ひまして」

そう星が言うと、村長は申し訳なさそうに言った。

「すみませぬが、この村からは出ていった方がよろしい」

それに今度はカノンが返す。

「何ですか？ 外に誰もいない事に関係が？」

村長はしばらく黙っていたが、ただ追いつ返すのも良心が痛むのかゆっくりと語り出した。

「ここ数年でモンスターが急増、凶暴化したのはご存知ですか？」

「はい」

星が首をかしげる隣でカノンが首肯する。

「モンスターによつて家族や恋人を殺され、どうしようもなくなつた人々がどうするかはご存知ですか？」

「モンスターへ復讐をする、ですか？」

「そのために騎士に志願する者も大勢おります。ですが、盗賊と成り下がる者も少なからずおるので」

村長はそこで一度大きく息を吸い、激情的に言い放つた。

「ここウィーク村にそんな盗賊共に毎週のように襲われ、暴虐の限

りを尽くすのです。そのせいで村人は皆怯え、家から出ようともしないのです」

「立ち向かおうとはしなかったんですか？」

「若者が大勢立ち向かいましたが、皆盗賊の頭領のファットに殺されました」

安楽椅子を大きく揺らしながら悲嘆にくれる村長。

「そういう訳で、あなた方は一刻も早くこの村から出た方がよろしい」

村長の話が終わると、互いに顔を見合わせ、頷き合う星とカノン。村長は怪訝な顔をしている。

星が言った。

「俺達も協力します、盗賊を倒しましょう」

村長は啞然として口をあんぐりと開けた。

「突然何を言い出すのですか。失礼じゃが、あなた方には奴らを倒す事は出来ない」

だが星は折れない。

「やってみなければ分かりません。しっかりと対策をすれば何とかなる筈です」

「しかしのお、盗賊は50人もおるのでぞ」

「絶対に誰も死なせやしません」

星の表情は真剣そのものだ。村長はしばし悩んでいたが、彼の表情に何かを汲み取ったのか決意を表明した。

「分かりました。あなた方に任せます。好戦的な若者を連れて来る故、しばしお待ちください」

そして村長は老いた身体を奮い立たせ、外へと走っていった。

6、ウィーク村（後書き）

ゴールデンウィークが遂に終わりました。憂鬱ですね。
それでは

7、団結

村長は1時間もすると戻って来た。

率いて来た若者は総勢25人。盗賊軍団の半分である。彼らが村長の家に入った事で、先の部屋はぎゅうぎゅうとなり暑苦しさが漂っている。

村長は星とカノンを指し示して、血気盛んな若者達へと大音に告げた。

「こちらの方々が盗賊退治に協力してくださる旅人殿じゃ」

集まった者共は一斉に2人の方を見やる。

それらの顔にはあからさまな失望の表情があった。

若者達が口々に批判の声をあげる。

「ただのガキ共じゃねーか」

「盗賊を甘くみるな」

「帰ってミルクでも飲んでろ」

しかし星とカノンはその反応に動揺する事なく、寧ろそういう反応を予想していたかのように毅然としている。

「盗賊といつても所詮は烏合の衆。きちんと作戦を練れば、絶対に倒せる筈だ」

星は総員を見渡しながら堂々と言い放った。

村の若者達はいかにも不服そうな態度をしている。それに対し、星の顔を横目にちらりと見てから、カノンが言った。

「彼は大賢者アグライアの予言した救世主よ！」

音が消えた。

村の若者達と村長は絶句した。そして全員の視線は一斉に星へ。彼は頭を掻いて、はにかんでいる。

村人達はまたもや一斉に我に戻ると、再び言い放った。結束は意外と固いらしい。

「嘘吐くな！」

「ガキが調子乗るな！」

「そつだそつだ！」

星自身、自分が本当に救世主なのかまだ確証がないので、強くは言い返せない。そこで、ポケットから携帯電話を取り出すと皆に見せた。

「これは、俺がいた世界ではごく普通に皆が持っている、携帯電話という物だ」

そして、カメラの機能を使って村人達を撮ったり、音楽を流したりしてみる。

これには村人達も驚いた。

「うわ、何だこりゃ」「すげえや」等々、皆口々に驚きを語っている。

「これで、信じてくれたかな」

「もちろんです。やはりあなたは救世主じゃ」

村長が村人を代表して答えると、他の者も主に謝罪を述べる。

「疑って悪かった」

「許してくれ」

「すいやせんした」

星は笑って返す。

「いいって。じゃあ、皆で盗賊をやっつけようぜ！」

「「「おおー！」「」」

ウィーク村の人達は、単純だった。

星は思わずにやけていた。なぜなら、救世主イコール主人公のように、皆を指揮し、かっこいい台詞も吐き放題だからである。

(日本だと、あんな台詞吐いたらイタイ奴だからなあ)

カノンはそんな星を見つめつつ、少しの憂いを感じていた。

改めて作戦会議が開始された。

参加したのは、星、カノン、村長、村人が5名である。

「次に盗賊が襲ってくるのはいつ？」

星が村人へと尋ねる。それが分からなければ対処が出来ない。

「明日の夜でさあ。奴らは1週間置きに、太陽が沈むのを期にやってくるんでさあ」

村人の1人が返答する。

質問は続く。

「どこからこの村に？」

「門から堂々として来まさあ」

「盗賊達の頭脳は？」

「ただ暴れまわり、略奪を繰り返しているだけなんで、そこは弱い筈でさあ。だけど、逆にそれが厄介だったりするんでさあ」

「襲ってくる時以外で、この村に来る事は？」

「ありやせん」

他にも幾つか尋ねた星だったが、ある考えに思い至ったのかおもむろに語り出した。

「敵にも味方にも死者は出したくない。ここは罠を仕掛けて生け捕りにするのが良いと思う」

そうして彼は更に村人達に質問を投げ掛ける。主に、デルー密林の木や植物の事について。

全員で作戦を考え、決まった頃には陽がすっかり落ちていた。

盗賊退治の作戦が決定されてから1時間程してから、罠等の準備が開始された。

デルー密林へと、ある植物を採取するために向かう者、村に仕掛ける罠を作る者、盗賊を縛る練習をする者と分かれて、各員去った。星はカノンと共に外に出て、夜風に当たっていた。空は曇っていて暗いが、村には人口の明かりが灯り、仄かに明るい。

しばらくの間、2人は黙って月も星も見えない夜空を眺めていた。ふと、星が口を開いた。

「実のところ、少し不安なんだ。盗賊を倒せなかったらどうしようって」

先程までの堂々とした態度はどこへやら、星の顔には不安が溢れていた。

カノンはそんな星の胸中を理解し、ゆっくりと言った。

「村の人達も皆不安に思ってる筈だよ。50人もの盗賊が攻めて来るんだから」

「ああ、でも、だからこそ不安なんだ。村人達がもしも死んでしまつたら……」

「そういうことは言わないっ」

突然カノンが星の口に指を乗せた。星は驚きに目を見開いた。

「!?!」

星の唇にカノンの細い指の温かさが伝わった。彼女はその指をそと離しながら言う。

「そういう言葉は本当に死を覚悟した時に言うものだよ。それに、絶対に誰も死なせない、でしょ」

そして、にっこりと微笑んだ。その笑顔にドキツとくる星。しかし、しっかりとカノンの言葉を噛みしめる。

「そうだよな。やる前から弱気になってちゃだめだよな。ありがとう、カノン」

それにカノンは、はにかみながら返答する。

「私は何もしてないよ。君の意思が強いからこそだよ」
「ありがとな。少し自信が持てた気がする」

深夜のウィーク村には珍しくどこの家にも灯りが灯っている。

もはや、村人全員が一丸となって盗賊を退治するために動いていた。

星とカノンの2人も、罨の準備の手伝いをするために広場へと向かった。

雲の合間からほんの少し、月が姿を表していた。

7、団結（後書き）

次回盗賊が来襲します。そろそろ定期テストが近づいてきたんで、更新頻度が少し減るかもです。それでは

8、夜闇に朽ちて

陽が傾き始め、あと1時間程で沈みそうな頃、ようやくすべての準備が整った。

村人達は交代で仮眠をとったり、食事を食べたりにしていたが、今は皆起きて盗賊の来襲に備えている。

備えている、といっても決して盗賊に畏の存在、敵対心を気づかれる事のないよう、ほとんどの村人が自宅に待機している。

攻めて来るのは盗賊だが、無論盗賊にも色々な者がいる。

例えば、なりふり構わず人々を襲って持ち物を強奪する者達。こういった者達は人々への殺傷も辞さない。

そして、盗みを働くのは主に成金だったり、悪徳な地主だったりして、奪った物品を人々に分け与える、所謂義賊のような者達。彼らは殺しは滅多にしない。悪い者に対しては別だが。

ウィーク村に強奪を働きに来る盗賊達は、ほとんどが家族をモンスターに殺され、半ば自暴自棄になった者達である。故に彼らに非はない と言えば嘘になる。

なぜなら、彼らが行っているのは強奪、殺傷といった明らかな悪の行為だからである。

すでに最後の打ち合わせは行った。あとは万全の状態で盗賊を迎え撃つだけだ。

村長の家のソファアに深く腰を下ろしながら、星は言い様のない緊張を感じていた。

「畏に掛けるだけとはいえ、緊張するなあ……」 自発的に作戦を練って命のやり取りを行うのは、星にとっては初めてである。

地球で、ましてや平和の国日本で命を賭した戦いなど、一般人であればまず行う事はない。異世界に来た時点で一般人ではなくなっ

た訳だが。

「さて、そろそろか」

そう独り言を言つて、ソファーからゆっくり立ち上がる。

カノンはもしものために、いつでも盗賊を攻撃できる場所に身を潜めている。

星はポケットから折り畳み式の携帯電話を取り出すと強く握り、沈みゆく夕日でかるうじて明るさを保っている部屋を後にした。

それから直ぐに夕日は沈んだ。それが意味するは盗賊の来襲。

女子供、老人は家の奥に隠れ、戦える村人25人は皆、広場へと集まっている。そこに罾を仕掛けているのだ。

盗賊は村唯一の木の門を堂々とくぐると、各々強奪を働くために離散しようとした。

だが、そこに突然前方から1人の少年が現れた。

長袖の黒 टीー シャツにジーンズという格好が夜闇に溶け込む、

その少年　天枷星は、如何にも盗賊ですといった彼らの格好に少なからず戦慄する。

全員が黒いベストを地肌に着用し、作業着のズボンのようなものを履いている。その何人かは、木こりが持つていそうな斧を身に付けている。

だが、それらがおまけに見える程の巨体男が先頭に立っていた。

身長は優に2メートルを越し、横幅は1メートル程もある。まさに巨大な豚のような男だ。

(なんだ、あいつ!?)　その規格外の大男にたじろぐ星。しかし慌てる事はなく、落ち着いて持っていた携帯電話を開きICレコーダーの機能を出すと、再生の文字を押し、1番新しいデータを最大音量で再生させた。

『無能な盗賊共よ！　無能でないなら広場へと来い！』

村人達の声がウィーク村中に盛大に響き渡る。それに盗賊達は、怒りの表情をあらわにして星を睨み付けた。

中でも、中央先頭に立つ大男は歯を剥き出しにして喚いた。

「このファット様を怒らせたな。村人は皆殺しだ！」

「てめえら、広場に行くぞー！」

そうして盗賊全員が広場へと駆けていった。

星は一足先に向かっている。

ところで、ここウィーク村の広場へ行く道は入り口の門をくぐって真っ直ぐ進むか、他の2つの道を通って行くしかない。

故に、盗賊達は固まって1つの道を進む事になる。

そして盗賊達は広場へと入った。

彼らは気付かなかった。

地面から不自然に生える蔦、そして息を潜めて自分達を見ている村人に。傍目から見ればどうということはない、半径30メートル程の円形の広場。そこに盗賊全員が集まった。

その時、三方の入り口に松明を持った村人が現れ、地面から飛び出ている蔦に火を点けた。次に他の村人が木の柵を置いて広場への入り口を閉ざす。

簡易的な方法で一時的でしかないが、広場は閉ざされた。

「よし、これで倒せる」「そうだね。これなら」星とカノンは村人達に合流した。村人達も安心したように地面に座り込む。

広場内は非常に混乱していた。

「か、身体が動かねえ」盗賊達は木の柵で広場を閉ざされて直ぐに、それを破壊し村人を襲おうとしたが、やはり直ぐに身体の異変に気付いた。痺れ蔦。

パラリシビーとも呼ばれるその蔦は、100メートルにも伸び、所々に生える小さな実は神経性の毒を含んでおり、燃える事によって毒を周囲に撒き散らす。

星は村人達にデルー密林の植物等の事を尋ねた時、この蔦を使う事を思い付いた。そして村人数人と、護衛にカノンが密林に蔦を採取しに行き、帰還して直ぐに広場中の地面下にこれを張り巡らしたのだ。

固まって移動していた盗賊は、余計に多く毒を吸ってしまふ。「終わったか」

星が呟く。広場の外からでは中の様子はわからないが、既に音は聞こえない。盗賊達は今頃痺れて手も足も動かせない筈だ。

しかし 星達がいる場所の前方にある木の柵が突如吹き飛んだ。そこから1人の大男が現れた。盗賊の頭領、ファットだ。

「よくもやってくれたなあ！ ぶっ殺す！」

そう言つて、手に持っている自身の体格に見合う巨大な斧を振り回しながら突進してきた。

痺れ蔦の毒が効かなかったのか。

カノンが剣を構え迎え撃とうとした。だが。

「ここは俺に任せてくれ」

星がカノンを背に立った。その手には長さ1メートル程の木の棒が握られている。

カノンは啞然とした顔で星を見る。彼は1つ息を吐くと、カノンの方に首だけ振り返ると、言った。

「そろそろ俺も、いいところ見せたいからね。大丈夫。絶対に死なないさ」 星の目は本気だ。カノンはじつとその双眸を見つめる。

しばらくすると、

諦めたように、しかしどこか嬉しそうにも聞こえる声で言った。

「わかった。でも絶対に死なないで。危なくなったら私が戦うから」

「ああ。ありがとう」

そうして星は再び前を見る。ファットの方を。 「いい度胸じゃねえか、ガキがっ！」

叫び、突進してくるファット。星も木の棒を握りしめ地を蹴る。

ファットは上段から真つ直ぐに斧を降り下ろした。

8、夜闇に朽ちて（後書き）

主人公がチート化したらかなり楽になりそうですね。

さて、いよいよ定期テストが迫ってきました。英語が悲惨な事になりそうですが、まあ頑張ります。それでは

9、白い夢

盗賊を、頭領であるファットも含めて全員を無事捕縛したウィーク村の住人、そして星とカノンは、村長の家で祝杯をあげていた。さすがに村人が大勢入ると狭い村長宅だが、広場には縛った盗賊達がいる。彼らの前で祝杯をあげるのも気が削がれるだろう。

それに、まだ痺れ蕙の毒が広場中に充満している可能性もある。痺れ蕙の毒は一時的なものであり、空気中に拡散されると10分程で無害化するが。

村人達が歓喜の声をあげる。さながらお祭り騒ぎだ。

村長が星とカノンの側に行き、深々と礼をする。

「あなた方のおかげで、この村は救われました。本当にありがとうございます。ごじますのう」

他の村人達も、一旦それぞれの談話や飲食を中断して2人の方に向きなおし、各々感謝の言葉を述べる。

「ありがとう、坊主、嬢ちゃん」

「ほんと、助かったぜ」

「まさか、あんな作戦を思いつくなんてな。すげーぜ」

星は感謝の言葉の連続にどこかむず痒さを感じた。

ひとまず近くのテーブルに置いてあるフルーツジュースを一口飲んで、渴いた喉を潤すと、当初の目的である宿屋への宿泊について尋ねた。結果、

「おお、そうですね。ゆっくりしていただく。宿代はわしが出しましょう」

村長が快い返事してくれた。

「そんな。悪いですよ」

「気になさらくてよいのですじゃ。あなた方はまさにウィーク村の英雄ですからのお」

「じゃあ、お言葉に甘えて」

とりあえず今日の宿は確保できたので、再び2人は祝宴を楽しみ始めた。

木のテーブルの上には村の倉庫に蓄えられていた、デルー密林で採れたキノコや木の実、やはりというかなぜかというかスイカ、野草などが置かれている。

星はそこからスイカを一切れ取って食べていると、村人に声を掛けられた。それに応じると、村人は大きな声で話し掛けてきた。

「でも、よくあのファットを倒せたな。うちの村人は何人も奴に殺られたのに」

「少しずつ痺れ蕩の毒が効いてきて、動きも鈍くなっていったからかな」

「それにしても奴の怪力は化け物並みだぜ。あの怪力で斧を振り回されたらたまったもんじゃねえや」

実際、ファットの斧の振りが相当弱まったのは10分程戦ってからだ。その間ずっと斧を避け続けた星はというと、

「なんつうか、斧の軌道が見えた、って感じかな。それにやっぱり、生存本能が十二分に働いたんだと思う」

と特に誇りもせずと言う。彼自身、斧という凶器を目の前にしても多少の恐怖しか感じなかった。

真実かは定かではないとはいえ『救世主』という肩書きが良い意味で彼の背中を押したのだろう。

その後も村人達と会話をして祝宴を楽しんだ星だったが、夜も遅くなったので宿に行くことにした。カノンと呼ばうとして辺りを見回すが姿が見当たらないので、村長に宿に行くことを伝えて、カノンのことも聞いてみた。

「おお、お嬢さんなら先に宿に行きましたぞ」

「そうですか。わかりました」

そう告げてから自身も宿に向かう。

ウィーク村を訪れた時に宿の場所は確認してある。村長の家の近くの、他のより大きい木の家だ。

村長宅の玄関の扉を開いて外に出ると、直ぐに宿は見えた。迷わずにそちらへと進む。

宿に着き、木の扉を開く。少しひらけたロビーのカウンターに行き、受付をする。

受付の初老の女性は、星を見るとにこやかに笑いかけていった。

「おやまあ、救世主さま。

よくお越しくださいました」

「どうも。先に女の子が来ませんでしたか？」

「ええ、30分くらい前にいらっしやいましたよ。2階の一番奥の部屋です」

「わかりました。ありがとうございます」

礼をいって2階に向かう。そんなに広くもない宿だ。4つの扉の前を通り、5つ目 一番奥の扉を確認する。

「ここか」

そして、取っ手を掴み手前へと引いた。

中へと入る。

「カノ……ン!?」

とりあえず星はカノンを呼ぼうとして顔を上げる。

結果からするとカノンはいた。そして 着替えている途中だった。

寝間着にでも着替えていたのだろう。帯を巻いていないその浴衣は前方がおもいきり開いており、白い肌を露にしていた。

幸か不幸か上下ともに下着は身につけていた。しかし、程よく育った形のよい胸、華奢な体躯、すらりとした脚はしっかりと視認できる。

年頃の男子である星はその姿に見とれていた。

と、カノンが頬を紅く染めて言った。

「その……恥ずかしい、かな」

その言葉に、はっと我に返る星。

「い、ごめんっ!」

咄嗟に謝罪の言葉を口にし、部屋から出ていこうとする。それをカノンが急いで止めた。

「待って！ 少し後ろを向いてくれればいいわ」

罪悪感と、興奮　こちらの方が大きい　とが混在する思考の中、しかし星は素直に、部屋に入って直ぐのところまで扉を向いて立った。

カノンが浴衣に帯を巻く音が聞こえる。

星は、カノンの先程の姿を否応なしに想像してしまう。

(なんつうか、すごい綺麗で、可愛かったな……)

あれこれ想像している間に浴衣に着替え終わったらしい。カノンが声を掛けてきた。

「もうこっち向いていいわ」

静かに、ゆっくりと振り向く星。

改めてカノンを見てみると、腰の辺りまで届く金髪は濡れ、まだほんのりと紅い頬は上気している。

「風呂でも入ったのか？」

星は、思ったままのことを言う。カノンは首を横に振った。

「ちよつとお湯を浴びてきただけよ。星君も浴びてくれば？　気持ちいいわよ」

「俺はいいや。とりあえず寝て、明日の朝にでも浴びてくるよ」

ここ数日でいろんな事が起こって、疲れているのだろう。星はあくびをすると、2つあるベッドの、荷物のまったく置いてない方へとっさりと腰を下ろす。カノンも自分のベッドに腰を下ろした。

「俺に、剣を教えてくれないか」

何の前置きもなく、しかし表情は真剣に、星が口火を切った。

カノンは何も言わないが、その目はじつと星を見ていた。彼は頷いて続ける。

「やっぱり、旅の途中でモンスターに会う事もあるだろうし、剣はある程度使えるようになっておいた方がいいと思うんだ」

「そうね。剣術は習得しておくに越した事はないからね」

星は、危ないと言って反対されると思ったが、カノンは軽く了承する。

この世界について知りたい事は山ほどある星だが、旅の間に少しずつ知っていけばいいだろう、と結論づける。今はなんとしても眠りたかった。

「寝ようか」

カノンが言った。彼女としても話したい事はたくさんあるだろうが、非常に疲れた様子の星を見て、そう言ったのであろう。疲れた、なんて一度も言っていない星に……。

部屋の電気を消し、2人はそれぞれのベッドに入る。

「おやすみ」

「ああ、おやすみ」

そして2人は、瞼を閉じた。

数十分が経った。

ベッドで布団にくるまる星の向かいのベッドでは、カノンが仰向けで静かに寝ている。

星は起きていた。というのも、異性であるカノンを妙に意識してしまйнаかなか寝付けずにいたのだ。

しかし、これまでの疲れは確実に星を眠りの道に引きずり込もうとしている。

そして次第に星の意識は途絶えていった。

白い。何もかもが白い。そして、何もない。

空間と呼んでいいのかさえわからない。そんな場所に、星は立っていた。

上下左右どこを見ても白。その不可思議な光景に、彼はただ絶句する。

「ここは、どこだ？」

当たり前前の疑問が呟かれる。

「あなたの夢の中です」

「!?!」

まさか返事が返ってくるとは思ってもいなかったため、星は絶句に重ね仰天する。

方向はわからないが、声のした方へ振り向くと遠くに誰かが立っている。

あまりにも遠いため顔はわからないが、細い体つき、そして先程の声から女性だとわかる。

「あなたは？」

星は驚愕の余韻が残っているような、若干震える声で問うた。

「私は、アグライア」

よく透き通る、聖母を彷彿とさせる美しい声が白い世界を満たす。更に絶句する星。

「アグライア、って、大賢者の……」

「ええ、そうです」

頭が混乱する星。気づいたら一面真っ白な場所に立っていて、それが自身の夢の中で、更に大賢者アグライアの登場。混乱せずにはいられない。

「夢の中って、どういう……」

「魔法を使って、あなたの夢に干渉をしているのです。時間があまりありません。よく聞いてください」

『魔法』という言葉に更に混乱する星だが、必死な声で喋るアグライアに、ただ頷いた。

アグライアは続ける。

「天枷星。あなたは、この世界の救世主です」

「みたいですね。カノ……出会った人が教えてくれました」

星は首肯しながら言った。

アグライアは、よほど切羽詰まっているのか一気に話題を変えた。「まずは、私のもとを訪れてください。リフレルム山に住んでいま

す

「は、はい」

慌てて返答する星。

「もう時間です。最後に　モンスターなどに会い、本当に危なくなったら、剣を振り、エクレンド、と唱えなさい。必ず助けになる筈です」

美しい声で、アグライアが告げた。

「

星は何か言おうとしたが、声が出なかった。

そして　視界が、一面の白から黒へと変わっていった。

アグライアはもう、いなかった。

9、白い夢（後書き）

重要人物、大賢者アグライアの登場です。またしばらく出てきません。

私はいつも携帯電話でこの小説を投稿しているのですが、昨日パソコンで見てもたら色々と変になってはいましたが、読むのに支障はない筈です。括弧の部分がルビになっていたのは驚きましたが……。

最後に、やっと定期テストが終わりました。英語が本当にやばいですが。これでもっと執筆時間が増える、かもしれないです。それでは

10、いざ行かん リフレム山

目が覚める。

星は眠気の抜けていない頭で臆気に夢の内容を反芻する。

(……………それにしてもやけにはつきりした夢だったな)

まるで、夢であって夢でないような……………。

「あ、起きた？」

カノンの声が聞こえた。

寝ぼけ眼を擦って周囲を見てみると、驚いたことに自身がいるベツドの直ぐ横にカノンが立っていた。

それだけで起きてから停滞していた眠気がある程度引いた。

「おはよう、星君」

カノンは屈託のない笑顔で朝の挨拶をする。それに星は若干慌てたように返す。

「お、おはよう」

カノンは既に、浴衣から鎧のような服に着替えていた。腰には剣を帯びている。村を発つ準備は整っているようだ。

「洗面所ってどこにあるかわかる？ 顔を洗いたいんだけど」

昨日は部屋に来て直ぐに カノンの着替えを少し見てしまったが 布団に入った星は、部屋に洗面所があるのかわからない。

日本ではホテルや旅館に洗面所があるのは誰かに聞くまでもなく当たり前だが、世界が世界だ、洗面所がないこともあるだろう。

「一階したに水道があるよ」

「わかった。ありがとう」

礼を言っつて靴を履き、部屋を出ようとすると、カノンも共についてきた。

「どうせだから、顔を洗ったらそのまま食堂に行かない？」

「そうだな、そうしよう」

彼女の提案に特に意見もなく星は賛成する。朝だからなのかそれ

ほど食欲がない星だが、朝食が大切なことくらいわかる。

2人は部屋を出た。カノンが鍵を締める。しっかりと締まったことを確認して、2階最奥の部屋を後にした。

水道で顔を洗い、だいぶ眠気が吹き飛んだ星、そして付き添いのカノンは、こぢんまりとした食堂で朝食を食べている。メニュー

ーは、ロールパン、スイカ、ローストビーフ、野菜のスープ、フルーツジュースだ。

「うん、美味い」

野菜のスープを口にして、率直な感想を述べる星。

「バランスも良いよね」カノンも感想を、少し声を大にして言う。台所で隠れて話を聞いていた料理人に気づいていたからだ。

しかし、故に旅のこともむやみには話せない。なので、2人は食事に集中した。

朝食を終えた2人は、ごちそうさま、と言い残して食堂を後にする。歯を磨いて部屋に戻ると、星は即行でベッドにダイブした。

「ふふつ。食べて直ぐ寝ると、牛になるよー」冗談めかして

カノンが言う。星は笑いながらベッドに座り直した。そして、表情を一変、真剣に彩る。カノンも自身のベッドに座り、星へと耳を傾けた。

「大事な話があるんだ。実は……」

短い、しかしとても印象深い夢の内容を星は語った。

それにカノンは驚き、目を見開いた。そして、心から尊敬するよ
うな声で告げた。

「……さすが大賢者^{アグライア}。夢にまで干渉できるだなんて」

それに星は、自身の考えを述べる。

「干渉した、ってことはやっぱり、俺が見た夢はアグライアが意図的に見せたものなのか？」

「うん。魔法を使って星君の夢を再構築したんだと思う」

「魔法、か……」

星はその言葉が気になった。

魔法といえば、RPGなんかでは欠かせない要素の1つだ。敵を攻撃したり、味方を回復・強化したりと、汎用性もあって、パーティに1人は魔法使いがいると助かったものだ。

「魔法は、5000年ぐらい前には皆が使っていたらしいけど、時代が進むにつれてどんどん衰退していつて、今では使える人はごくわずか。その存在を知らない人も少くないわ」

カノンが、魔法の歴史の大まかな流れを説明した。

「じゃあ、魔法の使用法っていうのは？」

「短いものから長いものまで、呪文を唱えれば、魔力のある人なら使えると思う」

それを聞いて星は新たな疑問をもった。

「アグライアは俺に、危なくなったら剣を振りエクレンドと唱えろ、と言った。ってことは、俺には魔力がある、のか？」 「うん、あるはず。なかつたらアグライアもそんなこと言わないだろうし」

そこで魔法の話題はとりあえず終わった。瞼を閉じて何か深く考えだした星に薄く微笑みかけ、カノンは部屋を1人、後にした。

5分程で戻ってきたカノンは、両手にマグカップを持っている。

それを1つ、星に差し出した。「コーヒーを淹れてきたよ」

「あるのか！？ コーヒー」

と反応した星は、ふと思い出す。

(あれ、前にもこんなことなかったか……?)

なんて思いつつも、ありがとう、と言って淹れたてのホットコーヒーを受け取る。

星は少しコーヒーを飲むと、ちょうどよい苦さに満足気な表情をする。故郷とは違う国、世界に行くと人は自国の食べ物に恋しくなる。しかしここウェリアルでは、星の故郷 日本で食べてい

たものが数多く出てきた。

ほろ苦さの余韻を味わっていると、カノンがタイミングを図ったように話し掛けてきた。

「夢の中でアグライアは、

リフレルム山に来て、って言ったんだよね？」

星はマグカップを置いて、深く頷く。

「ああ。確かにそう言った」

それを確かめたカノンは、顔を可愛らしくしかめて困ったような表情をした。

「それにしても、リフレルム山、か……」

「そのリフレルム山がどうかしたのか？　そこにアグライアがいるんだろ？」

ウエリアルについては全くと言っていいほど知識がない星は、ウエリアルの話題になると必然的に疑問符が多くなる。

カノンも特に何も言わずに答えた。

「リフレルム山は、ここからずっと北の方にある険しい山よ」

「ずっと北って、どれくらい？」

「この大陸の、海を隔てて北側にある大陸の更に北端。単純に歩いたとして考えても、3ヶ月は掛かるわ」

「3ヶ月も！？」

驚きを隠せずに、褐色の双貌を大きく見開く星。

単純に歩いたとして考えて3ヶ月、ということは、途中でモンスターに遭遇したり街によつたりしたりしたら必然的にそれ以上掛かる。

世界を救うための第一歩　アグライアのもとへ行くことから困難極まりない。或いは、これは試練なのか……。

と、星は微笑を交えて声高らかに言い放つ。

「だけど、3ヶ月間ただリフレルム山を目指して進むだけじゃない。その間にできることだってある筈だ」

それにカノンは一瞬目を見開いたが、直ぐに星に同意するように首肯し笑いかけた。そして、恐竜モンスター討伐の時に思ったこと

を改めて口にする。

「星君。君はやっぱり、救世主なんだね」

星はまじまじとそんなことを言われて恥ずかしさが込み上げてきた。しかし同時に、同じくらいの嬉しさも感じていたのだった。

リフレルム山へと行くことになった星とカノンは早速、もはやウィーク村ではなくストロング村と呼んだ方がいいのでは？
と言えそうなウィーク村を発とうとしていた。

救世主である以上迅速に行動するに越したことはない。

木製の門まで行くと、大勢の村人がいた。村長が代表して話し掛けてきた。

「もう行ってしまわれるのですか？ もっとゆっくりしていてもいいのですぞ」

カノンが申し訳なさそうに答える。

「ごめんなさい。私達にはやるべきことがあるんです」

村長はやはり残念そうな顔をしたが、それも直ぐに消えた。

「この世界を救うために何かしてくださるのですな。それならむしろは、笑ってあなたがたを見送るだけですじゃ」

村人達も皆、2人を見守っている。

星が村長が問うた。

「盗賊はどうするのですか？」

「官吏に引き渡しますかのう。今までは他のことで忙しいと言って相手にされなかったのじゃが、捕らえたのならはこちらにも目を向けてくれるであろう故」

「そうですね」

そうした会話を少しして、最後に村長が言った。

「せめてもの礼に、何か欲しいものがあったら言ってくたされ」

星とカノンは一瞬顔を合わせ、頷いた。

「剣を一振り、服と食料を少しください」

「それだけでいいのですか？」

それに2人は、はい、と答える。

直ぐに村人がそれらを持ってきた。

「ありがとうございます」

「なんの。では、後達者で」

そうして2人はウィーク村を後にした。

目指すはアグライアのいるリフレルム山。

道中には一体何が待ち受けているのだろうか。

10、いざ行かん リフレルム山（後書き）

これでウィーク村編は一応終わりです。次話は未定ですが、また一週間後くらいの投稿になりそうです。それでは

11、カノンの実力

ウィーク村を発った2人は、遙か北にあるリフレルム山を目指して進んでいた。

とりあえず最初の目標地点は決まっている。

ダレッタというそれなりに大きい町だ。ウィーク村で村長に近隣の町や村についても尋ねていたのである。

ダレッタまでは、行商人が歩いて3日程で着くらしい。特に大きい荷物もない2人ならば、2日もあれば着くだろう。

道中何も起こらなければ、だが。

そんなこんなで、彼らは2時間程歩き続けている。

星がポケットから携帯電話を取り出して、時刻を確認した。

「11時30分、か」

現在歩いているのは、広大な草原である。その草原の中央には大きくて太い木が、葉を青々と繁らせ立っている。

「あそこで少し休みましょうか」

カノンがその堂々たる大木を遠目に眺めながら言う。

星は異論無く同意した。

「ああ。もう昼だしな」

また少し歩くと、改めて木の大きさを2人は実感した。

幅は大人が10人は立って並べそうな程で、高さは優に30メートルは超すのではないか、という程もある。

更に近づくと2人は木よりも、あるものに目を奪われた。

「あれは……人？」

それはフード付きのマントで体を上から下まですっぽりと覆い、更に木の方を向いていたのでその正体は不明だった。

2人はとりあえずそちらに向かい、星が尋ねるように声を掛けた。

「あの、何してるんですか？」

するとその人物がゆっくりとこちらを向いた。そしてフードを脱

ぎ、顔を露にした。

縦長の顔に、万人を射抜くかのような威圧的な切れ長の双眸。マントの中にまで届いている白銀の髪。まさに前方に聳^{そび}える大木のように威風堂々とした、齡30程の男だ。

「……救世主とやらか」「っ!?! 何で知ってるんだ」

突然の男からの台詞に驚く星。

「ちょうどいい。お前の実力、見せてもらおうか」

謎の男が低い声で告げた。そして、マントの中から剣を取り出して左手に持ち、腕をだらりと下げて星の方を向いた。

「あんた、何を言ってる……!?!」

星の言葉もろくに聞かず、男は剣を持ち、歩いて来た。それだけで草原の空気が変わる。

星の前まで来た男は、容赦なく左手に持つ剣を振りかざす。

ゴウツ、と空気を裂くような音と共に星の首筋に鋭利な刃が迫ると、星の首に迫っていた刃が、首筋からほんの数ミリの所で止まった。目を大きく見開いたまま嫌な汗を垂らし、全く動けなくなる星。彼に向かって謎の男は、心底失望したように、もともと切れ長の目を更に細くして告げた。

「その程度なのか、救世主よ」

星は何も返すことができない。謎の男は再び低い声で告げる。但し、今度は星に向かってではない。

「娘。お前は何故私を止めなかった。実力は確実にこいつより上と見るが」

彼はカノンの力を感じ取っていた。星を切りつけようとした時も彼女に少なからず意識を集中させていたが、隙がまるでなかった。

「あなたからは殺気が感じられなかった」

カノンはさらっと告げた。男は満足気に笑うと、左手に持っている剣をカノンに向けた。

「娘よ、私と一戦交えぬか?」

カノンは少し考えた後言った。

「……わかったわ。だけど、終わったら直ぐにここから立ち去って」「いいだろう。では、いくぞ!!」

男は左手の剣を後ろに構え、右足を前に出し、勢いよく突貫してきた。カノンは自然体で、男の剣はもちろん手や足の動きもしつかりと確認する。腰には依然として抜かれていない剣が鞘に納められている。

そして、俊足でカノンのもとまで迫った男は、目にも留まらぬ速さで剣を薙ぐ。

それをカノンはしゃがんで避け、右手で自身の剣の柄を握る。そして、カウンターの抜刀切りを放った。

「はっ!!」

その速度、まさに雷光の如し。

「ぐっ!?!」

男は大振りの一撃を外したままの無理な体勢で後ろに全力で跳ぶ。結果、なんとかカノンの抜刀切りを避けた。

しかし、雷光の如き一閃を見事に避けた男の瞬発力は流石である。2人はほぼ同時に剣を振るう。それらは互いにぶつかり、金属の小気味よい音を広大な草原に響かせた。

敵の攻撃を或いは避け、

或いは受け流し、刹那の間に反撃し、高速の攻防が繰り返される。5分が経った。

依然として打ち合っていた謎の男とカノンだったが、男がカノンの一瞬の隙を突いて、剣を両手で持ち頭上に掲げると、勢いよく振り降ろす。

「終わりだ」

体格の違いからして2人の力の差は歴然だ。カノンが咄嗟に防いだところで、力負けするだろう。

だから、男は自分の勝ちを確信した。

断頭台のような男の剣がカノンに迫る!!

彼女は男の剣を迎え撃つように剣を構えた。

そして男の剣はカノンの剣に当たり 折れた。

「何っ!？」

男は信じられないものでも見るかのように自身の折れた剣を見て、次にカノンに視線を移す。

「一体、何が起きたのだ!？」

それにカノンは、息一つ乱れていない顔で、涼しげに言った。

「あなたの剣の、同じ場所を攻撃し続けたの」

それを聞いて男は理解した。つまりは、あの速度、衝撃でまったく同じ場所を攻撃し続ければ、いずれ耐久度は落ち、折れる。それが彼の場合は大技を仕掛けた時、というわけだ。

高速の剣撃の攻防を繰り返しながらある1点のみを集中攻撃。それは並みの人間にできる筈がない。謎の男も十分常人離れた身体能力だが、カノンはそれをも超えていた。

始めはあつけにとられていた男も、次第にすっきりしたような清々しい顔になっていった。

「まさか私が敗れるとはな」

「敗れるとはな、って、あなた絶対に半分も実力出してなかったでしょ」 「……それはお互い様だ」

男は、鋭い眼を半ば隠すようにフードを目深にかぶった。そして、カノンへと話し掛けた。

「私は、ファイ・オミクロン。娘、お前の名は何という?」

「カノン・ミシユリ」

互いに名乗り合うと、謎の男改めファイ・オミクロンは、少し離れた場所でごつちを見ながら立っている星に言った。

「……救世主よ、強くなれ」

それを最後にファイはどこへともなく去っていった。

星はカノンの方へと歩いていき、隣に立つ。

「あいつは一体、なんだったんだ?」

「わからない。だけど、またいつか合間見えるときが来る。そんな予感がする……」

しばらく草原に静寂が訪れた。それを打ち破ったのは、星だ。

「……あいつに殺されそうになって、改めて自分の未熟さに気づいた」

「星君……」

「だから、俺はあいつに負けないくらい強くなりたい」

星の目は本気だ。揺るがない意志の炎がその瞳に灯っているかのように。

カノンも星の意志を汲み取り、同様に真剣な表情で返答する。

「わかった。星君、君に私の剣の全てを教えるわ」

星はあからさまに嬉しそうな表情をする。

「ありがとう」

草原には澄んだ風が穏やかに吹き、太陽が燦々と降り注いでいた。

11、カノンの実力（後書き）

少し遅れましたが、なんとか更新です。

謎の男、ファイ・オミクロンの登場です。適当に名前を付けたわけではありません。

話は変わりますが、この小説、前話を更新してちょっとしたら、5000PVを超えていました。これもこの小説を読んでもらってくださっている皆様のおかげです。

次回こそは1週間以内に更新できれば、と思います。それでは

12、剣とサンドイッチ

謎の男ファイが去り、2人は本来の目的である昼食を食べるため、草原の真ん中に立つ巨木の下に向かった。日陰ではあるが、葉の間から射す木漏れ日が心地よい、絶好の休憩場所だ。

木の根本へ腰を降ろすと、星の腹から、グウと音が鳴った。長い時間歩いたのと殺されそうになったのとですっかり疲れているのだろう。しかし彼の瞳には強い意志が宿っていた。現在いまより強くなる、という意志が……。

それを見たカノンは、一刻も早く星に昼食を食べさせようと、持っていたバスケットを開け、星に誇らしげに見せる。

「じゃじゃーん！ サンドイッチを作ったの」

「いつの間に!？」

驚愕の表情で返す星。それにカノンは、そこそこある胸を張って答える。

「朝、宿の食堂を借りて作ったの」

星は、なるほど、と頷き改めてカノンが作ったサンドイッチを眺める。それは、何というか、凄かった。もちろん良い意味で。

色とりどりの野菜や肉が綺麗にパンに挟まっまつていて、非常に美味しそううだ。

口の中の生唾を飲み込み、トマトとレタスが挟ままったサンドイッチを手取る星。

「いただきます!」

カノンはにっこりと、「どうぞ召し上げれ」

そして、パクつと。半分程を一気に食べた。

その瞬間、何かが、来た。

「……ん？ んんん？ ……くはっ」

残り半分のサンドイッチを手にしたまま、星は前のめりに倒れた。結果。カノンの料理は酷い。これに尽きるだろう。

「星君、どうしたのっ!？」

薄れゆく意識の中、カノンの必死な声が聞こえた。星は、残った力でなんとか声を振り絞る。

「やつ……ぱり、人って……欠点、の1、つや2つは……あった方が……くはっ」

そして星は、精一杯の笑みを形作りながら、その意識を手放した。

「う、うう〜ん」

星は目が覚め、ゆっくりと瞼を開けるが、眩しさに目を細める。目を開けては閉じて、眩しさにも慣れたので、周囲を観察する。素朴で広大な草原。大木　　どうやらこの木の根、おそらくさつき座っていた場所に頭が乗っかっているのだろう。

そして少し離れた場所では、カノンが剣の素振りをしている。

星はカノンの素振りを見学することにした。見て学ぶことも大事な鍛練だ。

しばらくカノンを可愛いなあとか思いながら見ていたら　　無論 剣捌きも見ているが　　彼女がこちらに気付き、駆け寄って来た。

「いきなり倒れたからびっくりしたよ。何があったの？」

星は考えた。せっかく朝早く起きて作ってくれたサンドイッチを不味いというのは申し訳ない。だから、

「カノンが作ったサンドイッチが美味すぎて、気絶しちゃったのかな」

そう、微笑みながら言った。料理の腕が壊滅的な女の子に主人公ヒロインが言うように。

すると、カノンは心から嬉しそうな顔をした。そして、ホツとしたように言った。

「良かった……」

その言葉を聞いて星は理解した。

(心配してくれてたん、だな)

思えば、ここ数日で色々なことがあった。

異世界へと飛ばされた。

モンスターに襲われた。

盗賊の親玉と戦った。

同じ人間に殺されそうになった。

普通ならば発狂してもおかしくないことばかりだ。だが

「カノンがいたから、平気だった。カノンがいたから、今こうして生きていられる」

カノンは一瞬その緑玉石エメラルドのような綺麗な翠色の瞳を見開いたが、直ぐに穏やかな顔になる。

「星君……」

昼時の草原に静寂という名のそよ風が吹く。その静寂も、2人にはどこか心地よかった。

何分経ったのだろうか。

星の心は嘘のようにすっきりとしていた。まるで雲一つない澄んだ青い空を体現しているかのように。

「始めましょうか」

カノンが、ウィーク村で貰った星用の剣を手にして言った。

「本当か!？」

遂に剣術を教えてくれるとだけあって、星の喜びようは半端ない。まさに喜色满面といった様子だ。

だが、彼はまだ知らなかった。強くなるということがどんなに変なことなのかを。

星とカノンが互いに向かい合い、剣を手にして立つ。カノンは右手に持ち、星は両手で持つ。

「まずは、私に斬りかかってきて。私はそれを避けるか防ぐかするから」 「わかった。じゃあいくぞっ!」

星は両手で持つ剣を右後ろに構え、カノンに向かって駆ける。その距離10メートル。

「おおおおおおっ!!!」

直ぐにその距離を駆けた星は、カノンに右上から袈裟斬りを仕掛ける。彼女を斬ってしまったらどうしよう、などと考えていた星だったが、カノンは片足を軸に半回転してそれを避けた。

今度は、左側から横一線に剣を薙ぐ。が、カノンはそれも少し後ろに跳び難なく避ける。

「はあっ!」

と気合いを入れつつ次は突きを繰り出す。

だが案の定それも危なげなくかわす。

次第に星の心に焦りが生じてきた。それに伴って剣の振りも自然と雑になっていく。

「つく! はあっ!」

もはやただ剣をめったやたらに振り回すだけとなった星を見て、カノンが宣言した。

「そこまでっ!」

星は慌てて剣を止める。

「とととと」

と言つて剣を腰の鞘にしまう。激しい動きをしたせい、男にしては少し長めの黒髪はボサボサだ。

しかしカノンのロングの煌めく金髪は全くと言っていい程乱れていなかった。同じく、鎧服にも汚れはない。

彼女は星の剣術の師として、今の星の攻撃を批評する。

「最初の方はよかったけど、どんどん振りが雑になっていってる。闘いはなるべく焦らないことが大事よ」

それを星は真剣に聞いた。そして、記憶に留めておくようにする。「身体も温まった所で、本格的に剣の修行に入りましょうか」

「応っ!」

かなり疲れている筈の星だが、もはや疲れを忘れる程張り切つて

いるため、修行に支障はない。 2人は再び先程の位置へと立つ。

「星君。剣を習ったことはある？」

とカノンが尋ねた。ある程度剣術を学んでいれば、その分修行内容を飛ばすということだろうか。

星のもといた世界、つまり日本では、幕末の廃刀令とともに、剣の術ではなく、剣の道を学ぶのが主流になった。

その剣道も、殺しあいなどではなくスポーツとして多くの人々に親しまれている。

しかし、星はちょっと誇らしげに答えた。

「通販で買ったDVDで少し」

「つうはん？ でいーぶいでい？」

カノンは聞きなれない単語に首を傾げる。

「ああ……まあ、学んだんだ」

星はごまかしても取れない下手なごまかしで応じた。

少し、いや全くわからないといった感じの表情をするカノンだが、そこまで気にはならないのかそれきりで先を続ける。「それなら

……私流に、防御や回避、カウンターを練習するのがいいかな」

「なるほど……」

軽く頷いて納得しながら、恐竜モンスターやファイと闘っていたときのカノンの姿を思い浮かべる。

自分で攻めることももちろんあったが、華麗に敵の攻撃を的確に防御、回避してからのカウンターは特に凄かった。

更にこれらは護身にも最適である。敵の攻撃を食らわなければ自分が傷を負うこともないし、敵にプレッシャーを与えることもできる。

攻撃に特化し、敵に攻撃される前に倒すというのもありだが、よっぽど実力がなければ無理である。星が見るに、カノンならば攻撃に特化しても十分強いと思うが……。 「それで頼む」

と星は答えた。いずれにせよそう答えただろう。

「じゃあ早速始めるわ」 ダレッタに着くのが遅れることは必至

だが、その時間はむしろ友好活用されることになる。
こうして、星の剣の特訓が始まった。

12、剣とサンドイッチ（後書き）

ちよつと更新しないだけでPVって結構減るもんですね。目標の1週間に1回更新をキープできればいいんですが……。

ところで、先日体育祭がありました。身体のおちこちが筋肉痛で痛いんです。
それでは

13、消失と焼失、そして

剣の腕を上げるには、地道な特訓が大事である。
防御。

あらゆる方向からの攻撃を文字通り防御する訓練だ。続けていくうちに防いだ衝撃で腕が痛くなる。まずこれを3時間。回避。
縦横斜めあらゆる方向からの攻撃を、防御せずに避ける。最小限の動きで避けるのが望ましい。これは足腰にくる。防御の次に少し休んでこれを3時間。

計6時間プラス休憩数十分で、辺りはもうすっかり暗くなっていた。

だが、雲1つない空に点々と瞬く星々と月光の輝きで、暗さの中にも仄かな明るさを見出だすことができるのも趣があつて良い。

月の頃はさらなり、といったところであろうか。

「ふう〜」

ばたつ、と星が草原に仰向けに倒れ込む。

彼は日本に（地球に）いた頃はゲームばかりしていたので、運動をする機会があまりなかった。それこそ体育の度に筋肉痛になるぐらいに。

「はい、どうぞ」

とカノンがウィーク村でもらったフルーツジュースを差し出す。

そして仰向けの星の隣に腰かけた。逆の手には自分のもある。

「ん、サンキュ」

そう言つてありがたくジュースをもらうと、疲れきつた身体を起こして座る。

「星が綺麗だね……」

カノンが空を見上げながらしみじみと言う。

「ああ……」

星も日本の都会では到底見られないような満天の星空に見入つて

いる。

他に誰もいない草原で、

2人はフルーツジュース片手にしばらく星空を眺めていた。いつしかお互いの手と手が重なり合っていたことにも気づかずに。

「日本の人達は心配してるだろうな……」

星が誰にともなく呟いた。それを聞いていたカノンが尋ねる。

「あつちの人達？」

「家族や友達とか。カノンも家族に心配されたりしないか。旅してて」

するとカノンは少し俯いて、静かに言った。

「私の家族や友達は、9年前に死んだわ」

「っ!?!」

隣で星が息を呑む。そして、悪いことを聞いてしまったことを謝る。

「ごめん……」

「ううん、気にしないで」

それを期に嫌な沈黙が流れる。カノンは俯いたままで、星は掛ける言葉がみつからないといった風にカノンを見ている。長い1分が過ぎ、カノンは星にしおらしく言った。

「この際に、私が旅をしてる理由を話しておくわ」

星は真剣な眼差しで、大きく頷いた。これは適当に聞き流しているような話じゃない。おそらくウェリアルの滅亡に大きく関係するのではないかというぐらいの、しかしそれ以上に、カノンの過去を知ることができる話だから。

大きく深呼吸をするカノン。

そして、自身の過去を語り始めた。

「私は、この大陸のずっと東にある大陸の、小さな村で生まれたの。4歳ぐらいから同じ年頃の子達と村中や、時には村の外にも出て、

毎日のように遊んでた」

懐かしそうに語るカノンの顔は、でもどこか寂しそうでもあった。「でも、9年前、私が7歳の頃にそれは起こった」

カノンは、怒り、憎しみ、そして悲しさの入り交じった顔をする。星はそんなカノンを見たことがなかった。

そして話は続く。「その日は今日みたいにとても天気が良いくて、お出かけ日和だった。だから、父と母に頼まれて少し遠い町におつかいに行っていたの。そして夕方になって村に戻ったら」
星にはその先がわかるような気がした。地獄のような光景を……。「村人が死んでいた」

思わず息を呑む星。

考えてはいた。しかし実際に両耳にその言葉が入ってくると、事の重さや重大さを嫌でも理解することになる。死というのはとても重く辛いものなのだ。

「私は幼いながらに我が目を疑ったわ。朝までいつもみたいに活気づいていた村が燃えていて、心臓を一突きされた死体がそこら中に転がってて。しばらく立っていたら、燃えている村の奥から1人の男が歩いてきた。私は怖くて1歩も動けなかったわ」

死とは程遠い平和な国に暮らしていただけに、星にはその凄惨な光景を想像することなどできなかった。いや、したくなかった。

そういうシーンが出てくるゲームは星もプレイしたことがある。

しかし、あくまで画面の中の映像である。現実リアルの生々しさは到底わかり得ない。

なおもカノンは語り続ける。

「全身返り血で赤く染まったその男は、手に持った槍で私の心臓を刺そうとしてきた。私はただ目をぎゅっと瞑ってた。けどその槍が私を刺すことはなかった。恐る恐る目を開けるとその男はもういなくて、その代わりに1人の女性が立っていた。彼女は私に手を伸ばしてきた。それを両手で握り返して……。とても温かい手だった」
「その女性ってというのは？」

「彼女の名前はディオネ。」

大賢者にして、私をここまで育ててくれた人……」

星には当然の疑問が浮かぶ。

「大賢者って、アグライアだけじゃないのか？」「うん。ウエリアルには3人の大賢者、アグライア、ディオネ、クレイオーがいるの」
「3人の大賢者、か……」

一応納得して頷く星。カノンは少々本筋からずれた話を戻すようにコホンと咳払いする。

「話は戻って、私は形の残った死体を埋めて、その後はディオネに付いていった。彼女はアグライアの予言があつた後、各地を旅してモンスターを倒したりしてみたい」 「それでちょうどその時カノンの故郷の村に来たってことか」

「ええ。それで1年前まで一緒に旅をして、今は別々に」

「なんでわざわざ別々に旅してんだ？」

「彼女はちよつと変わってる人だから」

と苦笑しながら言うカノン。

天才は変わっている人が多いというが、ディオネというのは一体どんな人なんだろうか。星は俄然興味が湧いてきた。

だが、最後にもつとも聞いておくべきことがある。

「カノンが旅をしてる理由^{わけ}っていうのはやっぱり……」

「殺された村人達の復讐^{むじやう}っていうのもあるけど、今は他にやるべきことがあるわ」

星は、一番の目的が復讐だと思っていたので少し目を見開く。それ以上にやるべきことは。

「あれは5年前くらいだったかな。ディオネがいつになく真剣な顔で言ったの。やがてやってくる救世主と共にこの世界を救いなさい、って」

「そう、だったのか。でも、俺なんかいてもただの足手まといじゃないか？」

「いえ、君は立派な救世主よ。それに、足手まといだなんてことは

絶対ない」

なぜカノンそこまで言いきれぬのか星にはわからなかったが、素直に嬉しかった。

と、カノンが立ち上がる。

「夜ご飯にしましょ。私が用意するから、少し待っててね」

なんだかんだで、自分の故郷の人達が殺されて辛くない筈がないのだ。後ろを向いて立つカノンの頬にはうっすらと涙が伝っている、星にはそう見えた。

結局星はカノンの作った料理を再び食べた。それは決して美味くはなかったけど、星には満足だった。

「ごちそうさま」

2人の距離がちょっと縮まった日だった。

13、消失と焼失、そして（後書き）

なんとか更新です。ディオネはそのうち出てきます。多分。

最近期末テストが近づいてきて勉強が非常に面倒くさいです。
それでは

14、インターネット接続（前書き）

今週の月曜日から期末テストなんで、半ば無理矢理に更新します。

14、インターネット接続

携帯電話を開く。

見慣れた待ち受け画面に映し出される時刻は午前5時。電波は無し。充電は満タン。

(そういえば、そろそろ電源切れてもいい頃なのに充電すら減らない) 星はそのことに少々疑問を持つが、世界が世界だし特殊な電波でも出てるんだろう、と適当に割りきる。

ふと隣を見ると、カノンはすやすやと穏やかな顔で眠っている。

昨日、2人は夕食を共に食べた後、1時間程雑談をしてから直ぐに寝た。

星はもちろん疲れていただろうし、旅慣れしているカノンも、悲しい過去を語ったことで凄惨な光景が脳裏に強く浮かんだのか、いつになく疲れていた。

星は、カノンを起こさないようにゆっくりと立ち上がり、自身の剣を持って離れた所に行く。そして鞘から刀身を覗かせると、上がったばかりの陽が銀の刀身に反射する。

剣を鞘から全て抜き放つと、鞘を腰のベルト あくまで日本にいた頃の、ファッション重視で鞘を差す部分はない に差す。次に柄を両手でしっかりと握ると、素振りを始めた。

ひたすらに頭上に掲げた剣を正面に振り下ろすということが続ける。

1000回振ったら休憩、

そして再び1000回振るのを繰り返すこと1時間30分。合計1000回素振りをした。

(こりゃあ腕が筋肉痛になるだろうな)

なんて考えながら草原中央の大き木に戻る。

少量の水を飲んでみると、カノンが目を覚ました。

すると彼女は眠そうに目を擦り、欠伸をする。「ふあくあく。ん、

おはよう、星君」

「おはよう!」

妙に元気がいい星に、カノンは眠いながらも尋ねてみる。

「元気いいけど、何かあった?」

「早く起きて素振りしてた。いやあ、朝早く運動するのって気持ちいいな」

「そ、そう」

そして少し経ってカノンの目がすっかり覚め、2人は朝食に手をつける。

ウィーク村を発つ時にもらった　これは星も聞いたことがない

ポッタンという名前のフルーツだ。この地方の特産物で、村人も美味しいと言っていた。見た目は、ズバリ黄色い桃だ。しかし中身はじゅるりとした水気たっぷりの果肉ではなく、林檎や梨のそれだ。味はというと……。

「苦つつツ!」

「うん、苦い……」

そう、苦かった。ブラックコーヒーの何倍も。2人は、これを美味しいと言っていた村人の味覚を疑ったのだった。

ポッターを食べた2人は、回復アイテムを使用した旅人みたいに元気になった。その苦さとは裏腹に疲労回復か何かの効果があるらしい。良『食』は口に苦し。

そしてそのまま少しの間星の剣の修行をして、再びダレッタに向けて旅立った。

30分くらい歩いて広大な草原のおよそ半径を歩き、道は突然土の道になる。

「あとどれくらいで着くんだ?」　星がカノンに聞く。

「休まず歩き続ければ、6時間ぐらいかな」

「6時間……長いな」

休まず歩いてその時間なら、休みつつ歩くと多く見積もっても8〜9時間は掛かる。昼食等も入れて。

星はもはや癖になってきた、携帯電話で時間を確認する動作をする。充電がなくならないことは気にしないことにしていた。

「7時か……午後には着くか」

それを傍目で見ていたカノンは、前から疑問に思っていたことを尋ねる。

「よくそれ見てるけど、なあに？ それ」

「これは携帯電話っていつて、俺がいた世界での主に……伝達手段かな。でも、ウィーク村で音声を録音して盗賊に聞かせたみたいに、音楽、音声を流すこともできる。他にも色々なことができるけど、この世界には日本の電波あつち 携帯電話を使って色々と接続するためのものがないからできない」

感心したような顔で聞いていたカノンは、星の前に手を出して言う。

「ちょっと貸してくれないかな？」

「ああ、いいよ」

そう言っつて星は携帯電話をカノンに差し出す。「ありがとう」

そして、ちょうど道の脇の方に置いてある石のベンチ？ に腰を下ろす。

ポチポチといろんなボタンを押しては、「おお」とか「わあ」とか言っている。星も後ろで微笑ましげにそれを見ている。

(そんなに珍しいかな、携帯)

しばらくして、カノンが星に言う。

「要するに、電流があればこれを接続できる、ってことかな」

どれどれ、と言いながらカノンの手にある携帯電話を見ると、インターネットに接続するボタンを示している。

「まあ、波長や周波数が合えば」

カノンは、よくわからない風だったが、携帯電話を持って星から少し離れるとそのまま背を向ける。

「少しの間、目を瞑っててくれないかな」

「？ わかった」

そして星は目を瞑る。 30秒程経って、カノンが「もう開けてもいいよ」と言ったので、星は瞑っていた両目を開く。 目を瞑っている間、ビリビリ、とかいう音が聞こえたが、気にしないことにした。

そしてカノンが見せてきた携帯電話の画面を見てみると、なんとインターネットに接続した時のトップ画面が映っていた。

「！？ どうやったんだ？」

それにカノンは、意味ありげに一言。

「秘密」

「……何で？」

「まあ、ちよつと、ね。そのうち教えるわ、きっと」

何か引つ掛かるものがある星だが、ネットに接続してもらったのでこの際特に追及するようなことはしなかった。

「まあ、何はともあれありがとな。カノン」

「いえいえ」

と微笑と混じりに言うカノン。

（やっぱ可愛いなあ）

そんなことを若干にやけながら考えながら、星は使えるようになったばかりのインターネットで『異世界』と検索してみた。

すると、異世界を取り扱ったゲームや小説、漫画などのサイトがちらほらと目についたが、この世界、ウェリアルに関する事、その他異世界に行った者のことなどは見つかる由もなかった。

本来、日本に帰れないことで非常に焦るものなのだろうが、星はそれも少ししか感じなかった。いや、むしろ安心してさえいた。

無論、カノン・ミシユリという1人の少女が側にいてくれるからだ。

「よし！ 行こうか、ダレッタへ！」

だから、こうして前向きに進めるのだ。

「うん、行きましょか」

今日もウェリアルは良い天気だった。

14、インターネット接続（後書き）

こういう小説だと、頭のいい、所謂天才なんて文字だけで創ることができません。しかし現実は……。

期末テストをそげぶしたいですね。

そげぶ（その幻想をぶち殺す！）

学生の皆さんも社会人の皆さんも、仕事に勉強頑張ってください。
それでは

15、石の町、ダレッタ

その後2人は、歩きに歩き　それこそ昼食を食べるために途中で少し休んだ以外はさほど休むこともせず7時間、午後3時を少し回った頃、ようやくダレッタに到着した。

「ふう〜。着いた、のか？」

かなり疲れた様子で膝に手をつけている星。部活もろくにやらず身体がなまっていたので、脚の関節にかなりくる。

「ええ。ここがダレッタ。『石の町』とも言われているわ。って言うても私も初めて来たんだけどね」

カノンの言葉に、星は「なるほど」とダレッタの方を見ながら言う。

かなり遠くまで続く高さ5メートル程の外壁は小さな石の集まりでできている。それこそ川原やそこら辺に落ちている石を組み合わせて造ったような石壁だ。

「草原を出てからここまで来るのにずっと土の道だったけど、ダレッタの人が町造りのために石を取ってったのかな」

「そうかもね」

などと話しながら、前方にある門に向かう。

門には左右に1人ずつ門番が槍を手に立っている。門扉はなく、町の中が少し眺められるようになっていて。

門前に着くと、門番が話しかけてきた。

「石の町ダレッタにようこそ。この町へはいかようで？」

「宿に泊まるためです」

星が言う。だがもちろんそれだけではない。情報収集のためでもある。そしてこれは星だけが考えていることだが、

（ゲームでこういう町に来たら、何かイベントが発生する筈だ。それなら、この世界でも……）

つまりは、この町に来たことで旅をする上でのヒントなどが得ら

れるかもしれないということだ。ウィーク村でも、いわば『盗賊退治』とも言えるイベントが発生した。それならここダレッタでも何かが起こるかもしれない、というのは間違っではない筈である。

と、門番が確認するように聞いてきた。

「剣をお持ちのようですが、どこかの国の兵士ですか？」

「旅人ですよ」

と一言返す星。

すると星に話しかけてきた門番と反対側に立つ門番は互いに目配せし、頷きあう。そして、

「ではどうぞお入りください」

と言つて再び左右にずれる。

そうして星とカノンは無事にダレッタ内に入ることができた。

まず2人の目についたのは、左右いっぱい伸びるアーケードだ。それもただのアーケードではない。1つの巨大な石をくりぬいて造つたように天井部が広がっており、所々にある柱がその天井を支えている。

そこかしこで開かれている市は、大勢の民衆で賑わっている。売られている主なものは食料だが、服屋や道具屋なども少数見受けられる。

「この世界に来て、初めてこんなにいっぱい人を見たよ」

市の喧騒　食料を値切る主婦、はしゃぐ子供、店主による店の宣伝等を見ながら星は言った。「ふふつ。星君、なんか目が穏やか」

「ああ。俺がいた世界でもこういう光景はよく見かけて……懐かしいなあ」

感慨深げな表情の星。ウェリアルに来たのはつい5日前なのに、ゲームに勤しんでいた日々がひどく懐かしく思えてくる。

しかし、こんな日常も悪くないと思う自分もいた。多くのゲームをプレイしてきた故に割と感受性が高い彼は、自分が救世主と知って最初は呆然としていただけだったが、今では心の中で何かが激しく燃えていた。

だが覚悟にも似た感情、というのも持っていた。

まだ旅は始まったばかりだ。だから、本当の過酷、試練はこの先
幾らでも起こりうる。そして、（考えたくはないが、悲劇も……）
起きては欲しくない。当たり前だ。

RPGで主人公やキャラクターが旅立つきっかけ、強くなるきつ
かけに、人の死、というものがある。

その手のゲームでは比較的王道な物語の進み方だ。シナリオ

大切な人の死を糧に主人公は打倒魔王を誓う。そして旅先で新た
な仲間と出会い、様々なイベントを経て、最終的には世界を揺るが
す程の力を有する魔王を倒す。そしてエンディング。

しかし、あくまでそれはゲームの話だ。この世界、ウェリアルは
紛れもない現実だ。

星は、やはりよくゲームをやる所為か、物事をゲームに見立てて
考える癖のようなものがある。

ゲームに似たようなこの世界でそう考えるのは無理もない。星で
なくとも、その手のゲームに触れたことのある人なら、「この村は
あのゲームのどこどこに似ている」だとか、「このモンスターはあ
のゲームに出てくるあのモンスターにそっくりだ」とか思うだろう。
後者は考える余裕があれば、だが。

だけど、ゲームにしろ現実にしろやることは同じだ。

（悲劇を起こさせないために、救世主おれがいるんだ。救ってみせるさ、
この世界を）

それは決して倨傲などではない。大体、ネガティブな思考の救世
主など世界を救うに足り得ない。それに、理想は大きく持った方が
その理想を現実足らしめるための努力を促す。と、

「何か買いたい物でもある？」

カノンが星に尋ねた。市に並ぶ店の方を見ながら考え事をし
ていたので、何か欲しい物でもあるように見えたのだろう。

「いや、特にないよ」

「そう？ 欲しい物があつたらいつでも私に言ってね」

「ああ。ありがとう」

そして再び歩き出す。アーケードを抜けて直ぐに見えたのは、石畳にびっしりと建ち並ぶ石造りの家だ。

その家々を眺めながら2人は町の奥の方に向かう。

すると、他とは比べるまでもなく大きな建物が正面に見えた。

その建物の門には大きな表札が付けられており、そこには、

『ダレッタ庁舎』

そう彫られていた。

「役場、か」

「そうみたい」

「どうせだからここで宿の場所を聞くか」

「ええ。そうしましょ」　　そうして星とカノンはダレッタ庁舎の

門を潜り、中に入った。

入って直ぐの所に、簡素な、やはり石造りのカウンターが設置されており、中年のおばさんが暇そうに立っている。2人はそこに行き、カノンがおばさんに話し掛ける。

「あの」

そう言うと、おばさんは「何でしょう」と一言だけ言ってカノンの方を見やる。その顔には明らかに面倒くさそうな色が浮かんでいる。カノンはそれを特に咎めずに、宿を探している旨を説明する。

それを聞いたおばさんは、何度も説明したことがあるように至って事務的に話し出す。

「この庁舎を一度出て頂き、左手の方に進んで頂ければ直ぐに町が運営する宿舎に着きます」

言い終わると、もう話は終わりだ、というように奥の方に行ってしまった。

「あんなに暇そうにしてたのに」

星が思わずといった風に愚痴をこぼす。それにカノンは苦笑いをするしかなかった。

宿は直ぐに見つかった。

さっきの表札の『ダレッタ庁舎』より更に大きく『ダレッタ宿舎』と彫られていたのだ。

さっきのおばさんは、こんなに簡単に見つけることができる宿の場所をいちいち聞きにくる者達にうんざりしていたのだろう。

中に入ると、庁舎と同様に石造りのカウンターがあり、今度はウイーク村の時のような、人の良さそうなおばさんが立っている。

2人が近づくと、

「あら、恋人どうしてお泊まりかい？ いやあ、若いつて良いねえ」といきなり言い出した。

それに呆然とした星とカノンだが、直ぐに2人揃って頬を赤く染める。それ見ておばさんは満足そうな顔をして言う。

「この宿は町が運営してるから格安だ、まあ、ゆっくりしていきな」としてカウンター下から部屋の鍵を取り出すと、カノンに渡す。

「ありがとうございます」

と頬を赤らめながらも一言礼を言い、2人は部屋を目指す。部屋に着くまで2人とも終始無言だった。

カノンが部屋のドアに鍵を差し込み開けると、それ程大きくはないが、町営宿舎にしては綺麗に掃除されている部屋が姿を現した。

その部屋を見て星とカノンは啞然とする。

なぜなら、ベッドが1つ　大きなダブルベッドしかないからだ。

星が言う。

「あのおばさん……。部屋を代えてもらってくるよ」

そして部屋から出ていこうとする。

「待って！」

とカノンが呼び止めた。そして更に頬を赤らめて言う。

「……私は、いいよ」

「え？」

「その……一緒に寝ても。それとも、星君は私と寝るのは嫌？」

星も頬を多分に赤く染めつつ、しかし反射的に返す。

「そんなことない！むしろ、カノンみたいな可愛い娘と一緒に寝れるなんて、俺の方が嬉しいよ」

（つて、俺は何を言ってるんだ！）

そういう言葉は言ってからその恥ずかしさを自覚するものだ。

だが星以上に、カノンは耳まで真っ赤に染めていた。

「星、君？」

「いや、その……そうだ！市に行ってみないか？」

ごまかした。

星はゲームをよくやっていて女性経験がなく、カノンは修行に明け暮れていて男性経験がない。なので2人とも『そういうこと』に關しては非常に疎いのである。

カノンはいつもの彼女らしくなく、慌てながら答える。

「そ、そそそそうね。そうしましょ！」

だがこれは大きな、そして最初の一步だ。

2人の胸中には淡い思いが芽生え始めた。

その思いは、互いを助け合うことになるだろう。

ウェリアルは今日も温かった。

15、石の町、ダレッタ（後書き）

とりあえず更新です。

ところで、先日書店に行ったら、『魔法科高校の劣等生1』があったので、買ってみました。お気に入り登録しているのはいいのですが、最初の方しか読んでなかったんで。

それにしても、ラノベ1の人気を誇る電撃文庫で出版されるっていうのもすごいですね。まだ途中までしか読んでませんが、流石に面白く、サクッと読み進められます。

次の更新はおそらく来週だと思います。それでは

16、少年と少女（前書き）

携帯電話とパソコンの両方で執筆したので、変な改行等あると思いますが、これ以降スルーして頂ければ幸いです。

16、少年と少女

何か話すということもせず市に向かって歩く星とカノン。

互いにちら見しては目が合い、逸らす、という動作を繰り返す。

市に着くと、とりあえず食料を売っている店に行き、旅路に備えて少し多めに携帯用簡易食料を買っておく。

再び宿に戻ろうとすると、星が意を決したように口を開いた。

「他にも何か見に行かないか？ いや、行きたいんだ。カノンと」

それにカノンは面食らったような表情を浮かべたが、直ぐに微笑んで言った。

「うん！」

そして、2人の間に流れる空気が和やかなものになった。2人共この雰囲気を望んでいたので、喜んで和やかムードを歓迎する。

星は日本にいた頃、女子とはあまり縁がなかった。無論年頃の少年故、全く女子に興味がなかった訳ではない。

友達との何気ない会話ではよく女の子についての話題が出て、その度に赤くなりながら聞いていた。

ゲームの主人公で性別を選べるものは、とりあえず女性を選んだ。

しかし何と言っても現実の女性との交流があまりなかった。故に、

星にとって最も側にいるのが長い女性 家族や親戚を除く、

それがカノンなのである。

それは生きておき
閑話休題、2人は食料品店の他にも色々な店を見て回った。

花屋、本屋などの普通の店から、ダレッタならではの石像店、旅人御用達の道具屋などの店を見て回るのに1時間程掛け、星はとある店を見つけた。

カノンに「ちょっと待っていてくれ」と言っつてその店の方に駆けていった。

彼は少し店を眺めていたが、直ぐに何かを買って戻ってきた。

「ごめん、待たせた」

「うっん、気にしないで。ところで、何を買ったの？」

「カノン、手を出してくれないか」

直接的には答えず、どこか遠回しとも言える返答をする。

「？」と思いながらも利き手である右手を星の方に差し出すカノン。今2人がいる場所はアーケード内では珍しく、ちょうど死角となり、他の人からは見えない。

少し遠くに相変わらずのアーケード内の喧騒を聞きながら、今さつき買ったものを取り出した。

指輪。

星はその、天使か何かの羽を象った指輪を、そつとカノンの右手、その中指に嵌めた。

カノンの顔を窺う星。彼とて女の子にプレゼントを贈るのは初めてだ。緊張の波が身体中を駆け巡る。

「これ……私に？」

「ああ。嫌だったか？」

不安気に尋ねる星。

「嬉しい……ありがとう、星君」

肩を小刻みに震わせながらお礼を述べるカノン。その目には涙が浮かんでいた。

「人からプレゼントをもらうのなんて、本当に久しぶりで……」

星はそんなカノンを温かな眼差しで見つめつつも、彼女の境遇を思い出し、胸が傷んだ。

（この娘は自分の故郷を焼かれ、そこに住む人達を殺された。そして、ずっとその悲劇を背負って生きてきたんだ）

虚偽の同情は逆に相手を傷つける。なので星は当たり障りのないように配慮しながらカノンに尋ねた。

「最後にプレゼントをもらったのって、もしかして……」

「たぶん星君が思ってる通り。ディオネにもらったの。この剣を」
そつ言って腰に差す自身の剣を指し示す。

少なくとも傷が長く使っていることを示すが、十分に手入れされ

ているのでまだまだ綺麗な鞘に収められているのは、刀身の長さが1メートル程で、片手でも両手でも扱えそうな両刃剣だ。種類としてはロングソードの部類に入る。特徴をと言われれば、やはり柄に嵌まった宝石だろう。以前訪れた草原のような美しい黄緑色に、閃く雷のような黄色が混ざった、透き通るような宝石だ。カノンが持つことで更にその美しさを増している。

おそらく彼女は、この剣を手に幾多のモンスターを斬ってきたのだろう。

「剣を振っている時は何も考えなくてよかった。だから私は全てを失った当時、ひたすらに剣術を身につけていったわ」

何も考えずに剣を振る続ける。そうすればやり場のない悲しみを忘れられる。

「でも、ディオネに教わった。そんなことでは強くなれない、つて理不尽で辛くて悲しい現実から逃げてばかりでは到底強くなることはできない。一流の剣士というのは、相手を気迫で倒せるくらい、そして相手の気迫にやられないくらい強い心を持ち合わせているものだ。それは時として剣それ自体の腕さえも凌駕する。

「そして悲しみを乗り越え、心身共に強くなったのか」
皮肉や嘲笑を一切含まない、心からの尊敬を込めて星が言った。

こんな世界のことなど全く考えたこともなく、のんびりと平和に暮らしてきた星は、カノンの強さを超えることは到底できない、そう思った。

「そんなことないわよ。ディオネには全然敵わないし」

謙遜気味に言うカノン。だが、比べる対象がウエリアルで3人しかいない大賢者の1人である時点で彼女の實力の高さがうかがい知れる。

そして一転、誰もが思わず振り返ってしまいそんな至高の微笑みを見せる。

「本当にありがとう。大事にするね」

あえて返事はしなかった。

その代わりにカノンに負けなくらいの笑みを返す。それで十分だった。

そして2人はダレッツタ宿舎へと戻った。

カウンターに立つお節介なおばさんに部屋の鍵を受け取り、食堂に行って夕食を済ませる。そして次に大浴場でそれぞれ身体を洗い流し、部屋に戻る。髪を乾かしがてら、星がゲームについて語り、カノンが表情豊かにそれを聞いていた。

そしてその時はやってきた。

「じゃあ……もうそろそろ、寝るか？」

「え、ええ。そう、ね。ほとんど歩きっぱなしで疲れてるだろうし」
ベッドは1つ。選択肢は3つ。

2人で一緒にベッドで寝る。

どちらかがベッドで寝て、どちらかが床で寝る。

2人共床で寝る。

最初の選択肢、つまり一緒に寝ると決まっていた筈だったのだが、やはり思春期の男女が一緒に寝るのは恥ずかしい。

先に星が布団に入る。（こんなイベント滅多に経験できないんだ。ましてやカノンみたいな可愛い娘となんて）

そして彼は決する。

「じゃあ、カノンさえ良ければ、入ってくれ」

「う、うん」

恥ずかしそうに頷くカノン。そして星がいる布団に入った。

元はと言えば2人が一緒に寝ることになったのはカノンの意見だ。言った本人が渋っついては意味がない。訳ではないが、基本真面目な彼女だ。言ったことはやるう、と考えたのだろう。

いや、それは間違いかもしれない。

なぜなら彼女は自分から共に寝ることを望んだのだ。幾らかの羞

恥心はあつても、嫌な筈はないだろう。

ところで、星はベッド上の布団に入ったら、入った側に顔を向け、横になった。カノンは入ったのとは反対側　彼女は星と同じ側から入った　、つまり星と向かい合うように顔を向け、横になった。寝るために電気を消したこの部屋でも、ここまで密着すれば相手の顔が窺える。

(ヤバい。女の子特有の良い匂いが……)

なので、カノンの良い匂いも間近で感じられる訳で。

「お、お休み、カノン」　必死に興奮を抑え、就寝の挨拶をする。

「お休みなさい、星君」　カノンもそれに返す形で挨拶をする。

平然に言っているようだが、その実は8割の嬉しさと2割の羞恥心が混ざったような感じだった。

久方ぶりの大切な人の温もりだから……。

なんだかんだで2人共直ぐに眠りに就いた。

長い時間歩きっぱなしだったことで想像以上に疲れていたのだろう。

ダレツタ宿舎の1室で、星とカノンは幸せそうな顔で眠っていたのだ。

16、少年と少女（後書き）

私は思いました。

「この物語、タイトルにインパクトなくね」と。

ということでした。タイトルが変わるかもしれませんが、それでは。

17、ゴーレム

ドンツ！ という音で星とカノンは同時に目が覚めた。

時刻は午前4時。

早朝にも関わらず、宿の外、ダレッタの街中から民衆の声が聞こえる。それ程までに大きな音だった、ということだろう。

「私達も行ってみましょ！」

カノンが急かすように言う。そして浴衣を着たまま、剣を帯に差す。

星は、もつとカノンと寝ていたい、ともつともなことを思いつつも、外では何か大変なことが起きている筈なので、カノンと同様に自身の剣を帯に差した。

外へと急ぐカノンを追いかけて、星も朝っぱらから走る。

(すっかり眠気が吹き飛んだな……)

しかし眠気は吹き飛んでも、身体に溜まった疲れは完全には吹き飛んでいなかった。

それでもなんとか、疲れを微塵も感じさせないで走るカノンについて行く。そこは救世主としての自覚か、或るいは男としての意地か。

ダレッタ宿舎の外に出ると、やはり人が大勢いた。それらの人々を見ると、皆同じような場所に固まっていた。

ダレッタ庁舎の前、だ。

後ろからでも彼らが怯えているのが見て取れた。

(それなら家に戻れよっ！)

心でツッコむ星。

しかし、彼らは怯えてはいるが、それ以上に好奇心のようなものが強いのか、皆一様に何かを見ていた。

石。

ただの石では、石の町ダレッタの住民達は特に反応を示すことも

ないだろう。あるならば、通行の邪魔だ、と思うくらいである。故に、それはただの石ではない。

いや、誰が見てもただの石ではないことは明らかだろう。

なぜなら、その石の高さは5メートル　この町の外壁程もあった。

そしてそれが稀有な石である最大の理由。その石は、下の石畳から2本の足のようなもの伸びて胴のような部分に繋がり、左右からは2本の腕のようなものが伸び、そして上方には頭とも呼べるものがくっついている。

そう、それはまるで……。

「……ゴーレム」

星が呟いた。

ゴーレムとは、主に石や土を材料とした人造の怪物。RPGではお馴染みのモンスターだ。

(だけど、何でゴーレムが……)

と考えを巡らせるのもつかの間。いきなり、それまで微動だにしなかったゴーレムが動き出した。

その数瞬後、ゴーレムを見ていた民衆は蜘蛛の子を散らすようにその場から離れた。まさか石が動くとは思ってもしなかったのだろう。彼らはもはや好奇心などではなく、ただ恐怖心だけで逃げている。

「っ！ あんなに慌てたらっ！」

カノンが歯噛みしながら言う。

そして案の定、大慌てで彼らは逃げたので、人と人がぶつかり合いダレツタ庁舎前は大混乱に陥った。

幸い、庁舎や宿舎のある区画と住宅が立ち並ぶ区画の間は十分離れているので、ゴーレムが住宅側に到達するのはまだ先のことだろう。

だが、理性を失った人々は周りのことなど見ていない。逃げる集団の後ろの方で、おそらく親と離れてしまった幼い少女に、逃げる

大人がぶつかり、彼女は倒れた。そのまま起き上がるかと試みるが、足が震えて動かない。

人々は逃げる。少女を置いて。

少女の母らしき人だけが、人々の波をかき分けて少女の許へ向かおうとしているが、もう遅い。彼女は今にもゴーレムの足に踏みつぶされてしまいそうだ。

「っ！」

ある意味恐竜モンスターに襲われた時のような戦慄を覚える星。

2人からゴーレムまでは100メートルはある。常人がどんなに速く走っても、ゴーレムが少女を踏みつぶすのが先だろう。少女の母は顔を手で覆ってしまっている。

そして、ゴーレムの巨大な足が地を踏み抜いた。

「くっ」

と悔しそうに歯噛みする星。その隣のカノンは
いなかった。

「どこに行ったんだ？」

ふと前方を見ると、逃げ惑っていた人々が立ち止まり、ある1点を啞然とした顔で見ている。星も自然とそちらの方を見る。その先には

カノン。

そして彼女の腕に抱かれているのは、ゴーレムに踏みつぶされんとしていた幼い少女。カノンは少女に「もう大丈夫だよ」と囁き、少女の母の所に連れて行った。

「ぐすつ、あり、がとう、お姉ちゃんっ」

母は啞然としていたが、直ぐにカノンに礼を述べる。

「娘を助けてくださって、ありがとうございます」

それにカノンは微笑んで頷くと、ゴーレムの方に向き直った。

先程2人がいた位置からゴーレムのいた場所までの距離100メートルに対し、ゴーレムが少女を踏みつぶすまでおよそ1秒もなか

った。即ちカノンは、1秒と掛からずにその距離を移動し、更に少女を助けたことになる。

「凄い、な……」

星も民衆同様唖然とする。だからそんな言葉しか出てこなかった。恐竜モンスターやファイ・オミクロンと戦っている時も十分凄かったが、流石に見ることはできた。

しかし今のは、見ることはおろか、動いたことすら気づかなかった。それ程までに速かった。

星はカノンの方に駆けていった。

カノンは自らゴーレムの方に向かって歩く。民衆からゴーレムを遠ざけるように。

思考など持ち合わせていないであろうゴーレムだが、目も鼻も口もない顔は怒っているように星には見えた。

ゴーレムはダラツと下げていた腕を上げると、両手で叩きつぶすようにカノンに向かって振り下ろした。その速さ、地を歩いていた時のスローペースの比ではない。

ゴーレムの腕は石畳を派手に砕く。

民衆は思わず目を瞑ったり手で顔を覆ったりしている。

星はただ黙って成り行きを見守っている。カノンを信頼しているからこそ……。

「こつちよっ！」

そしてカノンは現れた。

ゴーレムの頭上、石壁をも超える高さに。

そのまま自身の頭上に剣を掲げ、振り下ろす。するとゴーレムは、巨大な石の塊にも関わらずいとも簡単に左右2つに分断された。

ドンッ！ という音をたてて崩れる石塊。そこから黒い粉が散り、風に飛ばされていった。

「創造の粉っ!?!」

星が、はつとして驚いたように言う。

創造の粉が使われているということは、今までそこに立っていた
ゴーレムは石塊に生命を宿したということになる。

（あの時の恐竜モンスターみたいな、ゼロから姿形を造るだけじゃなく、既存物に生命を宿すこともできるのか。流石に汎用性が高いな）

と考えつつも、カノンの無事を喜び、駆け寄る。

「君に何ともなくて良かった。心配したけど、杞憂だったか？」

「ううん、ありがとう」 「ああ。ところで、さっきのあのスピー

ド……あれって」

「あれは」

「カアアアアッ」

突然鳥がこちらに突っ込んできた。

「はっ！」

恐るべき反応の速さで、更に星には見えない程の速さで剣を振る
い、鳥を切り裂く。

するとその鳥は創造の粉となって消えていった。

「とりあえず、見事、とでも言っておこうか」

声が聞こえた。低くてよく通る声が。頭上から。

星、カノン、そして民衆まで上を見る。

そこ、空中に立っていた、いや浮遊していたのは、「齡20歳ぐら
いの男。」

黒髪を逆立て不敵な笑みを浮かべるその男の背には、「蝙蝠」のよう
な翼が生えていた……。

17、ゴーレム（後書き）

『名言っ！』

「中に誰もいませんよ」

最近観た 観たと言っても最終回の最後らへんですが 「School Days」というアニメの台詞ですが、怖いですね。恋敵が恋敵の腹を鋸でグサツとやって、中に赤ん坊がいないと知った時の台詞です。なんか印象に残ったので書いてみました。それでは。

18、雷光の剣妃

現在の時刻は、4時3分。星とカノンが部屋を飛び出してから5分と経っていなかった。

その短時間でゴーレムは崩壊し、ダレッタにはいつもの活気が戻る、筈だった。

しかし。

遙か上空に浮遊する男が現れ、不敵な笑みを浮かべるのだった。

「まずは名乗っておくか。俺様はタナトス。この世界を破滅に導く者だ」

タナトスと名乗る男はただ1点を見て言う。

カノンだ。

『破滅』という単語に恐れおののく民衆を背に、カノン、そして星は男の方を睨むように見ていた。

「フッフハハハハッ！ いい目だ。殺しがいがあるというものだな」

狂喜に満ちた目で2人、いやカノンを見返すタナトス。最初から星など見ていないということか。

「だが、俺様自らが手を下すまでもあるまい」

と言つて懐から何かの瓶を取り出した。そこに入っているのは黒い粉。

「っ！？ それは……っ」

「そうだった！ これは創造の粉。全てのモンスターの源だ！」

愉悦に浸つたように叫ぶタナトス。そのまま続ける。

「そしてこれは応用も効く。例えば、俺様のこの翼。部分的に物質を『創造』することさえできるのだ。更につ！ 創造の粉は造り出されるものが粉の量に比例する。つまり、多量の粉を使えばそれだけ強力なモノを造り出せるということだっ！」

わざわざ創造の粉の説明を狂つたようにするタナトス。それは余

裕の表れか、それともただの馬鹿か。おそらく前者と後者の両方だろう。

「俺様が何を言いたいかわかるか？」

「いちいちニヤニヤしながらカノンに尋ねる。彼女は黙ったままだ。ふん、まあいいだろう。教えてやる。俺様はこの粉を大量に使ってある生き物を造り出し、この町を破壊する。どうだ！ フフハハハハハハハハハハッ！」

狂った笑いと共に小瓶いっぱいに入っている量の半分程の粉をばらまき、何かを口にする。

すると、空中に漂う黒い粉が何かを形作っていく。

次第にハッキリと、ある生き物を形作った黒い粉は、もはや元がそれだとは誰も気づかないであろう。

ある生き物。

全長は30メートル程もあり、各パーツはその大きさに見合うだけのモノだ。

鞭のようにしなる尻尾。鋼のような硬質な爪。強靱な手足。獲物を一瞬で噛み殺してしまうであろう、鋭い牙。空を覆う巨大な翼は、羽ばただけで強風を発生させる。身体全体には漆黒の鱗がびっしりと生え、明けの空との対比がその不気味さを増している。

「どうだっ！ これぞ究極のモンスター、ドラゴンだ！」

「グオオオオオオオオオオオオッ！」

タナトスの叫びに呼応するように雄叫びをあげる漆黒のドラゴン。そしてタナトスは一切の躊躇もなくドラゴンに命令する。

「さあっ！ この町を焼き尽くせ！」

それを聞いた民衆および一般人は、死の恐怖から我先にと逃げ出す。それこそゴーレムの比ではない。何せ、今造り出された漆黒のドラゴンは、ただでさえ巨大だったゴーレムの何倍にも値する。

なので民衆の慌てようも可笑しくはない。だが、単体で天災に匹敵するであろうドラゴンはそれらの人々を嘲笑うかのようにおぞましい雄叫びをあげる。

巡る。「ゲワワワワワワワワワワワワワワワワワワワワワワワワ」
堪らず気絶する。同時に身体中から粉が吹き荒れ、素の青年の姿
に戻る。

こうして、本来は非常に強力であろう敵タナトスは、カノンの圧倒的な力によって呆気なく倒されたのであった。

18、雷光の剣妃（後書き）

夏休みに入って娯楽の時間が増えたので、前回の更新がかなり前のことのように感じます。

今回の話はなかなか無理があつたかなあ、って感じですよ。タナトスの囃ませ犬っぷりが半端ない……。それでは

19、魔法

「悪気は無かったんです。すいません」

気絶から覚めたタナトスの第一声がそれだった。凄く変わりようである。

今はとりあえず縄できつく縛つてある。

「それなら、どうしてこんなこと……」

呆れ気味に言うカノン。

それにタナトスは悪びれたように語る。

「俺さ……僕は、つい先日まで木こりだったんです。それで、いつものように森で木を切っていたら、突然変な男が現れて、創造の粉を渡されたんです。そして『町を破壊しろ。そして、以降はタナトスと名乗れ』とか言って、去ってっただんです。なんだこいつ、つてその時は思ったんですが、創造の粉を実際に使ってみたらその凄さが分かって。それで、僕は選ばれた存在なんだ、とか勝手に思い込んで。知らないうちにおかしくなっていっただんだと思います」

カノンはすっかり呆れたような表情になる。それだけの理由で町が破壊されるなんてあまりにも馬鹿げている。

彼女はタナトス　本当の名は違うようだが　の話の中で気になることが1つあった。

「その男っていうのは、どんな人？」

少し考え込むタナトスだが、しどろもどろに口を開く。

「赤い髪で、マントを羽織った、僕ぐらいの歳の男です」

「名前は？」

「そういうことは一切言わなかったです」

割とすまなそうに言うタナトス。

周囲　と言っても随分離れているが　では、逃げなかった、或るいは騒ぎが治まったのを聞きつけた住民達がタナトスへと視線を送っている。もちろん睨んだり恐れたりといった悪い視線だ。自

分達の町を破壊、及び自分達を殺害しようとしたのだから無理もないが。

逆に彼らの視線に怯えるタナトス。本来だったら森でひっそりと木こりをやっているのが似合う、そんな人間に見える。

(それ程までに創造の粉の力に魅入られた、ということなのか……) 今は雷を纏わぬカノンの傍らに立つ星はそんなことを考えていた。もし自分が強大な力を入れたら、その力に振り回されてしまうのだろうか。

「それで、僕はこれからど、どうなるのでしょうか？」

不安そうに尋ねるタナトス。

「ダレッタ庁舎に連れて行くわ」

「そうですね。分かりました。罪を償えるのなら、
以外と潔いタナトスであった。

ダレッタ庁舎の奥のこじんまりとした部屋。

「君はこの町を破壊、そして民衆を虐殺しようとした」

事務官の初老の男が、小さな石のテーブルを挟んで向こう側に座っているタナトス。本名はウツダーというらしい。に向けていう。壁の前には星とカノンが立っている。

「はい。確かに無差別虐殺をしようとはしました」

タナトス改めウツダーは深く頷き返答する。

事務官はそれを聞くと、顔を変えることもなく言った。

「死罪だ」

死刑宣告。

当たり前と言えば当たり前だ。もしダレッタにカノンがいなければ、今頃この町は廃墟と化していたであろうから。

「っー！」

分かっていても、その無常な一言は動揺するには十分すぎる。ウッダーももちろん例外ではない。精神的な病がある訳でもなく、意識的に町を襲ったのだから言い逃れもできない。今の気弱な彼は言い逃れしようとは思わないだろうが。

しかし創造の粉を失っただけでここまで気弱になるのも変である。「処刑日は未定だ。それまで君には牢に入っていてもらう」

ウッダーに向けて事務的に言い放つ。そして次にカノンに話しかける。

「娘。君の働きに感謝する」

死刑宣告をした事務官は話は終わった、というように部屋を出ようとする。

「ちよつと待つて！」

と、カノンが事務官に焦り気味に言う。

「なんだね？」

煩わしそうに、そして面倒くさそうにドアに手を掛けながら、首だけカノンの方に振り向く。

「殺すことはない、と思います」

「は？ なぜ？ その男は町を破壊しようとしたのだ。処刑が妥当だ」

「彼は本来はおとなしい木こりで、ある男が彼に力を与え、それに魅入られただけで。彼に罪はないと言えば嘘になります、処刑する程ではない筈です」

「ふん、戯れ言を。その男の処刑はもはや決定事項なのだ。直ぐに役人がこの男を牢に入れるためやってくる。貴様らはとつと立ち去れ」

そして今度こそ部屋から出て行く事務官。

後には虚しい静寂が残る。

口火を切ったのは、今まで聞きに徹していた星だ。

「何とかして助けられないかな……？」

「……強行突破しかない、かな」

いつもの穏やかなカノンと違った強気な意見だ。

その後あれこれ2人で話し合うも、なかなか良いアイデアが浮かばない。

と、突然ウツダーが席を立ち、言った。

「僕なんかのために、ありがとございます。一度は殺そうとしたのにそこまでしてくださって。でも、もう覚悟しました。潔く死にます」

その発言に目を見開く星とカノン。

ウツダーはもう異存はない、というような顔をしている。それ程に死ぬ覚悟ができた、ということか。

「あんたは……そんな簡単に命を捨ててもいいのか？」

「当然の報いというものです。悔いはありません」

文字通り必至の覚悟をした人間にどうこう言っても逆効果だと感じつつも星が堪らず尋ねるが、ウツダーは死を受け入れようとしている。

「それに、生きていたとしても一生笑いものにされるでしょう。ですから、僕は死を選びます」

それには2人も黙り込むしかない。

そんなこんなで、しばらくすると役人の男が3人やって来た。

「では、これからお前を牢に連れて行く」

「はい」

そしてウツダーは彼らに取り囲まれて牢へと向かって行った

「……私達も宿舎に戻りましょうか」

「……ああ」

騒動から1時間が経過。時刻は5時。

町はだいぶ落ち着きを取り戻していた。

市場では商人が店の準備、各家庭では早めの朝食の支度、役場では職員が騒動の事後処理　　ウツダーの処刑日程など　　に追われている。

ダレッタ宿舎。星とカノンが泊まる部屋。

星がカノンにずっと気になっていたことを質問する。

「さっきの雷って……何？」

「あれは、魔法」

「魔法……か」

魔法と言われてもあまり驚かない星。カノン程の強さなら魔法を行使できてもおかしくないし、何より彼女の師匠は大賢者の1人、ディオネである。

「そういえば、魔法って詠唱が必要なんじゃなかったっけ」

それはカノンが何もせずに魔法を　　その時は魔法だと分からなかったが　　行使していたのを思い出したから言ったことである。割と周りをよく観察している星である。

「私はなぜか詠唱なしで魔法が使えるみたい。あ、じゃあ、魔法について軽く教えておくれ」

そしてカノンが語りだす。

「まず、魔法を使えるかは生まれ持つての素質によって決まるみたい。私はたまたま魔法を使える人間だったみたいで、ディオネに師事してからそれに気づいたわ。次に、魔法には属性があつて、それも人によって決まるわ。魔法を使える人自体が少ないから、実質各属性につき1人しか使い手がないけど……。私が使うのは雷の魔法。さつきみたいに物理的に物体を貫く雷を発生させたり、電気ショックを与えたり、瞬間的に足に電気を発生させて音速を超える速さで動いたりできるわ。あと、星君のそのケイタイデンワにも何か効果があつたみたい」

それに星は「そういうことか」と言つて納得気味に頷く。

カノンはそれを確認して、先を続ける。

「最後に。魔法を使うと魔力を消費するの。魔力は極まれに先天的

に備わっていて、つまりは生まれた時点で魔法が使えるか決まるということね。そして魔力には限界があつて、魔法を使う度に減っていくの。魔法を使わずにいれば魔力は次第に回復していくわ」

「だからデルー密林やウィーク村で魔法を使わなかったのか」

再び納得する星。この世界の概念に関しての知識が増え、分からなかったことが分かるようになるのは、妙に清々しい。「それじやあ、朝ごはん食いに行こうかつ」

「ええ」

それから2人は、それなりに賑わっていた食堂でパン主体の朝食を食べ、部屋に戻った。

1つしかないベッドを見て星は思う。

(このベッドで俺はカノンと寝たんだよな)

彼がそんなことを考えているとは露知らず。カノンは言い放つ。

「着替えるから、少し後ろ向いててくれるかな……？」

「あ、ああ」

もどかしい時間を星が過ごしている間に、カノンはいつもの、鎧のような服に着替えた。

「じゃあ、次は私が後ろ向くわ」

そして星も黒ティーシャツにジーンズという格好着替えた。

なんだかんだで時刻はもう7時を過ぎていた。 2人は自然と、

そんなに多くもない荷物を持つ。

「そろそろ行くか」

「ええ。アグライアに逢うために」

そうして星とカノンは、1日滞在しただけでダレッタを後にした。無論ウツダーのことも忘れてはいない。彼のようなかわいそうな人間が現れないようにするためにも、早くダレッタを発った意味はあるのだから。

更なる困難が待ち受けているであろう未来に向け、2人は足を踏み出した。

19、魔法（後書き）

嗚呼、夏休みの日数がどんどん無くなっていく……。

次話も多分1週間くらい後の更新になると思います。
それでは。

20、無常

星とカノンが発った日の19時。

ダレットタ庁舎の奥の方にある牢屋にて。

「おい、飯だ」

牢の中にいるウツダーにパン一切れという少ない食事を差し出す
監視役の役人。

「どうも。それで、処刑はいつなんでしょう」

「明日だ」

無情な声にウツダーはしかし驚かなかった。

どうせ殺されるならできるだけ早い方がいい、ということではない。
い。

「今日がいいのですが。いや、今日でなければならぬ」

「は？ そんなに死にたいのか？」

寧ろ。

「何か勘違いしていませんか」

「は？」

死にたいのではなく。

「だから……今日がお前らの処刑日だってことだ」

殺したい、のだ。

監視役が行動を起こす前に、彼の心臓は何かによって抉られている。
た。無論即死だ。

「ふん、ゴミが」

それは、手。ただし一般的な人間の手とは遠くかけ離れている。

獣のような剛毛で筋肉質な皮膚を覆っているそれは、早朝にウツダー、いや、タナトスが創造の粉を飲んで変身した姿。

「一度飲んでしまえば変身は自由なのだよ」

そしてタナトスは牢の格子をぶち破り、外へと出た。

「さて、今度こそ殺してやる」

ダレッタの町を出た星とカノンは、とりあえず道に沿って北に向かっていた。アグライアの許に行くために。

そして20時。道中で星の剣の修行を数時間しがてら、比較的ゆつくりと土の道を進んでいたが、今はちよつとした森林に差し掛かっている。

途中にちよつどよく開けた場所があったので、そこで夜を明かすことにした。

「今日も色んなことがあったなあ。朝っぱらから」

「ふふ。慣れてきた？」

「慣れてきた、と言えば嘘になるかな。今朝だって、まさか町自体を破壊するために襲い掛かってくるとは……。それに、また全部カノンに任せてしまった」

申し訳なさそうに少し俯いて言う星。

「気にしないで。あれはそう簡単に倒せる相手じゃなかったから」

軽く笑いとばすカノンだが、少なくとも星から見れば今朝のカノンは圧倒的過ぎた。何ら危なげなく、軽くタナトスを倒していたのだ。もはや次元が違う、というレベルである。

しかし、だからこそ星は疑問に思う。

「カノンの強さなら、この世界をも救えるんじゃないか？ 無論俺なんかがいなくても」

カノンは、いえ、と首を横に振って星の言葉を否定する。

「アグライアの予言では、異なる世界から来た救世主がこの世界を救うに足り得る、いえ、救世主しかウエアリアルを救うことはできないの。そして私よりも圧倒的に強い大賢者も直接的には行動を起こしていない。この世界を滅ぼすであろう敵、或るいは災厄の正体す

ら分かっていない状態では、下手に大きな行動に出ると何が起ころかも分からないから、迂闊に手出しはできない。だから今は専ら情報を集めることに従事しているの」

下手に行動を起こし、はいウエリアルは滅びましたでは洒落にならない。ある意味一種の爆弾のようでもあった。しかし起爆スイッチとなりえるものの所在さえも分からないのでは、爆弾よりもたちが悪い。

「星君はそんな状態を打開して、『滅びの元凶』を倒しえる唯一の存在である。その肝心の倒す方法が分からないけど、大賢者達はそう考えているわ」

それに星は、やはり浮かない顔をする。

「俺にそんな大層なことができるのかな……」

自分が救世主だと言われると、自然とそう考えてしまう。

「それに、その『滅びの元凶』さえ分かれば、倒し方を講じて安全に倒せるんじゃないか」

つまりは、『滅びの元凶』の正体が分かり次第、大賢者などの強大な力を持った者達がしつかりと作戦を練って善後策を講じれば、後に大変なことが起こる、という状況も未然に防ぐことができるのでは、ということである。

カノンは少しも考える素振りを見せずに返答する。

「救世主　星君には、何か特別な力が宿っている筈。そうでなければ、別次元からの移動なんてありえないことができる筈がないもの」

他次元への干渉。

本来存在する筈のない因子の存在。

それだけでイレギュラーと言えばイレギュラーである。しかし。

「俺が自発的にこの世界にくるために何かした訳じゃなく、部屋の扉を開けたら突然意識が離れていって、気づいたらデルー密林に倒れていたんだ」

「それは何かの力によって星君がこの世界に引き寄せられたんだと

思う」

と、カノンが突然話を中断する。そして、目の前に座る星を抱えて横に10メートル程跳んだ。

その直ぐ後、2人がいた場所に大木が1本丸ごと飛んできた。それは地面を抉り、盛大に吹き飛ばす。

「な、んだ……!?!」

驚きを隠せない星。カノンは、星を背後にかばいつつ、大木が飛んできた方向を見据える。

「やはり外れたか」

2人の前に現れたのは、

「ウツダー……いえ、タナトス!」

「なっ、タナトス!?!」

翼、角がなくなっている変身後のタナトスであった。

「フッフフハハハハハハハハハハハハツ! 一度人間の姿に戻ったからといって、二度とこの姿に戻れない訳ではないのだよ」

「っ!?!」

カノンは目を見張る。その言葉に、ではなく、月に照らされて不気味に光る、血塗られたタナトスの手に。

「まさか、人を」

「ああ、殺したさ」

彼女の言葉を遮り、ニヤニヤしながら言うタナトス。

「あれは……演技だったって訳か」

星が苦虫を噛み潰すように言う。

それをやはりニヤニヤしながら見ていたタナトスは、急に怒りを含んだような顔になってカノンを指差す。

「もはや俺様の目的はお前を殺すことではない。ダレツタでの侮辱、許さんぞっ!」

そして一気にカノンが立つ場所まで跳躍。頭めがけて、鋭い爪が並ぶ、50センチメートルはありそうな右手を振るう。カノンは上方に片手持ちで剣を構え、それを防ぐ。魔法を発動していない状

態にも関わらず軽々と。

こんな華奢な女の子のどこにそんな力があるのか、と改めて思う星。(いや、愚問、か)

次にタナトスは空いている左手でカノンに殴りかかる。

「死ねええっ！」

高速で繰り出されるパンチに、しかしカノンは動じない。剣を持っているのとは反対の手で鞘を掴み、受け止める。

「何っ!?!」

驚愕するタナトス。そのタナトスに、カノンはいつもの彼女とは似つかぬ、低く冷たい声で言い放つ。

「……どうして、関係のない人を殺したの」

抑えられた声音は、逆にその怒りを物語っている。

自身を見据えるカノンの双眸に、恐怖を覚えるタナトス。それは一度完膚なきまでに打ちのめされたからだけではない。「くっ！」

タナトスは後ろに跳んで距離を取る。そして、焦りの表れか、先程同様にカノンに向けて右手を振るう。

もちろん、カノンに当たる筈がない。

彼女はしゃがんでそれを避けると、剣を上方に向けて三日月を描くように超速で振るう。

すると、タナトスの右腕が肘の所からスパッと切断された。それは翼や角同様創造の粉になり空気中に舞ってゆく。

一連の動作の間、わずか一秒にも満たない。自分の右腕がなくなつたことにタナトスが気づいたのもその後だ。タナトスは目を異様に見開き、絶叫する。

「グワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ
！」

切断面からは血が噴き出す筈だが、一滴も滴らない。『ウツダー』という人間を捨て、創造の粉によって身も心も怪物となった成れの果てである。

カノンの瞳に慈悲の色はない。

彼女は、一般人を殺害したタナトス、そしてそれを未然に防げずにタナトスを寧ろ　その時は『ウツダー』を　哀れんだ自分に對して、怒っていた。

タナトスは、

「殺すツ！　ぶち殺してやるツ！」

我を忘れてカノンに襲いかかった。

タナトスはただ左腕を振るうのみ。

大木をも軽々と投げ飛ばす怪力を前に、カノンは避けることすらしない。

そして、朝やったようにタナトスの拳を片手で受け止める。

「!？」

タナトスは直ぐさま拳を引っ込めようとするが、自身より遙かに小さいカノンの手によって押さえつけられ、それができない。

だが、カノンは自分からその手を放した。

すると、タナトスは不意の事態に身体をふらつかせた。それによってタナトスに隙ができた。

カノンはその間にタナトスの方に跳ぶ。

そして、タナトスの顔面を思い切りぶん殴った。

派手に木々を巻き込んで吹き飛び、50メートル程先で地面に達し、更に20メートル程の距離を転がるタナトス。もう戦闘を行うことは不可能だろう。

カノンは思い出したように剣を鞘に差し込む。その顔は戦闘とは別の意味で、軽く憔悴している。

と、彼女の方へ星が足早に駆けてきた。

「カノン……」

「　星君っ！　私は……私の、所為で、関係のない人達がっ！」

星は、こんなカノンを見たことがなかった。

「っ！　……まずは、落ち着こう」

21、タナトス現る（前書き）

前回から随分経つての投稿になってしまいました。しかも中途半端に短いですが、読んで下さると嬉しいです。

21、タナトス現る

何者かの手によって殺害されたタナトスから、小瓶には到底入らない量の創造の粉が発生し、辺りに吹きすさぶ。素となった『ウツダー』の肉体すらも、創造の粉に変換された、ということだろうか。それは砂嵐のごとく周囲を覆う。

だがそれも少しの間。

突如、粉の嵐が一瞬にして吹き飛ばされた。そこはもはやタナトスがいた面影すらない。タナトスがいた事実を表すのは、折れた木々の様相と、めくれあがった地面くらいのものだろう。

だが、1つ明らかに変わった部分がある。

まさにタナトスが倒れていた場所。そこに、タナトスを殺害した『何者』かが立っていた。

その何者かは、一歩で6〜70メートルの距離を跳躍し、星とカノンのいる場所の少し前方に着地した。

それはウツダーぐらいの歳の 20歳ぐらいの 男だった。

赤い髪を逆立て、前側が開いた漆黒のマントを羽織っている。

それは、今さっき消滅したタナトス ウツダーが言っていた、彼に創造の粉を渡した人物の様相に一致する。

「っ!?!」

星はその男の威圧感に、思わず息を飲んだ。

そしてカノンは、

「!?!? あ、ああああ……」

その場に力なく膝を着いた。そして、信じられないものでも見るような顔で男を見て 怯えていた。

男はそんなカノンを見つつ、怪訝な表情で口を開く。

「お前は……。ああ! あの時の娘か!」

あの時。それは、カノンにとって忌まわしく、悲しい出来事が起こった日のこと。

そして、彼女が燃え盛る村に戻った時、槍を手に立っていた男。それが今2人の前に悠々と立つ、この男だった。

彼は、余裕の表れか、ポケットに手をつ突っ込みながら話し出す。「まさか、ちょうど大賢者が現れるとは思ってもいなかったので退散させてもらったがな」

星はただ、この男を睨み付けることしかできない。戦って勝てるような相手ではないのは、彼自身が一番よく分かっている筈だ。

カノンは、震える指を必死に動かして剣を抜こうとするが、いつもの彼女らしくもなく、それすらもままならない。彼女にとって『あの出来事』はとても悲しく、怖かった。その原因の男がこうしていきなり現れたのだ。いくら強いカノンでも、1人の人間だ。震えおののくな、という方が無理な話であろう。

「まあ、殺そうと思えばいつでも殺せたのだがな」

男は、興味をなくしたようにカノンから視線を星に向けた。

「で、お前は？ この娘と共にいるということは、ただの人間ではないよなあ？」

「俺は、彼女の、カノンの仲間だっ！」

男の眼光に臆していない、と言えば嘘になるが、虚勢でもいい、今は自分がカノンを守る番だ。

「ほお、そうか」

男はただそれだけ言う。その目は、星を称えているようにも見え、侮蔑しているようにも見える。だが、その目は確実に狂気を帯びていた。

「俺はタナトス。さっき死んだ『タナトス』の本物だ」

いきなり名乗りだす男　タナトス。

「奴には、『タナトス』という名を世に広めてもらいたくてね。この世界の新しい王になる俺の名を」

そこで星は、1つの疑問を持った。

（この世界の新しい王？ それじゃあ、世界は滅ぶんじゃないって、コイツがウエリアル全体を統治するってことか？ だったら、世界

を滅ぼそうとする奴が他にいるってことか？)

「ここには、木こりを殺しに來ただけだったが……ちょうどいい、お前らも殺してやろう」

タナトスが言う。

激しい動揺からか、とても戦えそうにないカノン。そして、そもその実力が低い星。だが、

「俺が相手になってやる！」

無謀に決まっているが、星の口からはそんな言葉が出ていた。直ぐに頭が、『逃げる』と警鐘を鳴らす。死ぬ。あんな奴に勝てる筈ない。しかし、

「今度は、俺がカノンを守る番だ」

そして、カノンに向かって笑い掛ける。それは苦し紛れの笑みだと、誰でも分かるだろう。

今までの敵は、全てカノンに任せつきりだった。彼も何かしようとはしたが、できなかつた。当たり前と言えば当たり前だが、女の子が戦っている後ろで怯えながら突っ立っている男子、というのも情けない。

だから、カノンが戦えない今は自分が戦うしかない。例え勝てる見込みがなくても。

「いい度胸だ、とても言っておこうか」

余裕綽々のタナトス。「星君っ、やめて！ 死んじゃうわ！」

カノンは必死の形相で星に向かって叫ぶ。その声を背に、星はタナトスへと駆ける。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおお！！！」

21、タナトス現る（後書き）

今回は、カノンの故郷で槍を持って突っ立っていた怪しい人、タナトスが登場しました。そのタナトスに向かって突っ込む星。彼は一体どうなってしまうのか!?

ところで、夏休みの宿題ってやる気全く起きませんよね。夏休みの宿題乙

次回はおそらく夏休み明けの投稿になると思います。それでは

22、恐怖を振り払って

彼我の距離、約10メートルを、星は5歩で駆け、タナトスと肉薄する。

星の顔には力強い表情。対してタナトスの顔には、当たり前だが余裕の表情が浮かぶ。

星は気合いを込めて右拳をタナトスの顔面めがけて振るった。

タナトスは、首を軽く振るだけでそれを避ける。

ドツ、と星の腹部にタナトスの拳が突き刺さる。そのまま10メートル先の木に背中からぶつかると、咄嗟に身体を丸めて衝撃を和らげたので、大事には至っていない。が、

「がはっ」

と、吐血する。

「ふん、その程度か」

タナトスは実力を半分はおろか10分の1すら出していない。

カノンすら怯えさせる者が実力を発揮すれば、星など一瞬で殺せる。それは星も最初から承知している。

だが今は、何としてでもカノンを守る。星は、そのためなら自分がどうなってもいいとさえ、なぜか思えた。当たり前前の恐怖すら感じない。死を恐れない、ある意味蛮勇ともいえる星。

「おおおおおおおおお！」

常人にとっては極めて激しいであろう痛みを無視し、再びタナトスに立ち向かう。

無論、結果は同じ。

「なんだ、本当にただの雑魚か。まあいいだろう。遊んでやる」

星は、自身が倒れ伏す地面に手を突いて立ち上がり、息を吐く。

「はあ、はあ、はあ」

タナトスにとってはこれは遊び。星を殺そうと思えばいつでも殺せるのだ。

生かすも殺すも、タナトスの気分次第。生殺与奪の権利は今、タナトスの掌たなごころにある。

馬鹿正直にタナトスの正面から突っ込む星。

返り討ち。

3度目の正直が起こる程、現実には甘くない。

何度も何度もタナトスに一矢報いようと突撃する星。その攻撃は当たるところか、かすりすらしない。

タナトスの顔も、次第に苦々しいものに変わっていく。

「……ふんっ、興が冷めたよ。ということ、そろそろ殺してやる」

意識も空ろにボロボロになって地面に倒れる星を見下ろしながら言うタナトス。

「仕舞いだ」

タナトスは、星の顔の真上に足を固定する。

そこで星の意識は途絶えた。

そして

時間は少々遡る。

カノンは、星がタナトスにいたぶられる様を傍観していた。

本来なら、自分が戦う筈だった。

そう、本来なら。

指が、身体が震え、剣を持つどころか、ろくに動けない。今直ぐに星の元に駆けつけて、彼の代わりに戦いたい。だが、忌まわしい過去の記憶が身体を縛り付ける。

ディオネの元で身も心も強くなったのに、こんな時に限って何もできない。

「私は、どうしてこんなにも弱いのかな」

自らの心の脆弱さに、自嘲気味に呟く。
その間にも星は着々と痛め付けられている。
と、

『人の心とはそういうものだ。どんなに強い心の持ち主も、同じく
らしいの弱さを抱えている』

まるで脳に直接語りかけているかのような、身体の内側に籠る声。
無論カノンは驚いたが、脳に直接声が語りかけてきたことに、で
はない。語りかけてきた声それ自体に驚いていた。

「……ディオネ？」

その声は紛れもなく、カノンの師であるディオネのものだった。
以前もこうして頭の中に直接語りかけるディオネの声を聞いたこ
とがあるような気がしたが、思い出せない。

カノンは乱れた思考を少しでも抑え、ディオネの気配を探す。が、
位置を特定することができない。そもそも、近くにいるとも限らな
い。10年前の予言でアグライアはウエアリアルの間人全頭の頭の中
に直接語りかけた。同じ大賢者であるアグライアにできてディオネ
にできない、ということもないだろう。

ディオネは再びカノンに語りかける。

『だから、弱くたっていいんだ』

それにカノンは、心の中で返す。

『でも、私はもう大切な人を失いたくない。この手で守りぬきたい』

『本当か？』

『え？』

ディオネの言葉に思わず疑問形で反応してしまう。

『本当に大切な人なら、過去の恐怖さえも振り払って守る筈だ』

先程と言っていることが矛盾していることに、ディオネは内心で
苦笑する。だが、これも可愛い愛弟子のためだと割り振る。

もしも本当に危なくなったら自分が出よう、と、とある場所で考
える。

そして、カノンを挑発するように言う。

『それとも、お前は過去の恐怖に未だに囚われたまま、みすみすあの少年が殺されるのを見ているのか？』

『それはっ』

『カノン、お前なら、その恐怖を打ち破る程の強さを持っている筈だ。師である私が保証する』

カノンの言葉を遮って、ディオネは優しく言った。

『ディオネ……』

(9年前、私が絶望に打ちひしがれていた頃も、あなたはこんなことを言ってくれたっけ)

カノンは、心穏やかになると同時に、魂に火が灯った。身体が動く。指の震えも治まった。

『ありがとう』

そして、剣を抜く間も惜しみ、爆発的な威力で地面を蹴る。

ちょうどタナトスが星の顔を踏みつぶそうとしている所だった。

「星君は、私が守ってみせる！」

そして

そして、まさにタナトスの足が星の顔を踏みつぶそうとする瞬間。ドッ、と、カノンの雷撃を纏ったパンチがタナトスの顔面に炸裂する。

「グフッ！」

タナトスは一声呻き、砲弾のように吹き飛ぶ。しかし偽物のようにそのまま無様に転がることはなく、1回転してから地面に着地する。

その顔は焦げたように煙を上げ、原型を留めていない。

カノンは、星が気絶してよかった、と思った。あのタナトスの顔は、常人が見るべきものではない。

が、いきなりタナトスの顔から、ザラッ、という音がし、瞬時に

素の顔に戻った。

「!?!」

思わず驚いてしまうカノン。それにタナトスは平然と返す。

「何を驚く必要がある。死んだ木こりが創造の粉を飲み力を得たことは知っているだろう。同じことだ。創造の粉の持ち主であるこの俺がそれをしていない筈がなかるう」

まあ、素体の能力によって粉の効力は大きく変わるから、厳密には違うんだがな、と付け加える。

「だがさっきのは効いた。あの男は後で殺せばいいから、お前から先に殺してやる」

「……」

カノンはただ、タナトスを見据える。その瞳には恐怖はもう一切ない。星をボロボロになるまでいたぶったタナトスと、そうなるまで何もできなかった自分自身に対する怒りだけだ。

ひらり、と葉が舞った。

大した音もなく、地面に落ちる。それが合図になった。

常人を遥かに逸脱する身体能力を持つ2人は、相手に向かって駆けけた。音すら超える速さで。

ここに、カノンとタナトスの戦いが幕を開けた。

22、恐怖を振り払って（後書き）

皆さん、こんばんは。 またまた結構経ってしまいました。

ところで、学生はついに夏休みが終わり、勉強の日々が再びやって参りました。夏休みの宿題？ 何それ、美味しいの？ って教師に言っただけです。

次回もできる限り頑張ります。主に、早く投稿できるように。アデ
イオス

23、死闘

暗い森の一角。カノン、星、そしてタナトスの3人がいるそこは、もう木々の1本すらない。

そんな開けた、戦いにはうってつけの場所で、カノン、タナトスの両者は自身の武器を持つ。

即ち、カノンは高速で駆けつつ、剣を抜く。

対してタナトスは、どこから取り出した創造の粉で、2メートル程の長さの槍を造る。

そして同時にそれぞれの攻撃が繰り出される。

カノンは雷を纏った剣で袈裟斬りを仕掛け、タナトスは槍を横に凧ぎ払うように振るう。

結果、2つの武器は派手に火花をあげて拮抗した。

「ほお、9年間で俺とまともに戦える程の力を得たか。大賢者め、やってくれる」

そう歯噛みしながらも、どこか余裕そうに言うタナトス。

カノンはそんなタナトスに憤りを感じた。

「なぜっ！ あなたは村の人達を殺したのっ！」

「俺の目的の邪魔になる、多大な魔力を秘めた者、つまりお前を殺しておくためだ。まあ、創造の粉の効力を試すためでもあったがな」

つまり村人達はおまけで、本当の狙いは、まだ幼く魔法も知らない、膨大な魔力を秘めたカノンだったという訳だ。それで村人の

おそらく全てが死に絶え、カノンだけが生き残ったのは何たる皮肉か。

「それなら私1人を殺せばっ！ 村人が殺される理由なんてないわ！」

「だから言っただろ、創造の粉の効力を試すためだと。それに、あんなちっぽけな命、幾つ失くならうと変わらん」

人を殺すことを何とも思っていないような、むしろ狂おしげに言うタナトス。

「そろそろ　終わりだっ！」

そして急に槍ごと自分の身体を2歩分後ろにずらす。それによってカノンはバランスを失い、前のめりになる。

タナトスはその隙を見逃さない。槍を両手で持ち、大振りで後ろに構える。そして、やはり大きな動作で、槍の真骨頂、刺突を繰り返す。

100分の1秒の速さで迫る槍の先端。その速度に反応したカノンは、咄嗟に身を捻ってそれを避ける。長く美しい金髪が数本切れ、夜空に舞う。

「何っ!?!」

まさか躲されるとは思ってもいなかったのか、驚愕の声をあげる狂人タナトス。だが直ぐに、カノンが槍の間合いに入り込んだことに気づく。だがもう遅い。

「はああああああああっ!!」

気合と共に剣を逆袈裟で振るうカノン。

「グワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!」

と絶叫するタナトス。右腹部から左肩にかけて深く切り裂け、致命傷は免れないだろう。

しかし何かがおかしい。これは……、

「血が、出てこない……」

これだけ深く切り裂けば、臓物や血管が裂け、大量の鮮血が迸る筈だが、1滴も血は出てこない。

カノンはひとまずバツク転でタナトスから距離を取ると、そう言え、という風にタナトスを見る。

傷がちょうど塞がる所だった。創造の粉によって。

そう。そもそも顔が吹っ飛んでも死なない奴が、身体を切り裂かれたぐらいで死ぬ筈がないのだ。

「やはり、お前はあの時殺しておけばよかった」

今まで終始余裕の表情だったタナトスが、怒りを交えた顔で言う。相変わらず、狂おしく。

そしてどこからか創造の粉を取り出し、複数の恐竜モンスターを造り出す。その数は30。カノンを囲むように立ち、威嚇の唸り声をあげる。

次の瞬間には、全てのモンスターが疾駆し、カノンへと一斉に襲い掛かる。

カノンは特に動じず、右手を空にかざす。すると、中空に直径1メートル程の雷球が出現する。するとそれはモンスターと同じ、30の雷の矢となり、迫りくるモンスター全てを平等に貫く。

創造の粉が吹き荒れる。その間に、再び大量のモンスターが造り出される。恐竜モンスターよりだいぶ小さいが機動力に優れる鳥モンスターが数百羽。それが雨のようにカノンに降り注ぐ。

これにカノンは、魚を鹵獲する網のような、ビリビリと電流を放ったそれを出現させる。突っ込んで来た鳥モンスターはことごとく感電して消滅する。

ちっ、とタナトスの舌打ちが聞こえる。

カノンは言う。

「あなたの狙いは、私に魔力を消費させ弱体化させること」
つまり、と続ける。

「大量のモンスターを造り出しつつ自分は逃げ回り、私の魔力が無くなった頃を見計らって一気にあなた自身で攻勢をかける、ということね」

消え去った粉の中から現れたタナトス。

「まあ、ザコ共でももう少しは役に立つと思ったが……まあいい」
そう言いながら再び創造の粉を取り出す。

「だが、これはどうかな？」

そして現れたのは　タナトス。左右に1体ずつ、計2体。それも使用した粉の量は、タナトスのレプリカ1体で、恐竜モンスター

及び鳥モンスター全てを造った量よりも遥かに多い。

造り出したモノの性能は、粉の量に比例する。

例えば一つまみの粉で1体の恐竜モンスターを造り出せるとして、小瓶半分程の量の粉を使えば、巨大なドラゴンさえも造り出せる。まあ、それだけの量で1つの生命体を造り出せること、ひいてはそんな粉の存在自体が革命的なことなのだ。ちなみに、タナトス・レプリカ1体につき、使用している創造の粉の量は、小瓶10本分程だ。

「1体で俺の実力の半分にも満たないが……お前には十分だろう」
「……………」

「では　いくぞっ」

言い終わると同時、レプリカが左右から1体ずつ、本物が真つ直ぐ、カノンに向かって槍を突き出す。

カノンは真上へ跳んでそれを難なく回避する。それをレプリカ2体が追撃する。

空中で左右から迫る槍の鋭い切っ先に、カノンは、右側からの突きを剣で捌き、左側からの突きは柄を掴んで止める。

と、

「それは布石だ」

本物のタナトスがカノンの背後に現れる。そして高速の突きをカノンの心臓部へと放つ。

カノンは咄嗟に左のレプリカを槍ごと背後に移動させる。そのままレプリカ1体は槍に穿たれて創造の粉に帰す。タナトスは、風に飛ばされつつも残った粉少量からそのまま鳥モンスター50体を造り出す。

「っ！」

創造の粉が使い捨てではなかったことに不意を突かれるカノン。だが彼女も死線は幾つも潜り抜けてきたので、直ぐに冷静になる。自身の足元に雷を発生させると、その爆発力を使って、空中を蹴るようにして移動、地に降り立つ。

方向転換した鳥モンスターは一斉にカノンに襲い掛かるが、彼女の敵ではない。雷撃で50体全てが一瞬にして消え去る。

タナトスと彼のレプリカも着地する。

そして、タナトスは、近くに立つレプリカの頭を貫いた。

「何を……!？」

と驚くカノン。タナトスは自ら消したレプリカから出た創造の粉を全て使い、木こり男ウツダーがしていたように、背に蝙蝠のような翼を造った。

飛びながらカノンに突撃を敢行するタナトス。

速い。明らかに戦闘開始時より速い。同じ羽でも、粉の量でここまで変わるのか、というぐらいに。

まさに瞬く間にカノンの許に辿り着き、槍を振るう。それはカノンにすら微かにしか見えないぐらいの速さだった。

槍の刃先を点で捉え、反射的に首を右に思いきり振る。左頬を掠める槍。

血が滴るより先。

槍が再び振るわれた、とカノンが気づいた時にはもう遅かった。

彼女の腹部に深々と槍が突き刺さった。

23、死闘（後書き）

皆さん、こんばんは。 なんとか1週間後の更新をすることができました。

個人的に戦闘シーンは好きなのですが、やはり難しいですね。

ヒロイン、というか女の子を傷つけるのはちょっと、いやかなり気が引けますが、この際仕方ないですね。話の流れ的に。タナトスが速攻で倒されるのも何ですし。

まあ、次回も話の内容はあまり決まっていますが、ゆっくりと推敲していきます。それでは。

24、ディオネ登場

タナトスは、カノンの腹部に突き刺さっている槍を引き抜いた。温かな鮮血がドクドクと身体の外へと流れる。それに伴い、意識の糸も次第に切れてゆく。

「星、君……ごめん、ね」

そして彼女の意識は途絶えた。

槍を片手にカノンを見下ろすタナトス。

「所詮こんなものか」

そうつまらなさそうに言うタナトスは、カノンの頭上に槍を構える。

「じゃあな」

軽く槍を持つ手を離す。重力の為すがままに自由落下する槍は、カノンの頭に刺さり　はしなかった。

どこからか吹いた強風が槍を吹き飛ばし、そのまま槍は創造の粉となって消え去った。

「誰だ!？」

と、こんどばかりは焦りと怒りが入り交じったような声色で叫ぶタナトス。

刹那、翼付きのタナトスよりも速く移動してきた1人の人間が、タナトスを思い切り蹴り飛ばす。

あまりの運動エネルギーに、空中で半爆砕するタナトス。

タナトスの体内には、内臓といった器官や、骨がない。ただ創造の粉があるのみだ。よって、彼は再び元通りに身体を造りかえる。

「お前はアツ!？」

タナトスは突如現れた人間を見て、焦燥が小、驚愕が中、苦々しさが大といった感じの表情を作る。

1人の女性。頭の上の方で結び、腰辺りまで伸びている黒髪。カノンのような、綺麗な翡翠色の瞳。整った顔立ちが特徴的な、見

た目20代中頃の女性だ。

「大、賢者ッ！」

「……私の弟子が世話になったな」

彼女はタナトスを、その翡翠の双眸を細めてねめつける。それだけでタナトスは、焦った顔で1歩後ずさった。

彼女の名はディオネ。ウエリアルに3人存在するという伝説の大賢者の1人にして、カノンの師匠だ。

「なぜお前がここにッ!？」

タナトスは叫ぶ。その声に余裕は微塵もない。

タナトスにとって彼女の登場というのはそれほどまでに大きなことなのだ。もはや伝説として語られている大賢者にはタナトスでは手も足も出ない。先に会ってから9年経った今でも、だ。

互いに戦ったことはないが、確実にディオネが勝利するだろう。

それが分かっていたからこそタナトスは最初から戦わなかったのだが。

「退け。そうすれば命までは取らない」

ディオネは言う。

殺そうと思えば殺せるが、強大な力を持つ2人が戦うとなると、激戦になることは必至だ。下手をすれば、森自体がまるごと吹き飛びかねない。

大量に血を流して倒れ伏しているカノン、そして少し離れた所に倒れている少年。天枷星のためにも、それは避けたい。

タナトスは、怒りを露にディオネを睨み付ける。が、

「クソッ!!!」

と大きく舌打ちすると、蝙蝠のような翼を羽ばたかせてどこかに去って行った。

ディオネはまずカノンの許に向かって行った。

血まみれで倒れる弟子の前で申し訳なさそうな顔をするディオネ。

「すまない。私をもっと早く来ていれば……」

そう言いながら、懐から小さな小瓶を取り出した。中身は、透明の液体だ。普通の水か何かに見える。

彼女はそれを1滴、カノンの口に含ませた。

「んっ……」

と、一瞬苦しげな顔をするカノン。

その後直ぐに、信じられないようなことが起こった。

なんと、カノンの腹部の傷が何事もなかったかのように、跡形もなく塞がった。いや、元に戻った、と言った方が正しいかもしれない。

某RPGのアイテムで言うと、世界樹から取れる例のしずく、といった所か。

何にしても、カノンの身体から出血は止まり、体力、そして魔力は全回復した。よって彼女は、白雪姫のように穏やかに目覚めた。

「カノン……」

「ディオネ？ おはよう。………つて、ディオネ！？」

非常に驚くカノン。反応が遅いのはご愛嬌か、それとも、ただ寝ぼけていただけか。

「ああ、おはよう、カノン」

ディオネは気軽な調子で答える。

解せぬ、といった風な表情で、師であるディオネを見るカノン。

だが、さすがに慌てふためくことなく状況を鑑みる。

突然現れたタナトス。倒された星。過去の恐怖に怯えていた自分の頭の中に直接話しかけてきたディオネ。タナトスに立ち向かった自分。だが、腹部を槍で貫かれて、気を失った。そして今。目を覚ましたらディオネが側にいた。

彼女が持つ小瓶には見覚えがあった。

『生命の水』

この世界のどこかにあると言われている、生命の泉というところから採取された水だ。

名前の通り命を生かす水で、少量飲むだけで、深い傷、病、魔力等々をまるで何事もなかったかのように回復させる。ウェリアルでこう言うのもなんだが、魔法のような水である。

カノンも、ディオネと共に修行していて命の危険に晒された時に何度かお世話になった。

が、カノンにとって最も気になるのはそのことでもなく、タナトスがどうなったかでもなく、ディオネがなぜここにいるのかでもない。

星だ。

自分よりもずっと非力なああの少年がタナトスに立ち向かい、遊ばれていたとはいえ殺されなかったのは不幸中の幸いだ。

しかし相当なダメージを負っていることは確かである。カノンは、

「早く星君をつ！」

とディオネに、頼むというよりは強要するように言う。それ程星のことが心配だということだ。

「ああ」

ディオネはそれだけ言って頷くと、星の方へと歩いて行く。全快したカノンもついていく。

星の身体には打撲や擦り傷が多数窺えたが、実際はそれ以上のダメージを負っているだろう。

先のカノンと同様に、生命の水を1滴、星の口に含ませるディオネ。カノンはそれを隣で心配そうに見ていた。

「みるみる傷が回復していった星は、ゆっくりと瞼を開く。」

「俺は、……………そうだっ！ タナトスは!？」

「いずこかへと去っていった」

「!？」

いきなり聞こえてきた声にビクツとする星。そちらに振り向くと、カノン、そして彼女の隣にはディオネが、しゃがんで星を見ていた。

（誰だ？ この人）

首を傾げる星。

それを見て、ディオネは星に話しかける。

「私はディオネ。カノンの師だ」

「ええっ！？ デイオネ、カノンの師、ということは、大賢者？」

「ああ、一応大賢者の1人だ」

驚きを隠せない星。カノンと違ってディオネとは面識がないので、余計に面食らう。

カノンはディオネの方をチラッと一瞥して、星に、彼が気絶した後の事の仔細を説明した。1つ、自分が致命的な傷を負ったことは伏せておいた。無論星に心配を掛けないためである。ディオネも何も言わなかった。

星は終始　と言ってもそんなに長くはないが　真剣にカノンの話を聞いていた。そして、ゆっくりと口を開く。

「そんなことが……。なんか、ごめん。俺、出過ぎたマネしちゃって」

「そんなことない」

カノンは即答する。

「私を守るために戦ってくれた訳だし……かつこよかったよ」

本当はそんなこと考える程落ち着いていた訳ではないのだが、カノンは確信をもって言う。それに星は顔を赤くする。結果、こそばゆさと共に嬉しさを混ぜ、こう言った。

「……ありがとう」

開けた森に訪れる静寂は、心地よいものだった。

24、ディオネ登場（後書き）

皆さん、こんばんは。もう9月だというのに暑いですね。そろそろ涼しくなりそうですが。

ちなみに、今回ネタにあがった某RPGとは、今月15日に25周年を迎えたあれです。

今回は、未定です。思いつきで書きます。それではまた。

25、星とディオネ

傷が全快して以前よりも健康になったぐらいの星とカノンだが、ディオネの勧めもあり、今日は休むことにした。

カノンは、モンスターや、最悪タナトスが襲って来るかもしれないと懸念したが、ディオネが言うには、ここ周辺に何か仕掛けを施したらしいので、安心して寝てもいいらしい。

大賢者、いやそれ以前にカノンの師匠であるディオネが安心だと言ったので、2人は彼女の言葉通り、眠ることにした。

少しの間とはいえ意識を失っていた2人だが、なんだかんだで凄く疲れていたようで、瞼を閉じるなり直ぐに眠りに就いた。

「お休み」

聖母のような穏やかな表情で、眠る弟子カノン、そして救世主星を見るディオネ。

30分後。

「さて。私は明日の朝ごはんでも作るかな……」

そう呟いて、カノンの荷物から何やら食材を色々取り出した。

そして翌朝。

先に星が目を覚ました。

陽はまだほとんど昇っていない。

「あ、そうだ！」

星は突然東の空を見上げる。視界の下の方に僅かに太陽が窺える。が、彼が見ようとしているのは太陽ではない。

明けの明星　金星だ。

ここウエリアルが地球だとすれば、東の空に明けの明星が見える筈だ。天気が悪かったりすでに明るければ見えないかもしれないが、まだ辺りは十分暗いし、天気も相変わらず良好だ。

星はじつと目を凝らす。

5分経過。

「……見えない」

決して星は視力が弱い訳ではない。

10分経過。

「……見えない」

更にじつと東の空を見る。

20分経過。

「……見えない」

そして、太陽が少し昇ってきた。それで空は格段に明るくなる。

結局、金星は見えなかった。

こんな時間に空を眺めたことなど滅多になかった星なので、見逃していたりするかもしれないが、彼とてここが地球だとは最初から期待していなかった。

仮にここが地球だとして、あんなモンスターが発見されれば大ニュースになることは確実だし、それ以前に、アグライアがカノンの言うように世界中の人に予言を、それも頭の中に聞かせたのなら、覚えている人は大勢いる筈だ。星もそんな話、普通の学生、というよりウエリアルに来る前は聞いたこともない。

ここが本当に地球と無関係の、文字通り異世界なら、星が認識する太陽という物体が全く別の何かである可能性も大いにあり得る。

と考えている星。すると、どこから歩いてきたディオネが彼に少し驚いたように声を掛けた。

「やあ。もう起きたのか。早いな」

星は考え事をしている最中だったのでかなり驚いたが、ディオネだと分かると安心したように返事をする。

「おはようございます」

「うん、おはよう」

しばしの時が流れた後。

「ちょうどカノンも眠っていることだし、私と話をしないか？」

と、ディオネが星に言う。ちょうどカノンも眠っていることだし、
というのは、カノンの話をするということだろう。星も、

「あ、はい。俺もあなたに聞いておきたいことがあります」

「ふふっ。まあ、君にはこの世界については分からないことだらけ
の筈だからな。……じゃあ、まずは私からいいか？」

「ええ、どうぞ」

そしてディオネは話し始めた。カノンとの日々を。

「あの娘は、私と一緒に行動することになった初めの頃は本当に無
気力で、何をする気にもなれなかつたんだ。まあ、7歳の少女には
あの現実は無すぎた、ということだ。私も特に何も言わなかつた。

無為に口出しするよりは、カノンが自分自身で立ち直る方が、あの
娘のためにもなるしな」

星はただ黙って聞く。

「それにまだ、カノンの本当の力を知らなかつたんだ。溢れんばか
りの魔力は感じられたがな。で、そのままほとんど言葉を交わすこ
ともなく一ヶ月が過ぎた。そして事態は一変した」

近くで眠るカノンの顔を眺めて、感慨深そうに目を細めつつ、話
を続けるディオネ。

「その日、私は用事があつて、家から少し遠くの町に出かけていた
んだ。カノンを1人残して。用事が済んで夜に家に帰ったら、珍し
くカノンが私に抱きついてきたから、遂に心を開いてくれたのかと
思つたんだが……、どうやら違つていたようだ」

そこで一度、大きく息を吐く。

「カノンの服は汚れただけで、自身も相当疲れていた。カノンが言
うには、近くの川に行ったら何か巨大な生物　モンスターだな
に襲われたらしい」

「そんなつ、あの出来事から一ヶ月しか経っていないのにそんなことが……」

驚きが星の口から漏れる。僅か7歳の少女を立て続けに襲った理不尽な悪夢に、彼は思わず歯噛みする。と同時にある疑問が生じる。まだ魔法も使えず、戦闘能力もほぼ皆無。そんな在りし日のカノンが、一体どうやって強力なモンスターを退けた、或いは倒した（消した）というのか。

彼は次のディオネの言葉に聞き入る。

「震えてその場から動けなくなったカノンは、怯えながら、モンスターが迫ってくるのを見ていたらしい。そしてモンスターの牙がまさに届くという刹那、叫びながらつき出されたカノンの掌から、よく分からない光が出て、モンスターを一瞬にして創造の粉へと戻してしまったらしい」

「それって……」

「ああ、魔法だ。モンスターの恐怖から何も考えられず、無意識に出したようだが、魔法はそう簡単に発動できるような代物ではないのだ。故に、魔法を行使できる私、クレイオー、アグライアは、大賢者と呼ばれているのだから。まあ、とにかくその日は怯えるカノンをなんとか寝かしつけて、とりあえず問題の川に行ってみただが……まあ、なんだ、やっぱり凄かったよ、あの娘は。その川の付近一帯が吹き飛んでいた」

またしても驚愕する、元普通の高校生の星。この世界では驚愕するようないことが多すぎて、一々驚愕するのも野暮に思えてくるくらいだが、本心から驚いているのでは仕方がない。

「そして次の日、私はカノンに、魔法の使い方、剣術などを学ぶことを提案した。カノンは即座に首を縦に振った。で、その日から共に鍛錬を初め、その後色々なことがあつて今日に至る訳だ」

「あれ、最後がやけに抽象的すぎじゃないですか？」

「ああ、その間の出来事については、私より、カノンから直接聞いた方がいい」

確かに星にとつてはその方がいいかもしれない。カノンは、信頼できる『仲間』だ。だから、そういうことは自分から話してくれるのを待った方がいい。

星としては、カノンと『仲間』以上の存在になれたらいいなあ、などと思っていないこともないが。

実際彼女は、これ以上ないくらいに理想的な女の子だ。

すらりとした体躯、整った顔立ち、流れるような長い金髪、それらをあわせ持つ美少女で。

優しく、他人のことを第一に気遣って、悪には厳しくて。

いつもは驚異的な身体能力、神業とも言える剣術、強大な雷の魔法を駆使して戦う強い女の子だが、たまに見せる弱さが可愛くて。

全てが完璧そうなのに、料理は下手だったり。

星がもといた世界、日本には、まずこんな女の子はいなかった。

彼曰くカノンは、ギャルゲーのヒロインの権化だ（様々なゲームをプレイする星は、ギャルゲーもたまにプレイする）。

と、

「今更だが、君の名前は天枷星だよな？」

ディオネが呼び掛けた。

「あ、はい、そうです」

「じゃあ、天枷でいいかな？」

「ええ、それで結構です」

（つて、俺、名乗ったっけ？）

軽く頭に疑問がよぎるが、まあいいや、と流す。

彼は知らない。ディオネが、ここに急いで来る途中、魔法によって会話を聞いていたことを。

「では天枷、次は君の番だ。私が答えられることならなんでも聞いてくれ」

ディオネの言葉に星は、それなら、と、自分が救世主だと知った時から変わらず抱く疑問を尋ねる。

「じゃあ……、俺がウェリアルの救世主たる要素ってというのは何な

「んですか？」

「……わからない」

「ええっ!？」

申し訳なさそうに言うディオネに、聞く気満々だった星は気を削がれる。

「救世主についての詳しいことについては、おそらく予言をした当人のアグライアしか知らない。私もアグライアとは当分会っていないんだ。……期待させておいてすまない」

「いえ、そういうことなら」

全くガツカリしていないと言えれば嘘になるが、聞く側としては答えを相手に委ねる訳だし、文句は言っていられない。それに星自身反射的に驚嘆の声をあげたが、カノン以外に、なんというか、人間的な人間 意味不明だが、彼はそう思っている とこの非現実な世界で出会えたことも、精神的にかなりプラスだ。

「コホン。じゃあ、改めて。私が答えられることならなんでも聞いてくれ」

聞きたいことは山程ある。だが、山程あるからこそ何を聞けばいいのか分からない。ちょっとしたことまで含めて、全てを聞いてもらうのも彼女にとって酷だろうし。

しかし、この世界を救うための貴重な時間を無為に減らすのもあれなので、とりあえずさつきから結構気になっていることを質問する。

「その腰から下がってる刀って、もしかして『三日月宗近』じゃないですか？」

「? 確かにこの剣は『三日月』という名前だが、なんで君が知っているんだ? それに刀とはなんだ?」

「ええっ!？」 『三日月宗近』と言えば、『童子切』、『大典太』、『数珠丸』、『鬼丸』と並ぶ天下五剣で、その中でも最も美しいと言われる名刀じゃないですか。平安時代の刀工である三条宗近作の刀で、反りが大きく、切っ先にいく程刀身はどんどん細くなってい

く独特の美しさを持った名刀中の名刀ですよ！」

星は人が変わったように熱く語る。実は、彼は半年程前に刀がいっぱい出てくるゲームをプレイしていて、それ以来刀について、時々、色々調べていたのだ。その結果、刀に関してはそれなりに詳しくなったのである。

これで貴重な時間を無為に使ってしまったことを、後々彼自身否定するか肯定するかは、彼の刀への情熱、心意気が決定するだろう。ディオネは、

「とりあえず落ち着こう」

と、語る星をストップさせる。

「しかし史上最高の業物と言われるあの刀には　はっ！？　すいません、俺としたことが」

「いや……気にするな。まあ、それはともかく、君の話を要約すると、この剣　君は刀とか言ったな　のことを知りたい、ということでもいいのかな？」

「はい」

短く答える星。刀、剣、そういう類の、所謂武器には、一男子としてもゲーマーとしても興味をそそられずにはいられないのだ。よく言えば好奇心旺盛、悪く言えば中二病といった所だろうか。

「この剣は先程も言った通り『三日月』という名で、私が、そうだな……確か、300年くらい前に作った剣だ」

「ええっ！？　作った！？」

もつと驚く所があるだろう、とどこからかツッコミがきそうな程『300年くらい前』という語をスルーする星。ただ、彼にとつてはそれより『作った』という語の方が驚きに値するということなのだ。

「だから、君の言う刀とか三条宗近といったものは私には全くもつて分からないんだ」

言われてみれば当然のことである。星が言う『三日月宗近』とは、地球の中の日本での話で、この世界とは関係ないのだ。それに彼は

さっきここが地球とは別の次元だということを、自分自身で簡易ながら調べたばかりだ。

星はそのことを理解し、

「それもそうですよね」 と返す。

そして再び訪れる沈黙。

それを破ったのは、

「ん、ん~~~~~っ」 と伸びをしながら起き上がるカノンだった。

25、星とディオネ（後書き）

皆さん、こんばんは。この挨拶のネタ知ってる人いるのかな？と、少し不安です。

今回は、一応題名通り星とディオネの話でしたが、途中ディオネが一方的に話したり、星の質問がディオネの意とはかけ離れたものだったり、まともな会話をしている部分は少ないんですね。まあ、前者は仕方ないのですが、後者は……。
という感じで、かなり中途半端な所で終わってますが、カノンが加わると、『星とディオネ』ではなくなるので、無理矢理終わらせました。

次回も……1週間くらいで更新できればいいのですが、それではまた。

26、目指せ！ リフレルム山

カノンの目覚めは良好だった。生命の水の驚異的な治癒能力による所が大きい。久しぶりに師匠に会えたことも大きい。

彼女が目覚めた時には、星とディオネが会話を始めてから30分以上経っていた。太陽？ も上半分を地平線の彼方に出現させ、辺りはだいぶ明るくなってきた。

「星君、ディオネも、もう起きてんだ」

近くに立つ2人に直ぐ気づいたカノンは、声を掛ける。2人も、カノンが伸びをした時点で彼女が起きたことに気づいていたので自然な流れでお互い朝の挨拶を交わす。

そしてカノンも会話に参加。再び話し合いが開始された。

「何話してたの？」

カノンがどちらともなく、どちらにも答えられる質問をする。

わざわざ嘘を言うことでもないが、先の話は、カノンが寝ている故にした話だ。彼女が起きていても別に話せない内容ではないのだが、そこはディオネなりの気づかいというものだ。

しかしまあ、今のカノンがそんなに弱い心の持ち主な訳もないので、

「カノン、お前が私と来てから最初の1ヶ月のことだ」

その台詞から始め、さつき星に言った内容を掻い摘まんで話した。ディオネが話し終えると、カノンはどこか懐かしむような顔をした。

「あの頃は本当に、気持ちの整理がついてなくて、ディオネには凄く迷惑掛けちゃってたよね」

「別に気にはしていなかったよ。あの頃のお前の気持ちを察すれば、無意味に何かをしても逆効果だったしな」

寛大とかそういうものではなく、本当に、当たり前のように気にしていなかった。それは、興味がなかったとも言えるかもしれない

が、ディオネもディオネなりに心配していたのだ。

そして、カノンに魔法や剣術を教えつつ、彼女の心を癒していたのである。

その後しばらく思い出に浸っていたカノンとディオネは、ハツとしたように直ぐ近くにいる星を見る。彼はもちろんカノンとディオネの過去の話などはほとんど知らない訳なので、ただ立って2人の話を聞いていただけだ。それを不愉快だと思っ星ではないし、むしろ2人の話を聞いているのも面白いので全然問題はないのだが、当の2人は彼に対し少々悪い気を使わせてしまったと思っていた。

「ごめん、星君」

カノンが謝る。

「いや、いいよ。むしろ2人の話を聞くのも面白かったし」

微笑みながら返す星。 何はともあれ、本来の話題、即ちウエリアル^①の滅びに関する話を話し始める。

「コホン、では私から話そうか。この世界の滅びについて分かったことを」

まず、ディオネが口を開く。

「私は1年前にカノンと別行動するようになってから、アグライアの居場所について探っていた。結果的にはそれは分からなかった訳だが、色々^②と奇妙な出来事の情報を得たり、様々なモンスターを倒したりと、1年を無駄に過ごしていた訳ではなかった」

「奇妙な出来事、ってというのは？」

星が質問した。

「集団失踪、町や村の崩壊、見たこともない生き物の発見。最後のは、私が実際に倒した結果、創造の粉によって造り出されたモンスター^③だった」

「最初のと、2番目のは？」

今度はカノンが尋ねた。

「最初のは、出掛けたまま何者かに襲われて殺されたか連れ去られた、というものだ。これもモンスターによるものが多かったが、連

れ去られた、というのは盗賊によるものだ」

星とカノンは沈痛な面持ちでそれを聞いていた。今まで数多くの人間の屍を見てきたカノンは、殊更だ。星は平和な国で生まれた故に、大量に人が死ぬ出来事というのは、遠くの国での紛争や、自国日本では地震による大規模な被害を新聞やニュースで見聞きするくらいだ。だが、自分が関わる、この世界の滅び、それにおそらく関係しているモンスターによる被害というのは、彼にとっても悲痛極まりない。

ディオネは2人の内心を察したが、あえてそのまま話を続けた。「そして2番目のは、何者がやったのかは不明だ。私が噂などを聞きつけてその場に赴いた時には、既に町や村は跡形もなく崩壊していたからだ。ただ、色々な人に話を聞くに、それはそう多くない人数で行われたらしい」

ということとは、それをやった誰か、或いは何かは、相当な実力の持ち主ということになる。

そんなことを平気でやる冷酷さ、そして村や町を1人、もしくは1人に近い程の少数で崩壊させる程の実力を持った人間を、星、そしてカノンは、1人知っている。

タナトス。

昨日突然現れ、星、更にはカノンにまで痛手を負わせた、謎の男だ。世界を自身の手中に収めるために行動を起こしているため、ある意味世界の滅びとは最もかけ離れている。

彼が町や村を破壊していった可能性は多いにあり得る。カノンとディオネは9年前実際に現場に居合わせたからである。

タナトスが町や村を破壊する目的は、おそらくは、カノンの故郷を滅ぼした時と同様、即ち強大な力を持っている者の抹殺。

まあ、もちろんタナトスがやったというのは仮定にすぎない。ただ、星とカノンにはあの男しか思い浮かばなかった。

場の雰囲気は暗い。陽はすでに、その八分は姿を現しているというのに。

「そろそろ朝食にしようか。私がつっておいたから」
ディオネが明るい声で言う。
その直後。

ぐうつうつうつうつと、と、星、カノンのお腹から何とも間の
抜けた音が漏れた。

頬を赤らめる2人。

「直ぐ食べれるから、少し待っていてくれ」

5分後。

「待たせたな」

カノンの荷物の中から勝手に取った皿3つ　折りたためる便利
な代物だ　に、3人分の食事を乗せて戻ってきた。皿に乗ってい
るのは……、

「団子、ですか？」

「ああ、そうだ」

それぞれの皿には、5センチくらいの団子が5つずつ乗っている。
タレはもちろんというのか何というか、かかっていない。味がある
のか星は疑問に思ったが、ディオネ、そしてなぜかカノンまでも得
意気な顔をしている。

「ああ、そうだ、タオルを濡らしてきたから、それで手を拭いてか
ら食べてくれ」

そして皆手を綺麗に拭き、まずは星が団子を口にする。

もぐもぐ、もぐもぐ。

「!?!?　こ、これは?!?!?」

星の口に団子が入った瞬間、それは起こった。口の中いっぱい
広がる甘酸っぱい香り。星はその味を知っていた。そして思い出し
た。ズボンの左ポケットに入っているモノを。

赤くて小さな木の実である。この世界に来て始めの頃、その木の
実を摘んで食べたなら美味しかったので、ズボンの左ポケットに10
粒入れておいたのだが、すっかり忘れていたのだ。

星は木の実を取り出す。ディオネはそれを見て、驚いた風に少し

目を見開く。

「それは、チュリーの实じゃないか。この団子の味付けにそれを使っているんだが、君の知っている味だったか」

「ええ。カノンと出会う前、食べ物求めてデルー密林をさ迷っていた時、この木の実を見つけたんです」

そんな他愛のない会話をしながら、朝の食事は進んでいった。

昨日の朝以来何も食べていなかった星とカノンは、満足そうにお腹をさする。

「ところで、2人はどこを目指して旅をしているんだ？」

ディオネが2人に問うた。

カノンが答える。

「リフレルム山よ。そこにアグライアがいるらしいわ」

「アグライアが？ どうしてそんなことが分かるんだ？」

「それは、俺が説明します」

そして星は、アグライアが現れた、夢、或いは現実ともとれるそれをディオネに説明した。

「……なるほど。いかにもアグライアらしい」

続けて言う。

「……私も共に行ってもいいか？」

星、カノンは、もちろん大歓迎だ。

そんなこんなで、ディオネという大賢者にしてカノンの師匠でもある心強い仲間が加わった。

26、目指せ！ リフレルム山（後書き）

皆さん、こんばんは。 10月になり、一気にひんやりとしてきましたね。

今回も会話主体の話となりましたが、次回はまた北のリフレルム山を目指して旅立ちます。それではまた。

27、燃える村

朝食の団子を食べた3人は、30分程休憩してから、出発した。ひたすら北に向かう、と言っても基本は道なりに進んでいく訳だが、この森は道と呼べるものがない。故に迷いそうだが、しかし、星達が方向が分からなくなって森中をさ迷い続けるということは皆無に等しい。なぜなら、ウィーク村でもらったものの中に実はちゃっかり方位磁針があったからだ。

まあ、方位磁針などなくても彼らなら難なく進める筈だが。

1時間程歩くと、森の出口に着いた。カノンとディオネは息一つ乱していないが、星は相変わらず疲れたような表情をしている。この世界に来たての頃よりはましになったが、女性2人を見ていると自分の体力が疑わしく思えてくる。

と、前方2キロメートル程先で何やら煙が上がっているのが確認できた。森の中では高木がたくさん生えているので分からなかったが、煙は一筋ではなく幾筋も上がっている。

家が一軒炎上したとして、そこから連鎖的に他の家にも火が燃え移る、ということはよくあることだが、事今のこれにいたっては、その可能性は薄い。煙は視認できるだけで十筋は軽く越えているが、普通に家々が乱立しているのはそこまで火の手は広がらないのだ。アパートメント等、家々が繋がっている場合は次々と燃え移っていくが、現在進行形で濛々と上がる煙は一定の軌道を描かず、各所に不規則に点在している。

よってこれは単なる火事ではない。

考えられるのは、何者かによる意図的な放火、或いは破壊に伴う炎上。

このタイミングで、おそらく村か何かが燃えている状況を鑑みて、犯人は……、

「タナトス……っ!」

星が唸る。

そう、タナトスがやったと見て間違いないだろう。

先のディオネの話、即ち、町や村を破壊する者の話を聞くに、星とカノンはそれがタナトスの仕業だとほぼ確信していた。

加えて、タナトスは昨夜ディオネの登場によって退くを余儀なくされた身である。自分が世界の王になるなどと言う程の男が、1人の女性が現れただけで何もせず退いたのだ。自分の多大なる自尊心を傷つけられたタナトスが、憤怒の赴くままに見かけた村や町を破壊するというのは十二分にあり得る。

「やはりあの時倒しておけばよかったか……」

悔やむように呟くディオネ。

「とにかく行ってみましょ」

そのカノンの言で、3人は煙の上がる場所へと足早に向かった。

村、いや、村の跡がそこにはあった。

遠くから確認できた通りにあちこちから立ち上る煙。燃え続ける家の残骸。

そして。

人。

傷だらけで横たわり、虫の息で命を保っている人。

そんな人達の傍で泣き叫ぶ人。

果ては死体。だが、それが圧倒的に多い。

生き残っている人は、全体の1割にも満たない。

「うつ、うつ……」

必至にこみ上げる吐き気を堪える星。頭では駄目だと分かっている。でも、生理的な嫌悪感には彼の心を抉る。

彼は死体を見たことがない。ましてや、無残に焼かれたり裂傷を伴ったりしているものなどはなおさらだ。日本でそんな死体を見たことがある方がおかしいのだが。

「まずは、怪我人に生命の水を施そう。そして次に、死体を埋める。天枷、できるか？」

ディオネは一応これからの方針を決めたが、星のことが心配であった。

「……できます。いえ、やります」

それが強がりだと、彼の顔を見れば一目瞭然だった。しかしディオネは、

「……そうか、分かった」

と、静かに言った。それは星の目　揺るぎない意思を秘めた目を見てのことであつた。

生命の水は1瓶しかないので、回復はディオネが1人で行つた。息がある人間の口に生命の水を1滴ずつ含ませる動作をひたすら続ける、というものだ。

30分程掛けて、村人　ではない人もいるかもしれないが40数人の傷を快癒させた。と言つても治つたのは外見上の傷だけで、内面　心の傷は一片たりとも癒せはしなかつた。

ともかく、その後3人は気力のある村人数人と共に死体を埋め、木で簡易的な墓標を立てた。星もカノンもディオネも、村人達も終始無言だつた。とても何かを話す気分にはなれなかつた。

星はとりわけ気を沈めていた。カノンとディオネから離れた場所に1人で立っている。

「……これが、現実つてやつか……」

誰にも聞こえないくらいにかすれた声で呟く

「これで精神崩壊しない俺つて……」

自重気味に。

「こんな俺が救世主なんかでいいのかな……？」

今や星は、彼自身の最大の行動理念、即ち救世主としてこの世界を救つこと、そのためにウエリアルに飛ばされた自分に疑問も持ち始めていた。何度そのことについて考えたか分からない。カノンに

優しい言葉を掛けてもらうたびに何も考えず立ち直ったふりをしていたのかもしれない。

「俺は、君に甘えていたのかもな……」

恐竜モンスターに襲われまさに絶体絶命という時、颯爽と現れ次々とモンスターを倒していったカノン。星にとっては、彼女こそが救世主だった。

「星、君……」

星からは死角となっている物陰。

カノンは、星の咳きをこっそりと聞いていた。

皆まで聞き、彼女は直ぐに「そんなことない！」と星に言ってやりたくなった。

しかし、言ってしまったのもいいのか、とも思う。

たとえ今そんな言葉を掛けても、それは偽りでしかない。また星は何かがきっかけで彼自身に疑問を持つことだろう。

もちろんカノンが言ってきたことは、偽りのない彼女自身の本心だ。星が救世主に相応しくないなどは欠片も思っていない。

物陰から少し顔を出して、星を見る。彼は疲れ切ったように立ち尽くしていた。

今の星の気持ちを、カノンは痛い程理解できた。

9年前。自分が帰る筈だった場所が燃え、村人達と死別したあの時に。

星、カノンは、そんな訳で異変に気づけなかった。即ち。

「天枷っ！ カノンっ！ モンスターだっ！」

「「っ!?!」」

ディオネのその声でやっと気づいた。モンスターがこの村跡に現れたことに。

27、燃える村（後書き）

皆さん、こんばつぱ。予定より少し遅れがちな投稿です。森を出た星達ですが、いきなりシリアス展開になるという（笑）。星が死体を見た時の反応をもっと過剰に表現した方がよかったですかもしれないね。

次回の投稿は……来週に定期テストがあるので、例によって遅れるかもしれません。が、できる限り早く投稿できれば幸いです。ではまた。

28、疾風連舞（前書き）

皆さん、お久しぶりです。定期テストも終わったので、とりあえず投稿します。

28、疾風連舞

見受けられるモンスターは、狼に酷似したすばしっこそうな獣型モンスターだ。

カノン、ディオネがいれば楽に倒せる相手だが、ただ1つ問題がある。

煙や瓦礫などで視界が悪い中、いかにして村人を守りながら、何体いるのかも未知数なモンスターを倒していくか、ということである。

村人は各所に散っているし、視界も悪い。この状況で様々な方向からモンスターが攻めてくれば、村人達が混乱するのは必至だし、下手をすれば死者だって出るだろう。

狼型モンスターは、現在は村跡の周りを周回している。村人達はまだモンスターには気づいていないようだ。

予めモンスターが攻めてくることが分かっていたら、罾を張って待ち構え、一気に殲滅することもできたかもしれないが、状況が状況なのでそれも危うい。

「私達が最優先に為すべきは、村人達の命を守ることだ。なので、まずは村人達を一ヶ所に集めた方がいいな。その方が、注意をそこだけに集中していればいいから守るには有利だ」

確かに村人達を一点に集めれば、カノン、ディオネ、そして星のことだ、モンスターを速攻で掃討するのも容易いだろう。

そのためには、モンスターが攻め来る前に迅速に村人達を集める必要がある。

だが、表面上の傷は回復したとはいえ、家族や村を失った悲しみが癒えた訳ではない。そんな折にモンスターが出たと聞けば、混乱して逃げ回るよりかは、むしろ自ら同胞の後を追う者の方が多いこともあり得る。

「さて、どうするか……」

ディオネが考えるように言った。

星は鬱気味の心を押さえつけ、村人達を素早く一ヶ所に集める方法を模索する。村人達の収集が完了すれば、それはモンスターを掃討しないし撃退することに直結するのだが……。

(どうする。どうすれば……)

相手は創造されたモンスター。実際にいる生物ではない。よつて、普通の生き物 狼型の獣 への対処法が通じるとは限らない。

大きな音や火に反応して逃げる、とはいかず、逆に猛り襲い掛かってくるかもしれない。

では、狼型の獣という小カテゴリーではなく、創造されたモンスター全体に共通する事柄を考えてみれば……。

星が相対したモンスターは、恐竜型、ゴーレム、鳥型、ドラゴン、タナトス・レプリカだ。

その内、鳥型、ドラゴン、タナトス・レプリカ、ゴーレムは、タナトスが使役していた可能性が高い。

故に、Mobキャラのようにある程度固定された反応を示すであろうモンスターは、恐竜型だけだ。

(だが、確実に決まった行動しかしないと限らない……)

不確定要素が多いことは、物事を決めていく過程において大きな迷いを生じさせる。

何種類もの野生化したモンスターを調べ、行動の規則性を発見していれば、かなり楽に、村人達を守りつつモンスターも倒せただろう。

「……待てよ？」

「どうしたの？ 星君」

「んつと……俺が初めてデルー密林で発見した恐竜型モンスター。あいつらは、俺が近づくまでただ突っ立ったままで、近づくと突然こっちに振り向いて襲い掛かってきた。当たり前と言えば当たり前だけど、それまでは微塵も動かず、本当にいきなり襲い掛かってきたんだ」

一度、大きく息を吸って吐く。

「そして、村の外周を徘徊しているモンスター。奴らはなぜかまだ襲い掛かってはこない。それはたぶん、創造の粉によって造られたモンスターは視力が悪いことを意味する、と思うんだ」

性の悪い人間なら星のことを、何言っただこいつ、とか思うかもしれないが、もちろんカノンとディオネはそんな人間ではないので、真剣に彼の話を聞いている。

「これらの事柄から、モンスターが襲い掛かるのはきつと、『視界にはつきりと映る、生命活動をしている人間』なんじゃないかと思う。もちろん俺のただの憶測でしかないけど」

それはあくまでタナトスに使役されていないモンスターのことで、もし狼型モンスターをタナトスがどこかから使役しているのなら、この考えには当てはまらない。

自信無さげな星にディオネは言う。

「……そうだな。今は君の考えに賭けてみよう」

その言葉に思わずホツとする星。だが直ぐに顔を引き締める。今現在は、言わば非常事態なのだから。

ディオネは星、カノンをそれぞれ一瞥すると、村人を守るための作戦を話し始める。

「視界に映らなければ奴らは襲ってこないのなら、少なくとも村人はまだ誰も見つかつてはいない筈だ。しかし、村人の方から奴らに近づき、襲われるということもあり得る。早急に事を進める必要があるな。よって、村人の確実な安全確保のためにも、カノン、天枷の二人は村人達を村の中央に集めてくれ。その際モンスターに発見されたら、カノン、お前が皆を守ってくれ。いいか？」

「ええ、必ず誰も死なせたりしないわ」

はつきりと言うカノン。

「うん。私は外周を闊歩しているモンスターを倒す。それではまた後で会おう」

そしてディオネは村跡の外周に向かって走っていった。

「私達も行きましようか」

「ああ……そう、だな」

星は、無力な自分に腹が立っていた。そして同時に、強大な力を欲する気持ちも膨らんでいった。

（いや、今は俺ができることをしよう。強くなるのはその後だ）

二人は、村人を一ヶ所に集めるため、ディオネとは反対の方向へと走っていった。

ディオネは、結った漆黒の長髪を靡かせながら、飛ぶがごとく村跡の外周へと到達した。

モンスターの数は、確認できるだけでも二十体はいる。

この、今は廃墟となってしまうた村は、円形に近い形をしている。直径は大体二キロメートル程で、その外周六キロメートル程に渡ってモンスターが闊歩している。その総数は、百五十体程だ。

なぜモンスターは一気に村跡へ突入しないのかディオネには分らなかった。奴らを造り出したタナトスの意思がそうしたのかもわからないが、村人達の命が一応は安全なのは好都合だ。

どちらにしろ、

「直ぐに終わらせよう」

やることは変わらないのだが。

腰の辺りに提げた鞘から、愛剣　刀ではない　三日月をゆっくりと抜く。立ち上る煙が空を覆い、曇りの日みたく若干暗いこの地に、三日月特有の美しく反った刃が曙光のように煌めく。

次にディオネは、囁くように言葉を発する。

「リルクエンス」

魔法発動のキー、呪文。その一言を紡いただけで、彼女の身体の周りを覆う空気がざわつく。

ディオネは、五体程モンスターが固まっている場所へと軽く三日月を振るう。するとそこから空気の刃がモンスターへと飛来し、刹那の間に消滅、モンスターは為す術もなく創造の粉に帰した。

ディオネが駆使用する魔法は、風の魔法だ。

風を上手く扱えば、今のように空気の刃、真空刃を放つこともできるし、追い風によって瞬間移動のような速さを得ることも可能だ。一個人につき一種類しか魔法を扱うことができないので、魔法を使う者達は皆、ある特定の魔法のプロフェッショナルである。なので、魔法の応用性というのは、使い方次第では無限大にもなる。

「さて……いくぞっ！」

ディオネは気合を入れるように叫ぶ。

モンスターは多勢にも関わらず、怯えたように後ずさる。が、ある一体が雄叫びを上げると、他のモンスターも共鳴するように雄叫びを上げる。そして一気にディオネのもとへと突っ込んだ。

ヒュウウウウウ、とディオネの周りの空気が激しく振動する。彼女は三日月を後ろ手に構え姿勢を低くすると、その場で大きく反時計回りに一回転した。

すると、そこを中心に小規模な竜巻が発生した。

モンスターが十体、荒れ狂う竜巻に突っ込み、一瞬にして消滅した。残ったモンスターは、一様に急停止する。ディオネはその間に、風を足元に圧縮させ、滞空した。そして空をもの凄い勢いで飛び、次々とモンスターを斬っていった。

彼女は、魔法はもちろん、剣の扱いも伝説級だ。この世界ウエリアルの中では、最強の魔法剣士なのである。そのディオネに魔法、剣術を教わったカノンも、もちろん最強クラスの魔法剣士だ。

彼女は、外周を取り囲むモンスターを倒すため三日月を手に飛んで行った。漆黒の瞳に強い意志を込めて。

28、疾風連舞（後書き）

皆さん、こんばんは。早いもので、10月もそろそろ終わりを迎えようとしていますね。

ところで、10月15日からPlayStation Vitaの予約が開始しました。ゲーム好きの少年を物語の主人公にするぐらい私自身ゲーム好きなので、15日になった直後に某通販サイトにアクセスして予約しようとしたのですが、まさかの予約終了。みんなどんだけ仕事早いなだよ、って感じですね。結局その日、家電量販店で予約しました。発売が楽しみです。

小説の内容に入りますと、やっぱり数字は漢数字に統一することにしました。今までの話もどんどん手直ししていきます。

最後に、皆さん、風邪にはお気をつけください。それではまた次回。

29、蝕む狂気（前編）

星、カノンが村人達を集めるために走り始めて直ぐのことだった。「うわあああああつ!?」

これは、

「悲鳴！ 早く行きましょう！」

「ああ！」

おそらく、村人の誰かがモンスターを見つけたか、逆に見つけられたかしたのだろう。早くその場に行かなければ村人がモンスターに殺されるのは必至だ。

星は足場の悪い地を全力で駆ける。もはや疲労を通り越した身体を動かすと、却って倦怠感を忘れることができた。

しかし彼がいかに全力で走ろうと、カノンには到底追い付かない。彼女は星に合わせて常に十メートル程先を走っているが、明らかに全力で走っているようには見えない。呼吸は全く乱れていないし、足の運びもしなやかだ。一体彼女が本気で走ったらどれぐらいの速さになるのだろうか。

叫び声が聞こえたのは、星達がいた場所からちょうど二キロメートル程先、つまりは外周ぎりぎりの地点である。

四分三十秒で、目的の場所に着いた。全く息を切らしていないカノンに対し星は、ぜえはあ、と止めどなく過呼吸に近いぐらい息継ぎを繰り返す。それと同時に目眩が生じ、視界もちらちらと白くなる。

嫌な汗が、背中を這うように流れていく。

正直、今直ぐにでも吐いてしまいそうな程気持ち悪かった。しかし、目の前で今にもモンスターの爪に引き裂かれようと、或いは牙に噛みちぎられようとしている村人を見てはそれも憚られる。

四十歳ぐらいの男が必死にモンスターと戦っていた。手には木の棒。凶暴なモンスターと戦うにはあまりにも心もとない。

カノンが駆ける。

モンスターは億劫そうに反応する。どこかのザコが乱入してきた、ぐらいにしか思っていないのだろう。……いや、造物の塊であるモンスターが何かを考える、思うといった行動をとるとは考え難い、か。

モンスター二体の内一体が狼さながらの身体能力でカノンに襲い掛かり、喉元に噛みつこうとする。

カノンは軽くしゃがんでこれを回避、と同時に刹那的な抜刀切り上げを繰り出し、モンスターの胴体を両断。舞う創造の粉の確認はせず、再び駆ける。

残るもう一体のモンスターは、鋭い牙が並ぶ大口を開けてカノンへと真正面から突っ込む。カノンは同じく正面から突貫。モンスターが到達する前に、彼女は剣をその大口に突き刺す。

黒き粉が吹き荒れる。 あっという間の出来事だった。

「ふうっ」

カノンは、驚いたような顔をしている村人を見てひとまず安心したように息を吐くと、村跡の中央部に行くよう促した。モンスターのことなど知らない村人は、やはり怪訝な顔をするが、感謝の念が勝るのだろう、何も言わずに中央部へと向かった。

その次に彼女は星の許に向かう。毎度のことだが、それ程星のことが心配だということだ。

星は、いつも自分を心配してくれるカノンに心から感謝した。が、いつも自分のことで気を遣わせてしまうということに情けなさも多分に感じていた。

しかし、今の星はかなりヤバかった。視界は明滅を繰り返し、足取りもおぼつかない。ろくに走っていない者が急に、それも全力で二キロも走るのは割と身体に負担が掛かるのだ。

ということ、星は罪悪感や情けなさを感じつつも、カノンに肩を借りて近くの水道で水を飲んだ。もちろん状況が状況なので直ぐに終えたが。

「はあ……情けねえ」

一人自嘲気味に呟く元男子高校生（現在救世主）天枷星であった。

村跡中央部。

少ない村人を集めるのに、それ程苦労はしなかった。というのも、村人達は複数人であることがほとんどで、各所をくまなく探す必要があまりなかったのだ。

本日二度目の災難に怯える村人達に向かって、カノンは、モンスター出現の旨を説明した。

男達はいきり立つ。全ての元凶タナトスに。

女子供、老人は嘆き悲しむ。なぜこの村が破壊されなければならなかったのか、と。

ともかく。

現時点での最大の問題はモンスターだ。もしかしたら村跡の中にモンスターが潜んでいるかもしれない。

「ここはディオネが来るのを待った方がいいわね」

「ああ。……それにしても、酷い有り様だ。本当に、村人達はその後どうなるんだろうな」

村人達に活力があれば、また村を興すこともできるが、皆が絶望にうちひしがれたままであれば……。

依然として燃え盛る炎は、村人達の闘志の具現化か、或いは村人達の心さえも焼き尽くす悪夢の災禍か、どうなるのかは村人次第だ。

その頃。

ザシュツ。

何層もの風の刃に切り裂かれ、モンスターは消滅した。

「これで終わりか」

三日月を手に、ディオネは呟く。

「やはり、魔法は疲れるな」

言葉とは裏腹に、彼女から疲労はあまり感じられない。

彼女程の魔法の使い手ともなれば、魔力の精密なコントロールも可能なのだ。

「戻るか」

ディオネは、星、カノンが待っている場所へと歩を進めた。

29、蝕む狂気（前編）（後書き）

なんか短いすね。

私は基本的に夜に小説を書いているのですが、話が思い浮かばない上に眠くて眠くて。文章力と想像力は日々養っていくものなんですね。

それではまた。

30、蝕む狂気（後編）

人間には、強い人間と弱い人間がいる。

抽象的に強い弱いと言ったところで、その二点は様々な事柄において人間を分けられる。

単純に、力が強い人間と弱い人間。

何かをする技能、例えば、ゲームが強い人間と弱い人間。

そして、心が強い人間と弱い人間。この点においては、後者の方が多いのではないだろうか。

例えば、部下が上司に金を積み昇進することが行われるのは、上司の、金銭欲が部下の悪行を咎める正義の心に勝る、つまり心が弱いためだ。

心の弱い多くの人間は、自分の利益を最優先にして行動する。そして時に身の破滅を招くのだ。

かつて、タナトスと名乗っていた一人の木こりがいた。実名はウツダー。

彼は、本物のタナトスから差し出された創造の粉の力に魅入られ、最後には自己の破滅を招いた。

廃れて間もない村。

ここにも、創造の粉の力に魅入られた人間がいた。

「きやあつ!？」

女性の悲鳴。

全員が一齐に悲鳴が聞こえた場所に振り向く。

恐怖に震える女性がいた。その女性の首筋にはナイフがあてがわれており、一筋の血が流れている。

ナイフを手に持つのは、四十歳ぐらいの一人の男だ。

周りにいる村人達が急いでその場から離れる。

「あんたはっ!？」

星が驚いたような顔で叫ぶ。隣でカノンも同じような顔をしてい

る。

その男は、ついさつき二人が助けた、モンスターに襲われていた男だった。

男は言う。二人に向かって。懐から小さな小瓶を取り出しながら。

「俺はなあ、この粉を渡され、お前らを殺せと言われたんだ」

誰に、などと聞くのは愚問だろう。

「だが、それでお前に得はあるのか？」

「力だ。お前らを殺せば、俺は更に多くの粉を手に入れることができる」

「力を手に入れて何になるんだ!？」

「力さえあれば、何不自由なく暮らしていける。金は奪えばいい!

盗賊なんかに襲われても返り討ちにできる! どうだ、最高だろ

う?」

「……………」

それでは自分が盗賊となり、結局は同じ、苦しむ人間が増えるだけだ。

女性は依然としてナイフを突きつけられており、とても自力で脱出できるようには見えない。

男を無駄に刺激してはいけない。女性の安全のためにも。そのうえで男を説得し、女性が無事に解放されれば最上なのだが……。確実に女性の命は守らなくてはならない。

(くそ……どうすればいい)

星は考える。

説得は難しいだろう。星自身が何かした所で女性を無事に助け出せるとは思えない。カノンの魔法、身体能力でなら或いは助けられるかもしれないが、男自身こちらに注目しているし、女性の首筋にはきつちりとナイフが突きつけられている。よって確実ではない。

村人に頼るのは論外だ。

(残った手は)

突然、男が持つナイフが何か衝撃を受けて手から離れ、創造の粉

となって消えた。

超圧縮された風がナイフをピンポイントで弾き飛ばしたのだ。

風の砲弾、とでも言うべきか。

放ったのもちろんディオネ。

男は突然手から離れたナイフに啞然とし、その間に僅かだが隙が生じた。

カノンは、ナイフが弾き飛んだ時点で足に電光を発生、その勢いで一気に男のもとへと跳躍した。そして男に電撃を浴びせ、気絶させた。

女性は腰を抜かし、その場にへたりこんだ。

駆け寄ってきたディオネは、星とカノンに話し掛ける。

「外周をたむろするモンスターは全て倒してきたが、どうやら村内では何かあったみたいだな」

「ええ」

と言つて、カノンは事の次第をディオネに説明した。

「なるほど。……しかし村人が創造の粉を持っていたとはな。あの粉が造るものは偽りだ。強さなどではない。表面上の効力に惑わされ、己を見失ったか」

創造の粉。それは使用した者の精神を蝕む狂気の粉だ。

（まるで麻薬だな……）

星は思った。

しかし創造の粉とはいささか不思議な代物である。ただの粉が、生命体になり人を襲う、身体の構造を変化させる、色々な道具を創る、はつきり言って何でもありなのではないだろうか。汎用性も高いし、ゲームに出てきたら確実にチートクラスである。

「それはさておくとして、この男をどうするかが当面の問題だな。創造の粉を取ったうえで自由にするか、軍かなんかに引き渡すか、それとも殺すか」

殺す、という単語に星は生々しさを感じた。地球、というか日本にいた頃は、たまに聞いていた言葉だ。あっちでは、殺すなどと言

った所で本当に殺すことは普通の人間ならまずない。だが、ここは日本とは違う。あちこちにモンスターがはびこっているし、人間同士の殺し合いだって起こる。

「とりあえず、起きるまでまっってみましょ」

カノンが言った。

「まあ、そうだな。では、残った村人と話してみるか」

ということ、気絶している男が起きるまで、村人の話を聞くことにした。もちろん創造の粉が入った瓶は取った上で、だ。

村人達は皆、幾分か憔悴した表情で座り込んだり、倒れる男に向かって怒りの目を向けたりしている。

と、ディオネ達が村人のもとに行こうとすると、一人の村人がこちらに歩いてきた。

二十代半ばぐらいの青年だ。服は、村人のほぼ全員に言えることだが、あちこちが汚れたり破れたりしまっている。顔も随分とやつれているように見える。

彼は言う。

「僕は、この村　今では村とは呼べない有り様ですね　、この、そう、廃墟の長だった男の息子です」

だった、ということは、すでにこの世にはいないのだろう。埋めた人達の中にいたかもしれないが、ディオネ達には誰が誰だが分からなかった。長のこと知る由がない。

「何で、僕達の村がこんなことにならなければいけないんです。あの男　ズゴソがやったんですか？」

彼は倒れている男　ズゴソというらしい　を指差す。

「いや、おそらく、タナトスという男だ」

それは、ズゴソが持つ創造の粉の量ではこんな大規模な破壊は起こせないだろうということ根拠にしているのだが、一般人が創造の粉について知っていることにはない筈なので、あえて言わないでおく。

「そうですか……」

村人はホツと息を吐いた。少なくともズゴソが村人達を殺戮した訳ではないと分かったからだろう。

「あの男は、この後どうするんだ？」

とディオネが問うた。

「他の村人達と話し合っただのですが、ズゴソにナイフを突きつけられていた女性が、彼にはこの村にいて欲しくないと言ったのです。

なので、軍に連れて行こうと思います」

「そうか。まあ、軍なら悪いようには扱わないだろう」

軍とは、地球上での軍隊と同じく、統率された軍人による集まりだ。ウエリアルには二十箇所の軍事拠点が存在しており、各地の防備、治安維持などを行っている。規律が厳しいので、よほどの犯罪者でなければ、軍にて更生し、そのまま働くことができるのだ。

それでは生き残った村人達はその後どうするのか。

死んだ村長の息子は言う。

「僕達は今でこそ皆意気消沈していますが、必ず村を復興させます。必ず」

それは村長の息子としての使命感だけではなく、一人の村人として、もとあつた村を復興させる強い意志が感じられた。

と、ガサツと物音が聞こえた。気絶していたズゴソが起きたのだ。ディオネ達は、そちらに向かう。といっても直ぐ近くなので、ほとんど歩かない。

ズゴソは、仰向けのまま虚ろに空を見上げていた。抵抗する気はなさそうだ。もつとも、抵抗した所で意味はないのだが。

「村人達は、お前を軍に連れて行くと決めたようだ」

「……そうか」

一言。そして黙る。

「お前に幾つか聞きたいことがある」

「……何だ」

「お前に創造の粉を渡したのは、どんな奴だ？」

「赤い髪に、黒いマントの男だ」

案外正直に答えるズゴソ。

「やはりタナトスか。……では次の質問だが、創造の粉を所持している時のことを鮮明に思い出せるか？」

「ああ。あれを忘れられる訳がないだろう」

「ふむ。では、その時どんな気分だった？」

「今だから不思議に思うが、気持ちよかったんだ。俺は強い力を得た選ばれた人間なんだ、と思ってな」

「なるほどな。聞きたいことは以上だ」

そう言っただイオネは質問を終えた。ズゴソは、なぜこんなことを聞いてきたのか、といった顔を一瞬したが、直ぐに虚ろな顔に戻る。

「では、そろそろ私達は行くか」

その言葉に、星とカノンは、

「そうですね」

「そうね」

と同意する。

「何かお礼をしたい所ですが、すみません」

故村長の息子は、律儀にもお礼をなどと言ったが、確かに村がこの状況ならば、渡すためのものはない。わずかに残った食料は生き残った村人達の分ではいいの筈だ。

それに、別に見返りが欲しくてやったことではない。だから、デイオネは彼に笑い掛ける。

「君達で新しい村を興し、豊かに暮らしていけばそれで十分だ」

そうして、星、カノン、デイオネは、再びアグライアのもとへと旅を始めたのであった。

30、蝕む狂気（後編）（後書き）

皆さん、こんばんは。遅くなりましたが、後半です。各部分、
というかパートというかをかなりはしよってる感がありますが、と
りあえずはこんな感じで。

次回も一、二週間ぐらいだと思います。それでは。

31、謎のレポート

星、カノン、ディオネが廃墟の村を出て、早一キロメートル。

身体面でも精神面でも非常に疲れている星とは違い、カノン、ディオネからは疲れは感じられない。

いや、感じられない、と言えば嘘になる。身体の疲労は無きに等しいが、カノンもディオネも精神面ではそれなりに疲れていた。たくさん死体を見たのだ、無理もない。というか、たくさん死体を見て心が少しも痛くならない者はもはや人間とは呼べないだろう。

ということ、そんな時は必然的に言葉数も少なくなる訳で、星はただ黙し、カノンは彼に声を掛けようとするが良い言葉が見つからず、ディオネは考え事をしている。

依然として三人の後方の廃墟からは煙が立ち上っている。元村長の息子、今では村長、か 彼が新しく村を作ることができるのかどうかは、生き残った人々にかかっている。彼らは辛い現実から逃げず、死んだ人々の分まで生きていかなくはならない。彼らが死んでも、死んだ人々が報われる筈がない。

星は思う。自分は、死んだ人々を含めたこの世界の人間を本当に救うことができるのか、と。カノンに優しい言葉を掛けてもらってもその疑問は消えない。

大体、自分は救世主などと言ったって、救世主らしいことは何一つしていないではないか。

雨が降ってきた。

立ち上る煙はたちまち消え、村人達にとってはまさに天の恵みだろう。しかし星にとっては、自分の不甲斐なさに天が泣いたかのごとく思われた。

内心で溜息を吐く。

強くなりたい、とはもちろん思う。だが彼は、強大な力を望みす

ぎたが故に破滅したウツダーやズゴソのようにはなりたくない。というか、なつては困る。

強大な力とは、努力してやっと手に入る代物だ。一朝一夕で手にすることが出来る程安くはない。

覚醒していきなり最強の力を手にするゲームやアニメの主人公とこのもたくさんいるが、基本的に、覚醒するまでが長い。やはりゲームやアニメの主人公達も努力して強くなつていくのだ。

(俺もいつかは強くなれる筈だ。それまで頑張ろう)

弱者は弱者なりに頑張ればいい。日々努力を怠らなければ、きっと強くなれるのだから。

ところで、現在三人は走っている。雨宿りできる場所を探すためだ。傘など三人とも持っていないので、濡れないように早く屋根がある場所を見つけなければならぬ。

と、少し走ると前方に一軒の木の小屋が見えた。

「あそこで少しばかり休ませてもらおう」

ディオネが言った。

星とカノンも同じ考えなので、異論はない。

小屋に着くと、ディオネが扉をコンコンと軽く叩く。

十秒程経つても返事はない。

更に叩く。が、結果は同様、返事なし。

「誰もいないのか」

ディオネはそう言いながらドアノブを回し、引いてみる。

開いた。

「……………」
「……………」
「……………」

このまま突っ立っていても濡れるだけなので、無言で入らせてもらおう。

外から見てもそうだが、部屋は一部屋。特別大きい訳ではなく、小さい訳でもない。中は汚れているように思われたが、たった今掃

除を終えたかのように埃一つ無い。

「さつきまで人がいたのかしら」

「ああ、なんつうか……不自然だ。外から見た時より明らかに木が新しい」

何かありそうな小屋だが、雨宿りできるだけでもありがたい。

というか、何かあった。

部屋に置いてある唯一の家具、木製の机。その上に、明らかに、誰か見てください、という感じに紙が数枚置いてある。

「読んでみようか？」

「そうね」

「そうですね」

一番上にある一枚を、ディオネが読んでみた。両隣には星とカノンが立ち、紙を見つつディオネの音読を聞く。

「では、この文章を読んでいるということは、君はこの小屋を見つけることができたようだね。この小屋は幻術によって普通の人間には見えないようにしてある。見ることができた君は、魔法を使う者である筈だ。と、まず君が疑問に思っているようなことについて書いておいたが、そろそろ本題に入ろう。君はモンスターのことは知っているかな？ 知っていると信じて先を続けさせてもらおう」

「いったん切る。」

「魔法を使う者が見ることができ、ってことは、やっぱり俺も魔法が使えるのか？」

夢でアグライアが言っていたことが思い出される。

本当に危なくなったら、剣を振り、エクレンドと唱えよ。彼女が言ったのはこのようなことだが、その呪文を唱えれば星も魔法が使えるのか。おそらく使えるのだろう。もし星が魔法を使えないのだとしたら、この小屋を見ることができない筈がないのだから。

「だが、これを書いた者が嘘をついていたとしたら話は変わってくる」

ディオネが言った。

書いてあることが偽りだしたら、ここはたとえ魔法が使えなくとも見える、いたって普通の小屋ということになる。その場合、星が魔法を使えるか使えないかははっきりしない。

だが、問題はそこではない。真に求められるのは、この紙に書かれていることの真偽だ。

星達はこれを書いた人物のことを知らないが、これが真実なら、幻術などというものを使えるくらいだから、普通の人間でないことは確かだ。それに、なぜこのレポートを書いたのか、書いた本人はどこに行ったのか、そしてそれは誰なのか、というもつともな疑問も生じる。

書いた人物が分からない以上、嘘をつく理由がないとも言いきれない。

「……信じてみましょ、これを書いた人を」

カノンがゆつくりと、丁寧に言った。下手に、なおかつ適当にこういう発言をすると、かえって場が乱れる可能性がある。

「そうだよな。疑ってばかりじゃ何も始まらない」

と星が言い、ディオネも、

「それに、モンスターのことが詳しく分かるならば、これからの旅においても十分に意味を為すだろう」

と言って頷く。

情報が少ない以上、貴重な情報は嘘か真か分からなくても手に入れておくに限る。

「では先を読むぞ。『十年前に突如現れたモンスターだが、奴らは創造の粉という、文字通り何でも創造してしまう粉によって創られた生命体だ。モンスターはあちこちに現れ、人々に害を与えていった。創造の粉を創った人間は、タナトスという一人の科学者だ』」

ここまでは大体私達でも知っていることだったな。タナトスが科学者だったというのは知らなかったが」

三人にとってすでに自明の情報が書いてあるということは、少な

くともこれを書いた人間は、嘘は書いていないということになる。
先を続ける。

「『彼については実の所よく知らない。十年前に何があったのかも彼の目的が何なのかも。元科学者仲間に話を聞こうとしたのだが、一人も所在を特定することはできなかった。その間にもモンスターによる被害は増えていった。なので、モンスターについて情報を集めることにした。モンスターは、いつもは森や山、海などに住んでいるが、時に大群で村や町などを襲うことがある。それはなぜか。タナトスに聞いてみなければ分からないが、良いことのためでないことは確かだ。私にできるかは分からないが、全力でタナトスを止めなければならぬ。話はモンスターのことに戻るが、奴らに知能というものはおよそ皆無だ。罾を仕掛ければ何をせすとも勝手に引つかかるし、大群にも関わらず襲撃のタイミングはてんでばらばらだ。そしてこれは一番大事なことだが」

区切る。

軽く息を吐き、再開。

「『モンスターが襲った村や町は、全てが幸福でいて繁栄している所だった。これもタナトスが関係していることは間違いない。私はこれから再び調査に赴く。そして、タナトスを見つけ次第、倒す所存だ。では、これを読んでくれる諸君への幸福を祈り、ここで筆を置かせてもらおう』」

31、謎のレポート（後書き）

皆さん、こんばんは。物語を考えている最中に寝落ちを何回かしつつも、なんとか投稿です。ああ、なんだか頭が……。では皆さん、おやすみなさいzzzz

32、元氣ジューズ

レポートはそこで終わっていた。

思った程詳しく書かれてはいなかったが、貴重な情報を得られた。今までモンスターが襲撃した場所が、裕福な町や村であること、だ。

貧しい生まれ、もしくは一方的な虐げを受けてきた者が、妬みや憎しみから、幸せに生きている人達に害を為す、というのはよくあることだ。もちろんよくあってはならないのだが。

あくまで例えばだが、タナトスが子供の頃恵まれない生活をしてきて、成長するにつれ心が歪んでいったのなら、人々を虐殺する理由にはなる。歪んだ心故に人を殺してもなんととも思わないし、あつたとしてもただの快樂だ。

だが虐殺が許される訳がない。

タナトスによって家族や愛人、友人などを殺された者はたくさんいるだろう。

結局、一方的に自分の憂さを晴らしたところで不幸になる人が増えるだけだ。

「このままタナトスに虐殺を続けさせる訳にはいかない。早めに探し出して倒さなくてはならないな」

「ええ、だけど……」

「ああ、アグライアの許に早く行かなければならない、だろ？ それならこうするのはどうだ？ タナトスの居場所について情報を得次第私が向かい、倒す。その間にお前達は旅を続ければいい。私はタナトスを倒した後、直ぐに合流する」

ディオネは真剣な表情でそう言った。

今ディオネが一人でタナトスを探し出そうとしても、その間に星とカノンが狙われては、後悔では済まない。かといって三人でタナトスを探し出しては、確実にアグライアの許に到着するのが遅れる。

これからの旅路で何が起こるか分からない以上、そしてウェリアル
の滅びを阻止するため、それは効率が悪い。

「……分かったわ」

少々静寂を挟んだ後、カノンは一瞬星を見てから言った。

異論はないので、星も黙って頷く。ここは自分が何か言うより強
大な力を持っているカノン、ディオネに任せた方がいいと自覚して
いるのだ。

「そうか……ありがとう」

タナトスはディオネに任せることに決まった。

そして話はレポートのことに戻る。

「ところで、この手記だが……書いた人間が魔法を行使できるのな
ら、人数はかなり絞られる」

魔法はそう簡単に使える代物ではない。先天的に魔力を持ち合わ
せていなければ使うことは不可能だ。そのような人間は極限られる。
星達に分かっているだけでも、アグライア、ディオネ、クレイオー
の大賢者三人、カノン、このレポートの筆者、そして、星だ。

「ディオネは　大賢者は、魔法を使える人達を全員知っている訳
じゃないの？」

カノンが尋ねる。

「ああ、知らなかった。ここウェリアルも広い世界だ、魔法を使え
る者が私達の他にいてもおかしくはないが……。」

魔法の達人中の達人である大賢者が、ウェリアルでも数える程しか
いないという魔法の使い手を全員把握している訳ではないというの
は、ある意味驚きに値する。

しかし、極めて稀だが、魔力を持って生まれてきさえすれば魔法
を行使できるということになる。

「だが、魔法は使いこなせるようになるまでが難しい。それに、普
通は自分に魔力が宿っていることさえ気付かないものだ」

魔法を知らない者がもし偶然魔法を発動してしまっても、それが
魔法だと気付くことはない。魔法が廃れた今の時代、魔法自体を知

らない者も多くいる。よって、魔力を持って生まれた者でもそれに気付かずに生涯を終えてしまうことがほとんどだ。

このレポートを書いた者は明らかに魔法を知っている、非常に珍しい人間だ。

「まあ、これを書いた者はタナトスを追っているようだし、いつか会うことになるだろう」

レポート談義、終了。

雨は弱くなってきたようだ。この小屋には窓がないが、外から聞こえてくる雨音が小さくなったことから分かる。この小屋に入ってから、三十分程が経っている。どうやら少し長めの通り雨のようだ。と、ぐううう、という音が小さい小屋中に響いた。

腹の音だ。星の。

「あはははは」

星は顔を赤くして頭を掻きながら笑う。

もう昼だ。

「ふふつ。じゃあ、昼食にするか」

ディオネが言うと、

「ええ」

とカノンが微笑みながら言い、

「そうですね」

星も、相変わらず頭を掻きながら言う。

複数人でいる時に腹が鳴ると、結構恥ずかしいものだ。

それはさておき、ディオネは持ち物から、謎の紙パックを三つ取り出した。日本の自動販売機で売られている紙パックの飲み物より少し大きいくらいの、四角形のそれだ。

ディオネは紙パックの上部を手刀ならぬ指刀で開くと、机の上に置いた。

「これは、元気ジュースという飲み物だが、一パック飲むだけで本当に元気になるぞ。しかも栄養満点だ」

結構ある胸を張って、誇らしげに言う。

「あの……これだけですか？」

星は頬を引きつらせながら尋ねる。それは無理もない。ディオネはこれ以上何か食べ物を取り出したりはしなかった。昼食は本当にこれだけ、なのだろう。

「これだけだが。まあ、騙されたと思って飲んでみてくれ」

「は、はあ。じゃあ、いただきます」

そして、女性二人が見守る中、一気に元気ジュースを飲み干した。数秒後。

「！？ 何だろう、腹いっぱい飯を食ったみたいに、満足な感じだ。しかも、今までの疲れがすーっと取れていくようだ」

とても驚いたような顔で星は元気ジュースを飲んだ感想を述べる。「だろう？ 手軽に栄養を摂取できて、しかも美味い。しかし、これはなかなか手に入れることができない。旅商人がたまに売っているのを買っしかないんだ。一回自分で作ってみようとしたことがあるのだが、いかんせん材料が不明なので、よく分からない謎の飲み物ができてしまった。味は……そうだな、カノンの料理を食べたことがあるなら、それを思い浮かべてもらえばいい」

「それってどういう意味！？」
「すかさずカノンが反応する。」

「いや、その、まあ、凄く美味いって意味だ」

明らかを嘘っぽいディオネの態度に、星は苦笑いし、そんな二人にカノンはジト目を送る。

「それは置いておくとして、私達も飲もう」

少々腑に落ちない感じのカノンだが、机上に置かれている元気ジュースの紙パックを二つ取り、一つをディオネに渡す。

「ありがとう」

そして、星同様一気に飲み干す。

「ん、雨の音がしなくなっただな」
星が呟く。

「止んだのかな」

「そつだろつな。それでは、昼食も食べた、いや、飲んだか。まあとにかく、そろそろ発とうか」

この小屋にはもう何もなさそうなので、三人は小屋を出た。外は太陽が燦々と輝いていた。

32、元氣ジュース（後書き）

皆さん、こんばんは。またまた二週間も経つての投稿となってしまいました。いやはや、ネタが浮かばない。この後は、いかにもRPGにありそうな話になるかもしれません。お城が出てきたり、救出イベントが発生したり。まあ、なんというか……未定ですorz
更に、忌まわしき定期テストがそろそろ始まりますので、次話はまた二週間程先だと思えます。下手したら年明けかもしれません。ですが、今年中にあと一話は投稿したいですね。それでは。

33、魔法行使

「ぎよわー!?!」

突然、奇声とも叫びともつかない声が三人の耳に聞こえた。小屋を出た直後のことだ。

声をあげるは一人の通行人。

理由はおそらく……、

「見えないんだろうな。この小屋が」

つまりは、魔法が使えない通行人には、星達が何も無い空間から突然現れたように見えた訳だ。驚かずにはいられないだろう。

「だが、念のため聞いておくか」

そう言っただいオネは、通行人に、

「突然すまないが、あの小屋が見えるか？」

と尋ねるが、通行人は、

「い、いえっ! 何も見えません、はいっ!」

そして、スタコラと走り去っていった。

通行人にはダイオネは明らかに普通じゃない人だと思われただろう。実際、普通の人ではないのだが。

「あの小屋は魔法を使えない者には見えないというのはどうやら本当らしいな」

では、一体なんのためにあんな手の込んだ小屋を造ったのか。手記によると、小屋自体は特に変わったものではなく、幻術によって普通の人には見えないようにしてあるだけらしい。幻術とは、魔法の類だろう。

普通の人には見えない、ということとは、見せなくなかったのだろう。逆に魔法を行使する者にしか見えないというのは、魔法を行使する者には是非とも見つけて欲しかったと考えられる。魔法を知らない、知っていても使えない者にタナトスのことを説いたとて何もできないと思っただろうか。別に魔法が使えないからといって弱

いと言え、それは嘘になる。カノンやディオネは、その身体能力の高さは常人のそれより圧倒的に高いし、他にも強い人はたくさんいるだろう。

しかし、魔法を使えば強いというのは確実だ。

魔法を行使する者。

星、カノン、ディオネの三人に見えて、そこら辺を歩いていた通行人には見えない小屋。もはや星が魔法を行使できるのは確定だ。

「俺も、俺にも、魔法が使えるのか」

現実感がない、というように星は呟く。

「使えるさ、きっと。試してみるか？」

「はい！」

とは言うものの、ここは道の近くだ、通行人がたまに通るのが窺える。

三人は、道から少し離れたところに生えている、人気のないちよつとした茂みに向かった。

星は期待と不安で表情を硬くする。

「確か、星君が見た夢でアグライアが言ったのは……」

剣を振り、エクレンド、と唱える。

そうすれば魔法が使える、と明確に言われた訳ではないが、助けになるとは言われた。いずれにしろアグライアの言だ、きっと星にとって、エクレンドと唱え魔法を発動させることが、救世主としての大きな転換点となるだろう。

カノンとディオネは星から少し離れる。近くには邪魔だと判断してのことだ。

星は、なぜか着用しているジーパンと黒シャツをパンパンと叩いて汚れを落とす。その後大きく深呼吸。

緊張で心臓の鼓動が速まる。

彼は以前、まだ中学生だった頃に全校生徒の前でスピーチをしたことがあるが、今はその時の十倍は緊張していた。もし魔法が発動しなかったら、もし大爆発でも起こってしまったら……そんな不安

は拭いきれない。

その一方で、やはり、確かな期待も不安に負けないくらい心に存在した。何事も期待通りにいけば言うことはない。しかし、期待というものは案外あっけなく消滅する。残念な結果によって。

何か大変なことを成し遂げようとするならば、過度な期待はせず、ある程度は失敗も考慮しておいた方が、いざ失敗した時の精神的なショックも減るということだ。

ゆっくりと、ウィーク村でもらった剣を抜く。この世界ではそこから辺で普通に手に入りそうな、ありふれた鉄製の剣だが、問題は無い筈である。

目を瞑る。

魔法を自由に使える自分を創造する。ウエリアルに飛ばされた日にデータが消えたRPGで、最強の裏ボスを倒した時に使った究極の魔法だ。もちろん魔法を使ったのは二次元上のキャラクターだが、目を開け、剣を頭上に構える。

「星君……」

カノンは静かに呟き、星を見守る。ディオネも同じような感じだ。

（魔法……こいよっ！）

そして

星は勢いよく剣を振る。

「エクレンドッ！」

大声で叫んだ。通行人に聞こえるとかは気にしない。

全力を込めて剣を振ったため、星は前のめりになり、剣は地を軽く抉る。土が靴上に飛散する。

一秒が過ぎたが、何も起きない。

その時点で、カノンとディオネの顔には焦りが見て取れた。

一分程が経っただろうか。茂み周辺では何も起こらない。

星の額には汗が溜まり、指は震える。

彼は理解した。

そう、失敗、だ。魔法は発動しなかったのだ。

「なん、で……」

掠れ、震えた声が漏れる。失敗が理解できない。

と、カノンが思い出したように言う。

「まって、星君。夢でアグライアが言っていたことを思い出して」

その声を聞き、星は冷静になるよう必至に努める。瞼をギュツと閉じ、動揺を静める。こんな時に限って、いや、こんな時だからこそアグライアの台詞が一字一句正確に思い浮かんだ。

「モンスターなどに会い、本当に危なくなったら、剣を振り、エクレンド、と唱えなさい。必ず助けになる筈です……まさかっ!？」
気づく。

「ようするに、逆境やピンチになったら使えるってことか」

脱力。膝から崩れ落ちる。そんな大事なことを考えていなかったとは、我ながら不覚だ。しかし、ピンチの時になっても魔法を発動できなかったら、それはそれでヤバイ。

カノン、ディオネが苦笑する。星は自嘲の笑みをこぼしながら剣を鞘に納めた。

「なんか、ごめん。無駄に期待させちゃって」(ったく、アホか、俺は)

自分がとんでもなく残念に思えてくる。

女性二人が星の方に歩いていき、膝をつく星に合わせてしゃがんだ。

ディオネは慰めるように言う。

「案ずるな。前にも言ったが、魔法はそう簡単に発動できるようなものではない。だが……ピンチになったら発動できる、か。そんな状況にならないのが一番だが……もしなったら、直ぐに今のようになってしまう」

それに星は、

「はい」

と短く答える。流石にまだ動揺が治まった訳ではない。自分にはどんな魔法が使えるのだろうとドキドキしていた結果がこれでは、

いい気分にはなれないだろう。

と、突然星はカノンに言う。

「俺を殴ってくれないか？」

「へ？」

呆ける。いきなり殴ってくれなんて言われたらそういつ反応をするのは当たり前だ。黙って殴る者はそんなにいないだろう。

だが、カノンは星を見て察した。ああ、彼は自らを罰するためにそんなことを言っているのだ、と。

カノンは星を見返し、頷いた。

拳を握り、思い切り振る。思わずといった感じで目を閉じた星に彼女は　コンッ、とデコピンをした。

「痛てっ」

と反射的に言っただけ星は目を開ける。珍しくカノンがムスツとしていた。「アグライアの言葉を忘れていた星君に非はある訳だけど、それは私やディオネにも言えることだわ。だから、そんなに自分を責めないで」

そう言った後、こんどは微笑を顔に浮かべる。「それに、私だって最初から魔法を完璧に使いこなしていた訳じゃないわ。ひたすら練習を積み重ねて、やっと今の自分になれたの」

「本当、に？」

信じられない、といった表情で星はカノンを見る。カノンのことだから、最初から自由自在に魔法を使いこなしていたものだと思うていたのだ。「ええ、本当……。だから、鍛練を怠らなければ星君もいつかきつと魔法が使えるようになるわ」　星はみるみる顔を輝かせる。さながら小さな子供のようだ。

たとえ今魔法が使えなくとも、次第にその片鱗を習得していけばいい。そして実戦で思い通りに使いこなすことができれば、合格だ。落ち込みやすいが、立ち直りも早い、意外と子供っぽいところがある星であった。

33、魔法行使（後書き）

皆さん、メリークリスマス。朝起きたら枕元にお菓子の詰め合わせが置いてありました。サンタクロースが置いてくれたのでしよう。

で、今話についてですが、もっと早く投稿する筈だったのが、この前買ったPS Vitaをやりまくっててなかなか書く気が起きなかったのです。すいません。

内容的には……星がなんかへタレっぽくなっていくような……。いや、ちゃんと主人公らしい働きはしますよ、いずれ。

次話の投稿は来年になると思います。というかなります。

とまあ、なんだかネタもなかなか浮かばず残念な私ですが、今後とも《異世界物語》剣と少女と少年と》をよろしくお願いいたします。

それでは、よいお年を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5525s/>

異世界物語～剣と少女と少年と～

2011年12月26日01時48分発行